



特定非営利活動法人  
ふれいす東京

ToKyo

# 2013年度 年間活動報告書

---

## 目次

---

### 1. ご挨拶

21年目の活動のはじまり .....	2
--------------------	---

### 2. 部門報告

事務・総務 .....	3
-------------	---

ホットライン .....	10
--------------	----

Peer Empowerment Program オトナの女性部門 .....	18
---	----

Gay Friends for AIDS.....	20
---------------------------	----

ネスト .....	26
-----------	----

バディ .....	42
-----------	----

HIV陽性者と周囲の人への相談サービス .....	46
---------------------------	----

研究・研修 .....	55
-------------	----

### 3. 研究報告

厚生労働科学研究報告 .....	58
------------------	----

2014年4月、ぷれいす東京は21年目の活動に入った。この20年という時間の流れのなかで、HIV/エイズを取り巻く社会の環境も、地域に存在する課題も大きく変化した。

発足当初のぷれいす東京の活動は、電話による不安の相談、陽性者向けのシェルターの運営が中心だった。電話相談では、情報が少なくネガティブな疾病イメージに不安を抱く市民らからの相談に、知りうる範囲で具体的な情報を提供してきた。「HIVに感染していたら大変なことになる」、「感染がわかったら職場をクビになる」、「周囲の人たちは逃げていくはず」など、モンスター化したイメージに翻弄されている人たちに、相談を通して、彼／彼女らが自分の現状と向き合うための支援を続けてきた。

その一方で、HIV陽性者や周囲の人たちのなかには、ひっそりと息をひそめて生活している人たちが多くいた。彼／彼女らが安全に仲間と出会える場所、鎧を脱いで本音で語れるシェルターとして、「NEST」の運営を行っていた。病院の帰りに立ち寄れるスペースにてランチ・サービスを提供したり、地方から治療のため上京する人たちのために、宿泊スペースなどを用意していた。

こうした活動のなかから得られた経験値をもとに、ゲイ向け、女性向けの冊子制作がされるようになり、やがて、予防とケアをまたぐキャンペーンとして、LIVING TOGETHERが生まれることになる。

これは、ぷれいす東京のサービス利用者であった、HIV陽性者、パートナー、家族たちがゲイむけの冊子に手記を提供してくれたことが出発点となった。顔は出せないけれども、経験談だったら書いてもいいという人たちが沢山いてくれたのだ。その冊子を手にとり、手記を通してリアリティに触れることは、姿が見えにくいHIV陽性者がすでに共に暮らしているということ、多くの人たちに気づかせる力をもっていた。この事は、HIVの感染を予防するという意味でも、支援に携わる人たちの準備性を向上させるという意味でも役立つものだった。

LIVING TOGETHERを通してリアリティにふれ、HIVをより身近に感じることができるようになると、「伝え聞いてはいないけれども、周囲にいるかもしれない」という意識に置き換わることで、人々のコンドーム使用行動、HIV検査の受検行動、さらにはサービス提供者側の意識や行動にまで影響を及ぼすことになるのだ。こうした可視化されにくい課題に対するアプローチは、皆が同じと考えがちな日本社会のなかで、他の課題にも活用できる可能性をもっている。

2011年の震災以降、人々の価値観は大きく変化した。今後も、政治状況や経済状況もかわっていくかもしれません。現在、ぷれいす東京に新規に連絡をしてくるHIV陽性者の7割は、インターネットにより得た情報で連絡をしてくる。電話相談のように、匿名で双方向のコミュニケーションを取る事ができる手段はとても貴重なものであることは間違いない。しかし、情報を得る手段におけるインターネットの割合が高くなってきた現状のなかでは、ぷれいす東京が提供するサービスのあり方、そしてその手段を考えていく必要があるようだ。

来る2020年には、東京でオリンピック開催が予定されている。既に新宿地域でも、ホテルの建設ラッシュが続いているという。3月に開催した研究班の会議の際に、ホテルを手配しようとしたら、複数の部屋を確保することがかなり難しかったと担当者に聞いた。

昨年6月から今年1月にかけて、日本経済の振興策として、日・ASEAN友好協力40周年というタイミングもあったため、東南アジア諸国の人たちが日本に入国する際のビザの発給条件が緩和された。具体的には条件はあるものの、フィリピン国民(数次ビザの発給)、タイ国民(ビザ免除)、マレーシア国民(ビザ免除)、ベトナム国民(数次ビザの発給)、インドネシア国民(数次ビザ期間の延長)などだ。また、遅れて、ミャンマー(数次ビザの発給)、ラオス(数次ビザの発給)、カンボジア(数次ビザの発給)についても変更された。同時に、昨年8月には中国人の個人観光ビザ発給要件が緩和され、これまでの発給要件の「一定の職業上の地位及び経済力を有する者」が「一定の職業上の地位」を除き、「一定の経済力を有する者」と変更された。また、滞在期間もこれまでの15日から30日まで延長された。他にシンガポール、ブルネイなど、もともと駐日ビザへのアクセスがある国もある。

東京は、経済振興策という文脈ではあるが、国際都市としての性格がより強くなっていくことが予想されている。すでに、昨年のHIV陽性者からの相談では、東南アジアから東京にきているHIV陽性者からのアクセスが増えはじめている。

これまでの20年間、こうした現状の変化を、年間活動を報告するための作業を通して、皆様に報告してきた。そして、これからもこの作業をスタッフたちとともに続けていくことが、私たちの活動の方向性を決めるための重要な手がかりを得ることになるのだろう。

### 1. 2013年度のハイライト

#### ●「地域における当事者支援のためのスタディ・プログラム」

生島・佐藤・加藤

ネスト・プログラムは、ミーティングの安全を確保するために、参加者に、1) プライバシーの守秘を含むグラウンドルールの承諾と利用登録、2) 個々のミーティングの参加条件に合致するかどうかの事前確認を行っています。さらに、運営上も、個人情報の管理の徹底や、ミーティング会場に入れるスタッフを限定するなど様々な制約を設けています。そのため、これまで第三者のミーティング見学希望があってもお断りしてきました。しかし、東京以外の地域でHIV陽性者向けプログラムを実践している人たちが支援する必要性が高まっているを受け、ミーティング見学を含めた研修プログラムを開催することにしました。

この、プログラムの目的は、ふれいす東京がこの20年にわたり積み上げてきたプログラム運営のノウハウを共有し、各地のHIV陽性者や周囲の人たちへの支援の実践に役立ててもらおうことです。そのため、プログラムは、講義とミーティング見学を組み合わせた構成としました。今回は、いくつかのエイズ診療ブロック拠点病院と連携して参加者の募集を行ない、新潟からソーシャルワーカーが、鹿児島からは支援団体のメンバー2人が参加してくれました。

今回の研修を開催するにあたり、数ヶ月前からミーティング参加者たちに、プログラムの趣旨を説明してきました。「東京ではミーティングがあるが、地方では十分でないこと」、「地域でのあらたな取り組みを支援することが、各地のHIV陽性者や周囲の人たちの支援になること」など。

当日、大雪にもかかわらず、ミドル・ミーティング(40代以上の男性陽性者)は14人が参加し、U40(10～30代男性陽性者)にも4人が参加しました。見学者の3人には、ついたての後ろから様子を聞いていただき、最後に見学をした感想を自己紹介を交えて話してもらいました。

プログラム立ち上げや運営に関わる各地域の人たちを支援するこの研修会は、今後も継続していく予定です。ネスト・プログラムは東京という環境のなかで実践されているものですが、各地の取り組みにも役立つことがあるはずです。(プログラムの内容や参加者の感想はNL.81号をご参照ください。)

#### ● 東京都の就労支援冊子制作の受託

生島・大槻

東京都エイズ専門家会議は、さまざまな立場の人たちがテーブルを囲んでいる。2009年1月19日にとりまとめられた、東京都エイズ専門家会議「最終報告」のなかには、「働き盛りの世代に対しては、職域の担当部門への働きかけ等を通して企業内における健康管理に向けた取組を促すことが重要である」という文章が盛り込まれている。これを受けて、東京都は「職場とHIV/エイズハンドブック」の制作をNGOに委託

した。2012年度は日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスが「人事・労務・障害者雇用担当の皆様へ」を制作し、2013年度はふれいす東京が「HIV陽性者とともに働くみなさまへ」版を制作した。

今回の冊子では、ふれいす東京と交流のあるHIV陽性者、人事担当者などにアンケートに答えてもらい、それをもとに制作を行った。また、普段実施している職域での受け入れ前の研修会で、実際に寄せられている質問なども、可能な範囲で盛り込み、ともに働く職場においても役立つツールになるように心がけた。文章は簡潔な内容で短時間でも目を通しやすくすることなどをコンセプトにした。ビジュアルは写真を多用し、東京都庁にて撮影を行い事務所のスタッフ、知り合いのネットワークで集められた総勢5人のモデルがエイズ対策のテーブル、会議室などをお借りしてロケを敢行した。

東京都エイズ専門家会議小委員会(職域への普及啓発)を組織しているのだが、そこには医療関係者、行政関係者、NPO法人などに加えて、経済団体の代表者なども同じテーブルを囲んでいる。今後、職域でのHIV/エイズに関する普及啓発や情報提供をどう進めるか等について、検討が進んでいくものと期待される。

### 2. HIV/エイズ関係の講師派遣と学会参加

講師派遣のご依頼には、性教育やセクシュアリティ、福祉、心理などの専門家のスタッフが対応しています。講師派遣をご希望の方は、ふれいす東京Webサイトの「講師派遣・研修」のページ(<http://www.ptokyo.com/services/lecturers.php>)から「講師派遣依頼書」をダウンロードして必要事項をご記入の上、事務所にメール([office@ptokyo.com](mailto:office@ptokyo.com))かFAX(03-3361-8835)でご送付ください。

2013年度には、のべ6カ所(うち20カ所は教育機関)に出講しました。詳しくは、55ページからの「部門報告(研究・研修)」をご覧ください。

今年度はまた、以下の学会にスタッフが参加し、ふれいす東京の活動内容などから発表を行っています。詳しくは、「部門報告(研究・研修)」をご参照ください。

- ・10月23日～10月25日  
日本公衆衛生学会・総会(三重)
- ・11月18日～11月22日  
第11回アジア・太平洋地域エイズ国際会議(ICAPP)  
(タイ・バンコク)
- ・11月20日～11月22日  
第27回日本エイズ学会学術集会・総会(熊本)

### 3. 外部委員会への参加

生島や池上らが、国や自治体などをはじめとする外部機関にHIV/エイズ関係の委員として参加しています。

東京都内の医療機関などでは、行政や民間団体などと垣根を越えて連携しつつ、HIVにどう向きあっていくのかを協議する場が設けられています。ふれいす東京は、会議の場への参加のみにとどまらず、会議をきっかけとして保健所や医療機関からくる問い合わせや相談に対して積極的に協力を行っています。

- ・厚生労働省エイズ動向委員会 委員
- ・厚生労働省エイズ対策研究事前評価委員会 委員
- ・東京都エイズ専門家会議 委員
- ・独立行政法人国際協力機構(JICA)エイズ対策支援委員会 委員
- ・日本エイズ学会 理事
- ・日本性教育協会 運営委員
- ・公益財団法人エイズ予防財団「同性愛者等に対するHIV/エイズ予防啓発事業」連絡協議会 委員
- ・北多摩南部保健医療圏エイズ地域連携推進協議会 委員
- ・独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構「雇用管理サポート事業」 協力専門家
- ・財団法人友愛福祉財団 理事
- ・新宿区HIV/AIDS関係機関ネットワーク連絡会 委員
- ・東京都「若者の自立等支援連絡会議」 委員
- ・葛飾区エイズ連絡会議 委員
- ・一般社団法人ブリッジハートセンター東海「免疫機能障害者への支援と理解促進事業」検討委員会 委員

### 4. ふれいす東京事務所のご案内

- 事務所開所時間：月～土/12:00～19:00
- 事務所所在地：〒169-0075  
東京都新宿区高田馬場4-11-5 三幸ハイツ403
- 電話：03-3361-8964
- FAX：03-3361-8835
- E-mail：office@ptokyo.com
- 活動会員：230名(うち議決権をもつ会員：49名)
- 賛助会員：個人53名、団体1団体
- 役員名簿：理事の任期は2年で、現在の理事は以下の5名です。

- ・生島 嗣(代表・運営委員長を兼任)
- ・池上千寿子
- ・樽井正義
- ・根岸昌功
- ・宮田一雄

- 監事：常住 豊
- 事務所スタッフ：フルタイム2名、パートタイム7名
- 定例会議：事務局会議、運営委員会(毎月1回)  
理事会(随時)

#### ●業務受託事業

厚生労働省

- ・「HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業(ピア・カウンセリング等による支援事業)」

厚生労働省エイズ対策研究事業

「MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究」(研究代表者 市川誠一)MSMの受検促進のためのHIV検査担当者向け研修プログラムの評価調査

東京都

- ・東京都夜間休日HIV/エイズ電話相談
- ・東京都HIV検査情報webの制作  
(<http://pc.tokyo-kensa.jp/>)
- ・東京都によるゲイ雑誌への広告制作
- ・東京都の就労支援冊子「職場とHIV/エイズハンドブック～HIV陽性者とともに働くみなさまへ～」(PDF版)制作  
(詳細は、3ページ)

製薬企業からの事業受託/後援事業

- ・鳥居薬品株式会社の後援を得て、特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスとの共催で、「HIVとカミングアウト」&映画“The Hope of Love”上映会を実施(『Tokyo Rainbow Week 2013』参加イベント)。  
日 時 2013年5月6日(月・祝) 14:00～16:30  
会 場 家の光会館7階 コンベンションホール  
来場者 112名
- ・鳥居薬品株式会社の後援を得て作成した冊子「Living with HIV ～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたへ」の無償配布プログラムを準備中。また、冊子の手記とその活用方法などを紹介するWebサイトを制作中。
- ・ヴィーブヘルスケア株式会社の協賛による、特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスとの共同プロジェクト「とも・ナビweb ～HIVで通院されている皆さまへ～」の制作・運営

公益財団法人エイズ予防財団への制作協力

- ・動画コンテンツ「リアルに知るHIV・エイズ」の制作に協力

#### ●活動助成をいただいた団体

公益財団法人東京都福祉保健財団

#### ●寄付をいただいた団体

ヴィーブヘルスケア株式会社、MSD株式会社、LGBT支

援者交流会、オフィスTwo I、有限会社シープラスエフ研究所、聖公会東京教区11教会、中外製薬株式会社、ヤンセンファーマ株式会社(50音順、敬称略)

～以下は、募金箱によるご寄付～  
News Café(敬称略)

多くの個人の方からもご寄付をいただきました。お名前の掲載は控させていただきますが、心よりお礼申し上げます。

## 5. ぶれいす東京事務所の日常活動

ぶれいす東京の事務所は、月～土の12～19時にオープンしています。フルタイム・スタッフ2人、パートタイム・スタッフ7人に加え、事務所ボランティアの方々の協力もありました。ほか3人のスタッフが部門コーディネーターなどとして活動しています。

### ○部門コーディネーター

〔ホットライン部門〕	佐藤
〔PEP部門〕	いみ/みず
〔Gフレ部門〕	sakura
〔ネスト部門〕	原田
新人PGM	加藤
〔バディ部門〕	牧原
〔陽性者相談部門〕	生島
厚生労働省受託事業	佐藤
〔経理部門〕	伊澤

### ●新人スタッフ合同研修の実施

牧原

恒例の「新人ボランティアスタッフ 合同研修会」を今年度も行いました。今回で11年目を迎えましたが、多くの参加者があり、盛況のうちに終えることができました。毎年、新しいスタッフと出会えることは、他のスタッフにとっても刺激があり、うれしいものです。今回も講義形式とワークショップ形式を織り交ぜた、ぶれいす東京のオリジナルプログラムで3日間開催しました。

### ▼合同研修オリエンテーション

9月1日(日) 14:00～16:00

於：新宿NPO協働推進センター 参加者合計24名(個別も含む)

### ▼新人スタッフ合同研修

9月8日(日)・15日(日)・22日(日) 10:00～17:00

於：新宿NPO協働推進センター 参加者18名

講義は、1日3～4コマを3日間開催。1コマは50分～90分、休憩10分。プログラムの内容は以下のとおり。

### ○9月8日(日)

- |                          |       |
|--------------------------|-------|
| 1. 手記を読むワークショップ          | スタッフ  |
| 2. 社会的な背景                | 池上千寿子 |
| 3. 医学的基礎知識① HIVの基礎知識と検査法 | 福原寿弥  |
| 4. 陽性者の社会生活とプライバシー       | 生島 嗣  |

### ○9月15日(日)

- |                            |      |
|----------------------------|------|
| 1. セクシュアリティの多様性について        | 大槻知子 |
| 2. 医学的基礎知識② 性感染症の基礎知識      | 福原寿弥 |
| 3. セイファーセックス・リスクアセスメント     | スタッフ |
| 4. 相手のある保健行動～コンドーム使用と使用依頼～ | スタッフ |

### ○9月22日(日)

- |                       |           |
|-----------------------|-----------|
| 1. ネスト・プログラムの取り組み     | 加藤力也/佐藤郁夫 |
| 2. 制度や社会サービス          | 牧原信也      |
| 3. エゴグラムと交流分析         | 野坂祐子      |
| 4. 3日間の振り返り/今後の活動について |           |



振り返り

### ●各種助成金の申請書および報告書の作成

ぶれいす東京では、事務局や各事業の運営を維持拡充するために、各種団体に事業助成などの申請を行っています。助成団体などについての情報提供や、申請および報告作業などにご協力いただける場合には、事務所までご一報いただければ幸いです。

### ●Webサイトの運営

ぶれいす東京のWebサイトは、スタッフの日記やお知らせなど、PC版・携帯版ともにこまめに情報を更新しています。HIV陽性者とそのパートナーや家族、ともだちのためのサイト「web NEST」のほか、厚生労働科学研究班から引き継いだ「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」、長期療養シリーズのウェブサイト「HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代」など、情報豊富な各サイトも運営しています。

### ○WebサイトURL

- ・ぶれいす東京(PC版) <http://www.ptokyo.com/>
- (携帯版) <http://www.ptokyo.com/mobile/>

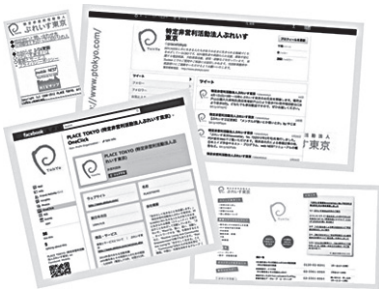


- ・ web NEST (PC版) <http://web-nest.ptokyo.com/>  
(携帯版) <http://web-nest.ptokyo.com/mobile/>



- ・ Gay Friends for AIDS <http://gf.ptokyo.com/>
- ・ 地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト  
<http://www.chiiki-shien.jp/>
- ・ HIV陽性者の視点で読み解く 長期療養時代  
特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラスと共催のプロジェクト「長期療養時代シリーズ」のウェブサイト  
<http://chokiryoyo.ptokyo.com/>

その他にも、Facebook(<http://www.facebook.com/PLACETOKYO>)やTwitter(<http://twitter.com/placetokyo>)といったソーシャル・メディアも活用し、Web上で随時情報発信を行っています。



### ●冊子などの制作物

ふれいす東京では、HIV陽性者のサポートや一般へ向けた予防啓発など、さまざまな活動の成果を冊子などの形にまとめています。これらの冊子類は、陽性者や周囲の人などの当事者、ふれいす東京にボランティアなど何らかの形で関わってくださっている方々、あるいは教育やセクシュアリティ、医療、福祉などの専門家をはじめ、広くさまざまな層へ向け原則有償実費にて頒布しています。

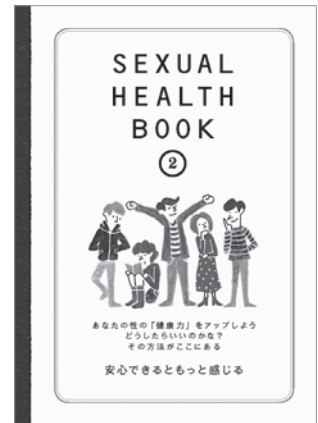
以下の冊子をはじめとする制作物をご希望の方は、ふれいす東京Webサイト「冊子・活動報告書」のページ(<http://www.ptokyo.com/publications/booklets.php>)から「印刷物等申込票」をダウンロードして必要事項をご記入の上、事務所にメール([office@ptokyo.com](mailto:office@ptokyo.com))かFAX(03-3361-8835)でご送付ください。各冊子類の内容も同サイトにて紹介していますので、ぜひご覧ください。

### ▼今年度の制作物

#### 【Sexual Healthシリーズ】

- ・『Sexual Health Book ②』  
2014年制作の新冊子(A6サイズ16ページ)。Sexual HealthシリーズのニューフェイスSexual Health Book ②が誕生

しました。感染予防、避妊、デートDVなど性の健康情報だけでなく、性の多様性とコミュニケーションのポイントについてもとりあげ、わかりやすく、しかも自分の事として気づくための工夫をこらしています。多くの若者に伝えたいメッセージが詰まっています。学校、家庭、職場などで教材として活用できます。



#### 【Living Togetherシリーズ】

- ・『Living with HIV ～身近な人からHIV陽性と伝えられたあなたに～』(後援：鳥居薬品株式会社)

2013年制作の新冊子(A5サイズ 60ページ)。この冊子には、HIV陽性者のパートナー、家族、友だち、職場の仲間など……、身近な人からHIV陽性と伝えられた人とHIV陽性者による計24編の手記と、基礎知識やデータを取りまとめた短いコラムが掲載されています。身近な人からHIV陽性であることを伝えられた人も、HIV陽性者と同じように、あるいはそれ以上に、自分事としてHIVという新たな難しさに直面する人が少なくないため、支援ツールとしてこの冊子が作られました。PDF版をWeb上からダウンロードすることもできます。



#### 【新パンフレット】

- ・『HIV陽性者とその周囲の人のためのサービス』案内  
カラフルな変形A4サイズ三つ折りのパンフレットです。ふれいす東京が提供している、HIV陽性者やその周囲の人のための相談サービス、参加型プログラムなどのサービス案内を掲載しています。主に、医療機関や行政等を通じて、HIV陽性者の方々に手渡していただくことを想定して、制作しました。



▼HIV陽性者へのケア活動を通じて生まれた冊子

(陽性者およびそのパートナー、家族には無償頒布)

- ・『Life & Medicine ～日常生活の中で 服薬を続けるヒント～』  
(制作：ぶれいす東京、発行：ヤンセンファーマ株式会社)  
2012年制作の冊子(A5サイズ4色刷り40ページ)。生活者の視点からHIV陽性者の服薬を支援することを目的に作られたツール。陽性者20名に対するインタビューと、全国の陽性者151名から回答を得たアンケートで構成。

PDF版は、ヤンセンファーマ株式会社のWebサイトでダウンロード・閲覧ができます。(http://www.janssen.co.jp/sickness/hiv)。

- ・『HIVをめぐる さまざまな人たち』(協賛：鳥居薬品株式会社)  
2010年制作の冊子(B5サイズ1色刷り56ページ)。「ぶれいす東京Newsletter」に連載していた「難しさと向かうこと」シリーズ4編と、新たに収録したインタビュー2編を掲載。

【長期療養シリーズ】HIV陽性者へのインタビューやアンケートをまとめた冊子

- ・『239人のHIV陽性者が体験した検査と告知』(共同編集・発行：日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、協賛：鳥居薬品株式会社)  
2011年制作の冊子(B5サイズ4色刷り40ページ)。10名のHIV陽性者へのインタビュー調査と、249名のHIV陽性者が回答をよせた検査と告知に関するアンケート調査で構成。

- ・『長期療養時代の治療を考える』(共同編集・発行：日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、協賛：鳥居薬品株式会社)

2009年制作の冊子(A5サイズ4色刷り40ページ)。147名のHIV陽性者へのアンケートの回答分析と豊富な自由記述で構成。

- ・『人とつながる 社会とつながる』(共同編集・発行：日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、協賛：鳥居薬品株式会社)

2008年制作の冊子(A5サイズ4色刷り36ページ)。HIV陽性者を対象とした既存の調査データの紹介と、2007年10月に行なわれたフォーカス・グループ・インタビューなどから抜き出したHIV陽性者の語りで構成。

- ・『長期療養生活のヒント』(共同編集・発行：日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、協賛：鳥居薬品株式会社)

2007年制作の冊子(A5サイズ4色刷り32ページ)。HIV陽性者124名へのアンケート結果などを掲載。

▼HIV陽性者の手記など「生の声」をまとめた冊子

【Living Together シリーズ】

- ・『Living Together “Our Stories”』

2005年制作の冊子(A5サイズ4色刷り36ページ)。さまざまな立場の方から寄せられた19編の手記とチャーミングな写真が、HIV/AIDSとともに生きている人もそうでない人も「すでにみんな一緒に生きている」ことを実感させてくれる。「Sexual Healthコラム」も収載し、学校や家庭、職場で活用できる教材。



・『Living Together LETTERS』

2004年制作の冊子(B5サイズ1色刷り20ページ)。HIV陽性者の手記を本人の手書き原稿のまま掲載し、おもにゲイ・バイセクシュアル男性向けに作成。

▼予防啓発活動を通じて生まれた冊子

【Sexual Healthシリーズ】

・『Sexual Health ゲーム編』

2005年制作の冊子(A5サイズ2色刷り32ページ)。授業やイベント、セミナー等で活用できる、「ゲームで遊びながら学ぶ性の健康」のノウハウが満載です。

▼その他制作物(詳しくはお問い合わせください)

・たんぼぼ

ぶれいす東京のスタッフが制作に協力し改訂を重ねた、東京都発行の新陽性者向け冊子。

・日本エイズ学会学術集会・総会 HIV陽性者参加支援スカラシップ 報告書(第20～27回)

ぶれいす東京都とはばたき福祉事業団、日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、エイズ予防財団が共同発行。

・ぶれいす東京年間活動報告書(2007～2012年度)

・Living Together Manual

・Hの強化書・実践編

・OUR DAYS

・OUR DAYS [Episode 2]

(過去の制作物—頒布終了)

・年間活動報告書(1994～2006年度)

・Sexual Health Book～Let's CONDOMing

・映像複合教材“Let's CONDOMing!”

・ストレスとつきあう

・服薬と生活

・Popteen CONDOM

・ぼくらのとなりのHIV

・Living Together

・Living Together～リアリティが変えるもの～

・陽性告知に関する調査報告書

・東京都の医療機関に通院するHIV陽性者の就労と職場のプライバシーに関する研究報告書

・公開シンポジウム「女性とエイズ」報告書

・Safer Sex Guidebook

・Safer Sex Guide Book for Women

・CONDOMing Book

・AFTER 18の性の現状

●マスメディアへの協力

今年度もテレビ・ラジオ番組、新聞や雑誌など各種メディアからの取材依頼がありました。新聞やゲイ雑誌の取材などにも協力・寄稿し、情報発信をサポートしました。また、研

究成果や相談対応に基づく情報提供、可能な範囲でのHIV陽性者の紹介を行いました。事前に企画書を提出していただき、内容の妥当性や取材協力者のプライバシーへの配慮などを確認しています。

・雑誌「SAPIO」(小学館)2013年6～8月号短期集中連載「エイズ -忘れられた病禍- [生島]

取材協力および男女の陽性者3人を紹介

・読売新聞夕刊 NPO紹介コーナー(9/19掲載)

・テレビ東京「TOKYOマヨカラ」[生島、佐藤](10/17 & 10/23放送)

・日本経済新聞 HIV誤解とき雇用を(10/29掲載)

・NHK ハートネットTV「福マガ10月号」[生島、佐藤](10/30放送、11/6再放送)

・NHK ニュースウォッチ9 取材協力および陽性者3人を紹介(11/29放送)

・読売新聞 エイズ30周年 関西を含む男女の陽性者3人を紹介(11/16, 22, 24, 26)

・中日新聞 HIV郵送検査について 取材協力(11/12, 15)

・エフエムおのみち 世界エイズデー番組に協力(11/24 & 2/1 & 12/7放送)

・TBSラジオ 荻上チキ・Session-22に出演 [生島](11/28放送)

・沖縄タイムス GRADiの「エイズデーの集い」[生島、佐藤](12/2掲載)

・NHK ハートネットTV ハートなブログへ投稿 献血報道について [生島](12/12掲載)

・中日新聞 HIV陽性者と就労について 取材協力(12/19)

・中日新聞/東京新聞「はたらく」 HIV感染、隠さず就労「障害者枠」活用に関心(12/27掲載)

・NHK あさイチ 事前取材協力(2/7)

・日本経済新聞 事前取材協力(2/7)

・雑誌「週刊現代」(講談社) 事前取材協力(2/25)

・日本経済新聞(全面広告) 日本におけるHIV/AIDSの現状と展望 インタビュー「HIV陽性者の社会参加をどう支えるか」[生島](3/26掲載)

・ゲイ雑誌「サムソン」に寄稿 2013年2月号(2013/4発売)～2014年5月号(2014/3発売)に連載

・ゲイ雑誌「BADI」に寄稿 2014年2月号(2013/12発売)より連載開始

(掲載、放送の記載がないものは、取材協力日)。

●協働プロジェクトの窓口・調整など

2013年度も、他団体との協働プロジェクトなどに引き続き参画しました。2006年より日本エイズ学会学術集会・総会の開催にあわせて実施している「HIV陽性者参加支援スカラシップ」(社会福祉法人はばたき福祉事業団、特定非営利活動法人日本HIV陽性者ネットワーク・ジャンププラス、公益財団法人エイズ予防財団と協働して運営)では、全国のHIV陽性者34名の学会参加を支援した

プログラムの運営に関わりました。詳しくは、Webページ (<http://www.ptokyo.com/scholarship/>) をご覧ください。また、「Living Together 計画」として、HIV のリアルティを伝えるプロジェクトを、特定非営利活動法人 akta と特定非営利活動法人ぶれいす東京が窓口になって行っています。

○ご寄付をいただける場合には、下記の口座宛にお振込をお願いいたします。また、会員の方が会費を納入いただく場合も、同じ口座宛をお願いいたします。クレジットカードによる寄付(1 回ごと/毎月の定額)もできます。また、2014 年1 月から、不要になった本やDVD、CD、ゲームなどを「BOOK 募金」に送ることで、ぶれいす東京に寄付ができるようになりました。

#### お振込先

・ ゆうちょ銀行振替口座 00160-3-574075

「特定非営利活動法人ぶれいす東京」

※ご送金いただく際に、通信欄に寄付か会費納入か  
ご一筆ください。専用の振替用紙もあります。

・ 三井住友銀行 高田馬場支店

普通預金 2041174

「特定非営利活動法人ぶれいす東京」

※銀行からお振込いただいた場合は、お手数ですが  
その旨をご連絡いただければ幸いです。

※カード決済による寄付とBOOK 募金の詳細は、  
ぶれいす東京 Web サイトの案内「寄付のお願い」  
をご覧ください。

(<http://www.ptokyo.com/donation.php>)

## 部門報告 (ホットライン)

### 1. 活動のあらまし

HIV/エイズに関しての不安や疑問がある人への情報提供・相談の場として、

- \* 「ぶれいす東京HIV/エイズ電話相談」
- \* 「東京都エイズHIV/電話相談(夜間/休日)」(東京都委託事業)

を運営。そのための各ミーティングの開催・諸機関との連絡等を行なっている。

### 2. スタッフ構成(2014年3月現在)

- ・コーディネーター 1名
- ・世話人 8名
- ・スタッフ 27名(実働)

### 3. 活動内容

#### ○「ぶれいす東京HIV/エイズ電話相談」

電話番号：03(3361)8909 [1回線]  
実施日：毎週 日曜日 13:00～17:00

#### ○「東京都HIV/エイズ電話相談(夜間/休日)」(東京都委託事業)

電話番号：03(3292)9090 [2回線]  
実施日：毎週 金曜日 18:00～21:00  
(但し祝日の場合は、14:00～17:00)  
土/日曜日 14:00～17:00

#### ○スタッフミーティング

毎月1回、第2日曜日 11:15～13:15  
(1月から第3日曜日に変更)  
合わせて、ケースカンファレンスや学習会を行なっている。

#### ○フォローミーティング/個別ミーティング

不定期。定例ミーティングに参加できなかったスタッフのフォローを行なった。

#### ○世話人会

部門内の調整・企画の場として有志により構成。ホットライン部門研修に携わっている。  
毎月1回、第2日曜日 10:00～11:00(1月から第3日曜日)にミーティングを開催。

#### ○東京都HIV/エイズ電話相談連絡会

東京都エイズ対策係と共同委託先のHIVと人権・情報センターの三者による定例会議。  
毎月第2金曜日に都庁にて開催している。

#### ○東京都HIV/エイズ電話相談連絡会全体会

東京都エイズ対策係と共同委託先のHIVと人権・情報セ

ンターに係るスタッフで構成され、昨年度から始まった。

### 4. 2013年度の相談状況

#### 1)「ぶれいす東京HIV/エイズ電話相談」

##### ●相談実績報告(2013年4月1日～2014年3月31日)

年間活動日数	51日間
総相談時間数	204時間
年間相談数	501件 (男性425件 女性75件 不明1件 うち陽性者5件 要確認2件 陽性者周囲3件)
活動スタッフ数	延べ66名

##### ●相談件数

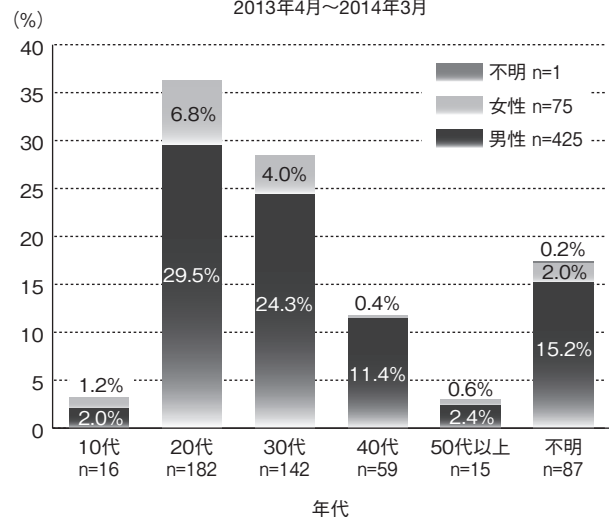
今年度の相談件数は、昨年度より11件増の501件でした。月平均/41.8件、1日平均/9.8件で、昨年と比べると月に約1件の増加です。過去5年間の推移は、467件、429件、524件、490件、501件と、昨年よりは増加したが、一昨年よりも少ない件数だった。月別では、前半の4月、6月、8月、9月の件数が昨年度より多めに推移したものの、10月以降は昨年度と同じような件数で推移した。

##### ●クライアントの内訳〔グラフ1〕

クライアントの内訳のうち、男女割合は、「男性」84.8%、「女性」15.0%、「不明」0.2%だった。男女の割合は5年間同様の傾向で、昨年度と比べて殆ど変動はなかった。

年代は、「20代」が36.3%と最も多く、「30代」が28.4%、「40代」が11.8%、「10代」が3.2%、「50代以上」が3.0%の順で、「不明」の割合が増えたため、「40代」が3.2%、「50代」が2.3%、「30代」が1.3%減少した。全体としては昨年度とほぼ同様の結果だった。

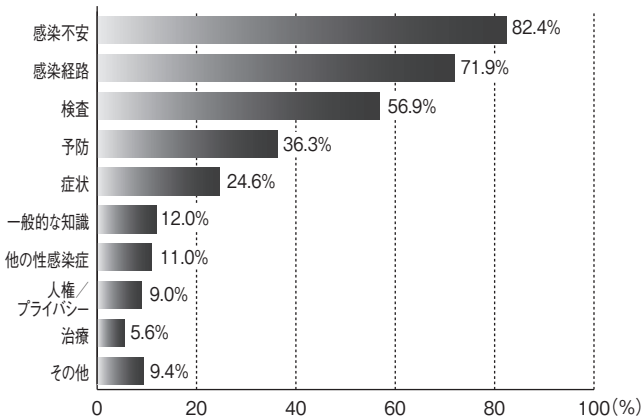
グラフ1 年代と性別(ぶれいす東京)n=501  
2013年4月～2014年3月



●相談内容（複数回答有）〔グラフ2〕

相談内容の内訳は、「感染不安」が中心で全体の82.4%、昨年度とほぼ変わらなかった。次いで「感染経路」71.9%、「検査」が56.9%、「予防」36.3%、「症状」24.6%までは順位に変動はなかった。以下は「一般的な知識」12.0%、「他の性感染症」11.0%、「その他」9.4%、「人権・プライバシー」9.0%、「治療」5.6%と順位変動はしたが、数字的に大きな変動はなかった。

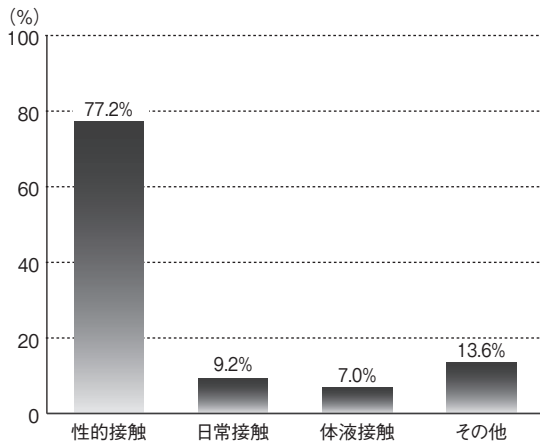
グラフ2 相談内容（ふれいす東京）n=501 \*複数回答有  
2013年4月～2014年3月



●感染不安の内訳（複数回答有）〔グラフ3〕

「感染不安」のうち、「性的接触」をきっかけとしている相談が、77.2%と多くを占めている。「日常接触」の相談は9.2%、「体液接触」は7.0%、「その他」の相談は13.6%と、全体としても昨年度と比べて変化はなかった。

グラフ3 感染不安の内訳（ふれいす東京）n=413 \*複数回答有  
2013年4月～2014年3月



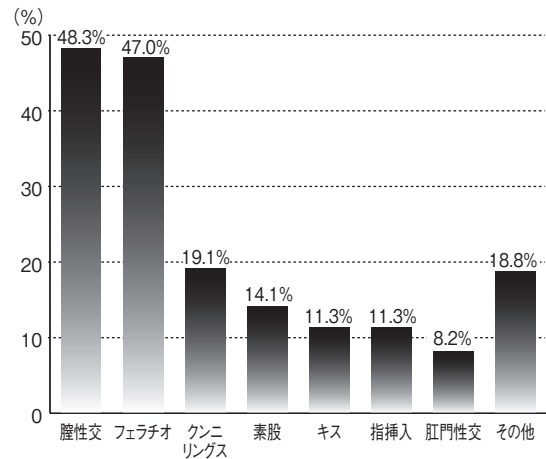
●思い当たる行為の内訳と予防（複数回答有）〔グラフ4〕〔グラフ5〕

「性的接触」の相談の内訳を見ると、「膣性交」が48.3%、「フェラチオ」が昨年度の34.2%から47.0%と数字を伸ばしてほぼ並んだ。「クニニリングス」が昨年度の15.5%から19.1%に増加して、「その他」の18.8%を上回った。以下は「素股」14.1%、「キス」11.3%で、「（膣or肛門）に指挿入」も11.3%、「肛門性交」8.2%だったが、それぞれの項目で数字は少し増加した。

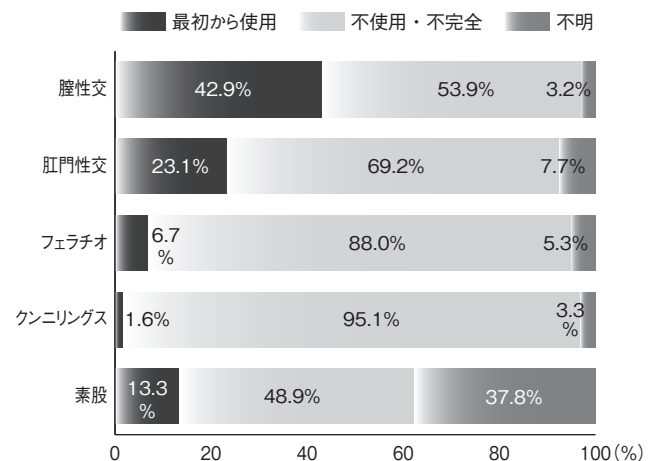
〔グラフ5〕では、行為別の予防率がわかるが、あくまでも感染不安の相談から見える数字である。

相談内容における予防率が、「膣性交」で昨年度48.7%⇒今年度42.9%、「肛門性交」は4.8%⇒23.1%、「フェラチオ」で7.0%⇒6.7%、「クニニリングス」では3.9%⇒1.6%、「素股」では28.0%⇒13.3%とそれぞれ変動した。「肛門性交」では大きく増加し、逆に「素股」では減少したのが特徴的だ。また「その他」が一定の割合で存在する。その中で多かったのは「手でのサービスを受けた」だった。殆ど感染の可能性がない行為だが、不安を感じる相談者も存在することがわかる。

グラフ4 思い当たる行為（ふれいす東京）n=319 \*複数回答有  
2013年4月～2014年3月



グラフ5 思い当たる行為の予防（ふれいす東京）n=319  
2013年4月～2014年3月

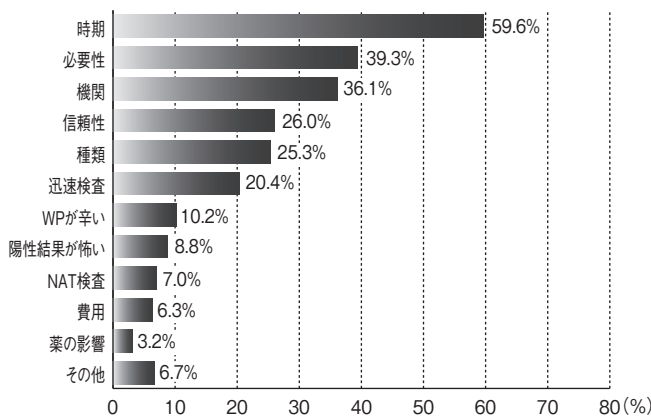


●検査について(複数回答有)[グラフ6]

検査についての相談件数は、昨年度と変動はなかった。内訳は、「時期(ウィンドウピリオド)」が59.6%と圧倒的に多く、続いて「必要性」39.3%、「機関」36.1%、「信頼性」26.0%、「種類」25.3%だった。「信頼性」が前年度より6.8%上昇したため、4位以下の順位に変動が出た。以下「ウィンドウピリオドが辛い」「陽性結果が怖い」「NAT検査」「費用」「薬の影響」の順で昨年度と変わらなかった。

検査機関の情報は行き届いていても、行政や検査機関によってウィンドウピリオドの判断にばらつきがあるので、「時期」の確認や、受けた検査の信頼性、更には再度受けた方が良いのかどうかなど、受検者の混乱が数字に出ているが、以前に比べるとウィンドウピリオドの情報が伝わっているように感じる。

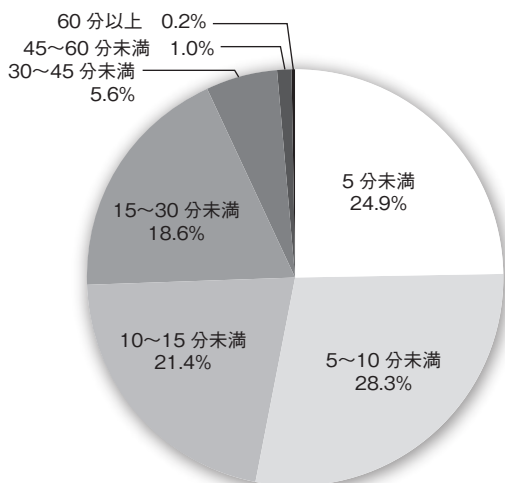
グラフ6 検査相談内容(ぶれいす東京) n=285 \*複数回答有  
2013年4月~2014年3月



●相談時間[グラフ7]

今年度は10分以上の相談が昨年度の50.8%から46.8%に下がった。相談時間は例年通り、全体の93.2%が30分以内に収まっている。全体的には昨年度と同様の傾向を示した。

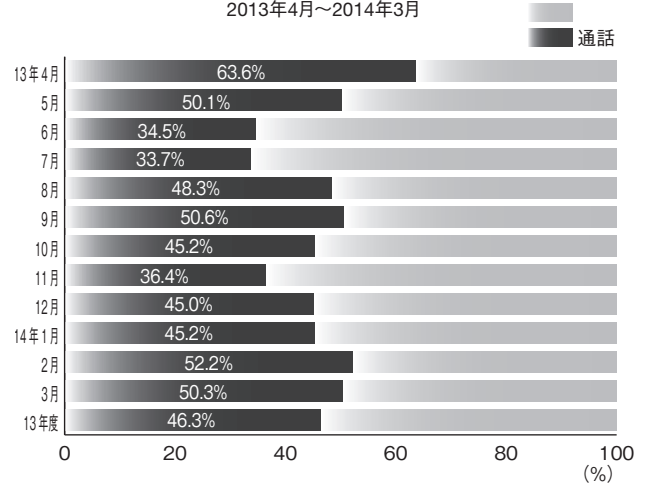
グラフ7 相談時間(ぶれいす東京) n=501  
2013年4月~2014年3月



●回線占有率[グラフ8] 算出方法: 総通話時間/総相談時間(超過は分母に加算)

回線占有率は、昨年度と同様、基本的に30~50%台で推移したが、4月は60%を超えた。回線占有率が50%以上の月は、昨年度の2ヶ月だったが、今年度は4月、5月、9月、14年2月、3月の5ヶ月に増えた。ただ年間平均は46.1%で、約1%減少した。

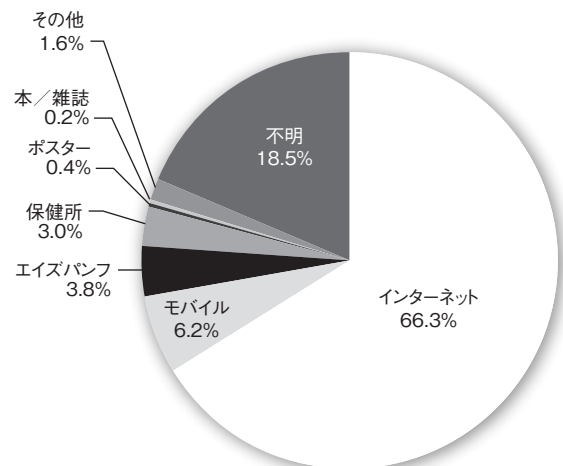
グラフ8 回線占有率(ぶれいす東京)  
2013年4月~2014年3月



●情報源[グラフ9]

この相談を知った「情報源」は、「インターネット」が66.3%で昨年度より4.5%減少したが、他を圧倒している。「モバイル」が6.7%から6.2%に微減したが、スマートフォンの普及により、「モバイル」ではなく、「インターネット」と回答するケースがあると思われる。合わせると72.5%となり、大半を占めている。他は「エイズパンフ」が3.8%、「保健所」3.0%で、インターネットが情報収集ツールとしての役割を担っていることがわかる。

グラフ9 情報源(ぶれいす東京) n=501  
2013年4月~2014年3月



●他県の割合

東京都外からの相談は280件(55.9%)を占め、東京都より割合として高かったが、昨年度より6.3%減少した。

●陽性者及びその周囲への対応

HIV陽性者からの相談は5件で、昨年度より3件減少した。要確認(スクリーニング検査での陽性で、確認検査の結果が出ていない。扱いは要確認)が2件に増加。陽性者周囲の相談が3件だった。ふれいす東京の相談における陽性者率は、1.0%だった。

2)「東京都エイズ電話相談(夜間/休日)」(東京都委託事業)

この相談は東京都から委託を受け、「HIVと人権・情報センター東京」と分担して行なっている事業である。以下は「ふれいす東京」が担当し、対応したものについて報告する。

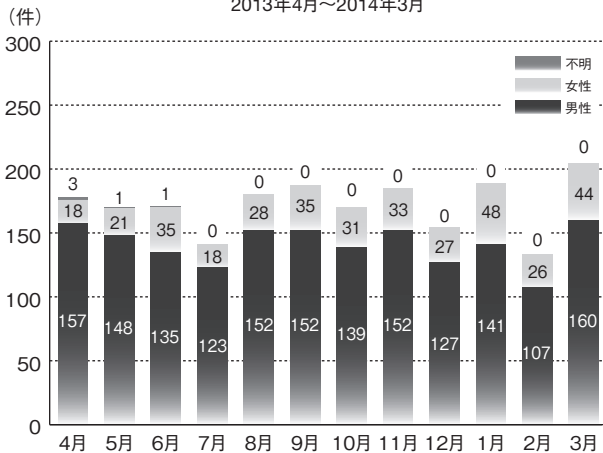
●相談実績報告(2013年4月1日～2014年3月31日)

年間活動日数	154日間
総相談時間数	462時間(延べ924時間)
年間相談数	2,062件 (男性1,693件 女性364件 不明5名 うち陽性者8件 要確認12件 陽性者周囲13件)
活動スタッフ数	延べ386名

●月別相談件数〔グラフ10〕

今年度の相談件数は、昨年度より189件減の2,062件でした。月平均は171.8件で、1日の平均は13.4件だった。昨年度より1ヶ月あたり1.3件減少した。200件を超える月が昨年度は3ヶ月あったが、今年度は14年3月のみだった。

グラフ10 月別相談件数(東京都/男女別) n=2062  
2013年4月～2014年3月



●クライアントの内訳

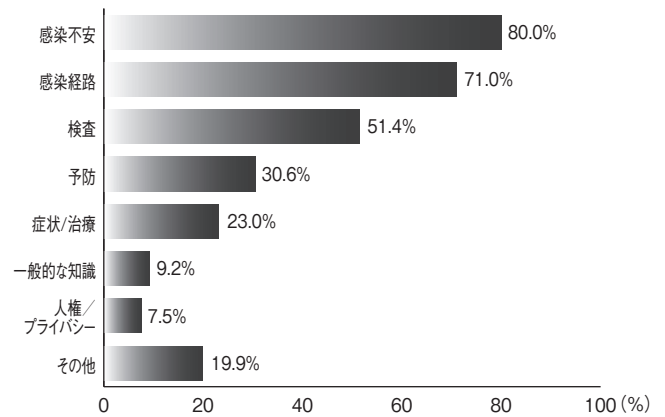
性別の内訳は、「男性」82.1%、「女性」17.7%、「不明」0.2%だった。昨年度から変動はない。

年代は、「20代」が28.8%、「30代」27.4%となり、「20代」と「30代」が並ぶようになった。「40代」12.3%、「50代以上」5.6%、「10代」3.3%の順だった。それぞれ多少の変動はあるが、傾向は昨年度と同様だった。

●相談内容(複数回答有)〔グラフ11〕

相談内容の内訳は、昨年度と変わらず「感染不安」が80.0%で一番多かった。続いて「感染経路」が71.0%、「検査」が51.4%と続いた。「予防」30.6%、「症状/治療」23.0%、「その他」19.9%、「一般的な知識」9.2%で、「人権/プライバシー」は7.5%の順だった。

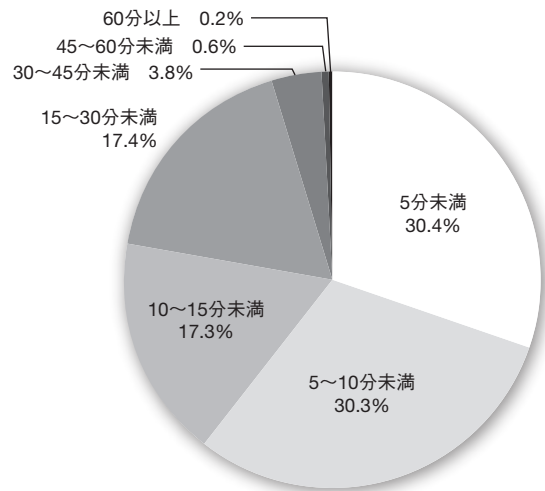
グラフ11 相談内容(東京都) \*複数回答あり  
2013年4月～2014年3月



●相談時間〔グラフ12〕

10分以内の相談は60.7%と半数以上を占めました。全体の95.4%が30分以内に収まり、60分以上の相談は0.2%と少ない。傾向は昨年度と同様である。

グラフ12 相談時間(東京都) n=2062  
2013年4月～2014年3月

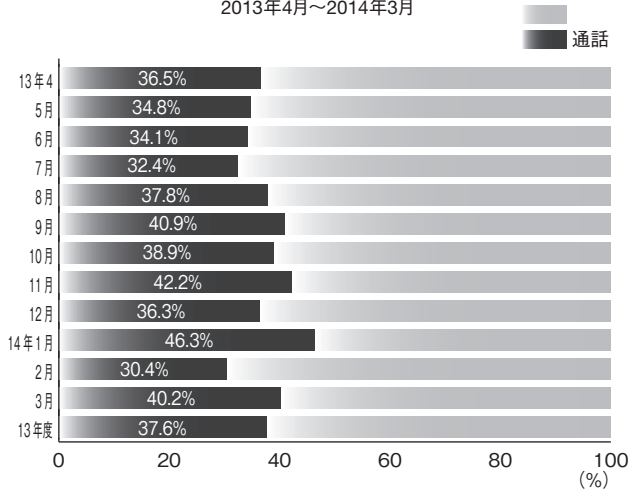


## ●回線占有率〔グラフ13〕

算出方法：総通話時間／総相談時間(超過は分母に加算)

今年度の回線占有率は、30%から40%台で推移した。昨年度と同様に50%以上の月が一度もなく、40%を切った月は8ヶ月あった。

グラフ13 回線占有率(東京都)  
2013年4月～2014年3月



## ●情報源

この相談を知った「情報源」は、「インターネット」61.2%、「モバイル」6.0%と昨年度と傾向は同じだった。他は「不明」が23.6%、「パンフ」2.6%、「保健所」2.4%で、「保健所」が少し増えたこと以外は、変化はなかった。

## ●他県の割合

東京都外からの相談は962件(46.7%)を占め、昨年度とほぼ変わらなかった。「東京都」の電話相談だが、全国からのニーズに対応していることがわかる。

## ●陽性者対応

HIV陽性者からの相談は8件で、昨年度より減少した。迅速検査や術前検査での判定保留(スクリーニング検査での陽性で、確認検査の結果が出ていない。扱いは要確認)が、12件と増加。陽性者周囲からは13件だった。東京都の相談における陽性者相談率は、0.4%だった。

## 3)相談全体のまとめ(ぶれいす東京/東京都)

### ①相談件数の落ち込み

東京都の数字の5年間の推移を見ると、2,725件、2,577件、2,453件、2,251件、2,062件と、この5年間で約600件減少している。ぶれいす東京は、467件、429件、524件、490件、501件という変動を見せていて、単純にHIV/エイズに関心が低くなっていると断定できない。しかし昨年11月に起きた献血でのHIVウィルスのすり抜け報道が過熱した後の数字の変動を見ると、翌週には普段の数字に戻ってしまった。広報の方法などの見直しの必要性を感じる。

## ②基本的知識の浸透不足

HIV/エイズの基本的な知識が理解されていない、誤解しているなどの相談があると、スタッフの年間振り返りで指摘があった。感染経路の知識で、日常接触で不安に感じる人や同性間でしか感染しないと思っている人もいた。そうした無理解や誤解があるため、HIV陽性者が周囲に伝えることができない。80年代のエイズ=死のイメージは、まだ残っている。電話相談の中でも、積極的に情報を伝える必要があると思う。

## ③リピーターの相談

今年度もリピーターが存在した。年間を通してかけてきているリピーターはいなかったが、数ヶ月に及んで同じ内容を繰り返す相談はあった。リピーターの相談は、同じことを繰り返すことが多いので、スタッフには疲労感が残る。また感染の可能性のない相談が多いので、短い時間で終わることが多い。スタッフからは、もう少しじっくりと話を聞いたら、その人がリピーターにならないかもしれないという意見が出た。少しでも相談者の心の声に耳を傾ける必要があると思う。

## ④対応が難しい相談

電話相談では、スタッフの個性を重視している。HIV/エイズの電話相談では、微妙な表現をしなければいけないことが多いが、個々のスタッフの表現の仕方を比較したり、詳細な部分を追求されることが多くなった。「前回の相談で〇〇と言われた」「あなたと話して、不安が増した」など訴えたり、時には激しい怒りをぶつけられることもあった。これからもケースカンファレンスを通して、より良い対応を考えたり、スタッフの心のケアをすることが重要性を感じた。

## ⑤陽性者関係の相談

下記のように、とても難しい相談や専門的な相談が増えている。まずは相談者の気持ちを受け止めるようにしているが、陽性者対応について、陽性者対応の相談員とも連携して、学習会などを積極的に企画する必要がある。

### □陽性者

#### 1)感染後半年以内の陽性者

感染初期の混乱及びプライバシー/告知直後の情報集めとプライバシー/発症後の社会復帰/今後の発症の不安など

#### 2)長期療養中の陽性者

他科手術の病院選び/現状報告/服薬時刻の間違い×2/脳症の情報/職場への通知 など

#### 3)既に繋がりがある陽性者

気軽に話せる友人が欲しい/発症後の社会復帰/社会制度の手続き など

□要確認(スクリーニング検査での判定保留で、確認検査の結果が出ていない。)の相談

子どもへの日常接触での感染の心配/クリニックへの不信感/予防なしSEXでの感染の可能性/妊婦検診で判定保留→陽性の可能性/今後の不安/パートナーへの通知/検査の信頼性/病院での不十分な告知/検査キットで陽性/医師の説明不足/判定保留の不安 など

□陽性者周囲の相談

陽性パートナーとの今後(不安)×4/パートナーが塞いでいる/パートナーとのSEX/SEX相手からの通知後の不安/陽性者との性行為での不安/母親から息子への対応/友人との日常接触の不安/友人の心配×2/前夫の感染通知から今後/陽性者から性行為後に通知された怒り/SEX相手からの脅迫/離婚問題 など

## 5. 活動報告詳細 (2013年4月1日～2014年3月31日)

### 1) 活動実績

[シフト稼働状況]

	曜日別シフト計			シフト 合計	稼働人数計			稼働 人数 合計
	金	土	日		金	土	日	
4月	4	4	4	12	12	10	16	38
5月	5	4	4	13	15	10	15	40
6月	4	5	5	14	11	14	18	43
7月	4	4	4	12	12	11	15	38
8月	5	5	4	14	13	14	16	43
9月	4	4	5	13	10	10	16	36
10月	4	4	4	12	10	9	15	34
11月	5	5	4	14	13	11	13	37
12月	4	4	4	12	9	10	14	33
1月	4	4	4	12	10	11	14	35
2月	4	4	4	12	11	12	14	37
3月	4	5	5	14	8	14	17	39
年計	51	52	51	154	134	136	183	453

	回数	延べ人数	
スタッフミーティング	9回	116	4/14、5/12、6/16、8/11、9/8、11/10、12/8、2/23、3/16
東京都電話相談全体会	1回	20	7/15
懇親会&交流会	1回	10	7/15
スタッフ講演会	1回	26	1/19
新年懇親会	1回	24	1/19
フォローミーティング	3回	10	6/29、7/4、11/30
個別ミーティング	6回	13	6/29、7/11、7/13、9/19、12/5、3/22
世話人会	8回	40	4/14、5/12、6/16、8/11、9/8、11/10、12/8、2/23
情報整理プロジェクト	1回	8	11/25
シフト担当打合せ	2回	4	8/11、3/14
HL入力ミーティング	3回	12	11/25、12/6、12/12
HLオリエンテーション	2回	11	9/28、9/29
HL部門研修	3回	31	10/13、10/14、11/24
モニタリング	4回	10	
実地研修	11回	26	
新人修了ミーティング	3回	6	12/7、12/12、1/4
東京都電話相談連絡会	12回	35	4/19、5/10、6/14、7/12、8/9、9/13、10/11、11/8、12/13、1/17、2/26、3/14
東京都ボランティア講習会	4回	19	5/29、8/6、10/24、2/17

## 2) 新人スタッフ研修

他部門と共同の募集を実施。合同でのオリエンテーション・基礎学習を行なった後、ホットライン部門の専門研修を実施した。毎年のより良い研修になるように修正を加えている。

### (1) 合同研修事前オリエンテーション

ぶれいす東京の活動理念、各部門からの内容説明など。

### (2) ぶれいす東京スタッフ合同研修

HIV活動へ参加する上での基礎的な学習内容を講義。全課程終了後、本人の活動意志を確認し、各部門への専門課程へと進む。

※(1)(2)の詳細については、事務・総務部門の報告を参照

### (3) ホットライン部門研修のオリエンテーション

より具体的にホットライン部門の活動内容を説明して、「HIV/エイズの電話相談とは」「検査の基礎」を話し、また研修生へのアンケートも実施した。

[内容]

#### ※部門研修オリエンテーション

9月28日(土) or 9月29日(日): 2時間30分

- ▼グラウンドルールの確認
- ▼HIV/エイズの電話相談とは?
- ▼検査の基礎
- ▼質疑応答/アンケート記入

[担当スタッフ] 佐藤 郁夫/阿曾 義文

### (4) ホットライン部門/部門研修

電話相談員に必要な基礎講義を学習後、各研修生とも相談電話例を用いてロールプレイング、更に実際の電話相談をモニタリング等の個別指導へ。全課程修了後、再度本人の活動意志を確認し、ホットラインスタッフに迎えた。研修の実施・指導はホットライン部門の世話人を中心に、現役スタッフが担当。今年度も、少し内容をリニューアルし、丸2日の日程で行った。

[内容]

#### ※部門別研修 ◇1日目◇ 10月13日(日): 5時間

- ▼グラウンドルールの確認
- ▼ピアカウンセリング [講師] 生島 嗣
- ▼HIV検査について [講師] 有手 雅恵
- ▼相談デモンストレーション(1)及びグループワーク
- ▼リスクアセスメント
- ▼相談デモンストレーション(2)及びグループワーク

#### ※部門別研修 ◇2日目◇ 10月14日(月・祝): 5時間

- ▼グラウンドルールの確認
- ▼検査相談デモンストレーション
- ▼ロールプレイ実習(1)~(4)

▼振り返り/モニタリングに入るにあたっての事前説明

[担当スタッフ] 阿曾 義文/有手 雅恵/佐藤 郁夫/  
白幡 素子/染谷 太恵/萩原/  
深見 龍子/真野 康弘/丸井 淑美/  
山本 行宏

### ※モニタリング 10月~各自調整、3時間×1回

現役スタッフの実際の相談をモニタリングして、具体的な対応について振り返りました。

また現状のニーズや多様な価値観・相談の意味合いなど、個別学習をしました。

### ※実地研修 モニタリング終了後、各自調整、3時間×3回

スーパーバイザーの指導のもと、実際に電話を取り、その後の振り返りで、知識の再確認・相談内容の検討、更に自分らしさを大切にしながら、相談スタイルを確立し、活動参加に繋がりました。

## 6. 今年度のトピックス

### ○電話相談の名称変更

長年、「東京都エイズ電話相談」「ぶれいす東京エイズ電話相談」として電話を受けてきたが、今年度から「東京都HIV/エイズ電話相談」「ぶれいす東京HIV/エイズ電話相談」に名称変更をした。エイズの恐怖がまだまだ影響している社会なので、HIV/エイズとしたことで、少しでも疾病イメージの転換になればと思う。

### ○東京都エイズ電話相談連絡会全体会

昨年度に続いて、東京都HIV/エイズ電話相談を担当している東京都とHIVと人権・情報センターとぶれいす東京の3者のスタッフが集まる東京都HIV/エイズ電話相談連絡会の全体会を開催することができた。来年度からはテーマを絞って、内容を深めようと話している。

### ○年2回の学習会

「陽性者相談について」の学習会と「エイズと私の30年」の講演会を開催した。特に後者は、ホットライン部門だけでなく、ぶれいす東京のスタッフも参加可能とした。

### ○年3回のスタッフ間の親睦

昨年度に続いて、親睦や交流を深めることができた。7月の全体会の後の懇親会はHIVと人権情報センターのスタッフと交流ができ、1月の講演会の後の懇親会では、他部門のスタッフとの交流もできた。また3月には遠方に行くスタッフの歓送会をこれも他部門のスタッフとともに開催した。

## 7. スタッフの振り返り

スタッフの年間振り返りの中で、前述の3)相談全体のまとめ(ふれいす東京/東京都)に網羅できなかった内容を紹介する。スタッフの中から上がったのは、より良い相談にするためにもっと勉強をしたいという思いであった。匿名での電話相談の特徴である「一期一会」の精神をこれからも大切にしていきたいという声も上がった。またこの1年間で、相談者に興味を持たたという声も出た。電話相談では、どこの誰かも、顔もわからない。声だけが頼りである。

でもその向こう側にいる人を思い浮かべて相談するように心がけることは、大切なことだと思う。必要以上によりそう必要はないが、相談者のことを考えて相談できるよう心がけたい。

## 8. 来年度の課題

今年度の課題は、以下の3点だった。

- (1)スタッフの補強
- (2)学習会やケースカンファレンスの充実
- (3)相談用リソース集のリニューアル

今年度は3名の補強ができた。しかし様々な理由で活動を休止しているスタッフがいる。それでも+1稼働(必要最低人数+1名のスタッフを配置)ができているのは、シフト担当を中心にスタッフが協力しているからである。昨年度から導入したメーリングリストの活用も効果を上げていた。学習会は2回しかできなかったが、ケースカンファレンスはほぼ毎月できた。相談用リソース集のリニューアルは、担当してくれたスタッフの分担は終了して、あとはまとめ作業が残っている。

来年度の課題は3点です。

- (1)各スタッフのスキルアップと人員補強
- (2)学習会やケースカンファレンスの充実
- (3)次世代の世話人の育成

これからもより良い相談ができるようスタッフ一同精進していくつもりです。

1年間ありがとうございました。

[データ入力] 橘/萩原/前田/山田 恒/横川 峰子  
[データ管理・グラフ作成・分析] 山田 恒  
[分析・報告] 佐藤 郁夫

## 部門報告 (Peer Empowerment Program オトナの女性部門)

### 1. 活動理念と主な活動

テーマは「セックス・ポジティブ」。

20代後半から30代の女性を対象に、女性がセックスに対して主体性のある状態に変わることを目指して活動をしています。

女性が自分のカラダの安全・安心、気持ちよさや心地よさを選べる、セックスをする／しない、どんなことをするかを決められる、それらを表現でき罪悪感を持たない、セーフターセックスができる。そんなことを目指してセミナーや見学ツアーを開催しています。

行動が変わるときに重要なのは「自己肯定感」ですが、私たちは、自己肯定感を高めるためのポイントは「共感」と「共有」だと考えています。

気持ちや経験をシェアしたり、自分たちがもつ様々なテクニックを共有するための「場」づくりをしながら、オンナがセーフターセックスと仲良くなるためにどうする？ってことを考えています。

### 2. 構成メンバー (2014年3月31日現在)

女性(自称) 6名

### 3. ミーティング実施状況

今まで不定期で開催していたミーティングを、今年度は「偶数月の第1木曜日」に定例開催しました。

4月14日 横浜(5名)

5月26日 高田馬場 サイゼリヤ(5名)

6月6日 ぶれいす事務所(5名)

8月1日 ぶれいす事務所(3名)

10月3日 ぶれいす事務所(4名)

12月16日 ぶれいす事務所(4名)

### 4. オトナの女的教科見学ツアー

(1)オトナの女的 女医に教わるカラダのメンテナンス

<日時> 2013年4月14日(日)13:00～15:00

<会場> 横浜 ポートサイド女性総合クリニック  
「ピバリータ」

<目的> 婦人科検診に関心があっても受診をためらっている女性に、クリニックの見学を通して受診を考えるきっかけを提供する。

<参加者> 11名(20代1名、30代8名、40代2名)

<内容>

13:00～13:10 オリエンテーション(主旨説明、グランドルール説明など)

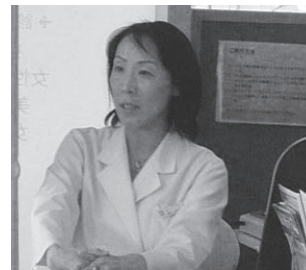
13:10～13:50 講義「自分でできるメンテナンス 婦人科でするメンテナンス」+質疑応答 講師：清水なほみ院長

13:50～14:05 クリニック見学

14:05～14:15 休憩

14:15～14:40 おしゃべりTIME

(清水先生をかこんで)



ポートサイド女性総合クリニック  
「ピバリータ」の清水なほみ院長

14:40～15:00 振り返り(ひとり一言コメント)、アンケート記入

※参加者には申し込み時に「先生やほかの参加者に聞いてみたいこと」を書いてもらい、その内容に関しても講義やおしゃべりTIMEの際に触れてもらった。

#### <参加者の声(抜粋)>

- ・(院内を見学して)カーテンのない診察室は新鮮だった。
- ・(ピルや生理用品のことなど)誤解していたり知らなかった事が聞けて良かった。
- ・ふだんは話題にしないこと、ならない内容を話せてよかった。
- ・是非定期検診を受けたい。
- ・すごく優しい雰囲気と語り口で癒された。遠いけど相談に来たいと思った。
- ・皆さんの経験やケアをたくさん聞けたので参考にしたい。

#### <その他>

参加者へのお土産として、クリニックから「初診割引チケット」「サプリメント外来割引チケット」を、ID LUBEさんからローションのサンプリングなどをご提供いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

クリニックの割引チケットを利用して2名の方が検診をされたとのことです。



講義の様子～ピバリータにて～

## (2)ラブピースクラブツアー第3弾

「クリスマス・女子アゲ↑編」

<日時> 2013年11月29日(金)19:00~21:00

<会場> 本郷三丁目 ラブピースクラブショールーム

<目的> 女性向けセックスグッズショップ「ラブピースクラブ」の見学ツアー。実物を見たり触れたりすることで、女性が「使う・使わない」も含め主体的に選べるようになることを目的としている。

<参加者>4名(20代1名、30代2名、60代1名)

<内容>

60分 「ラブピースクラブショールーム見学&購入」

- ・ラブピースクラブのスタッフからグッズの説明
- ・ショールーム見学(グッズを触ったりローションサンプルを試したり、スタッフに自分に合ったグッズを提案してもらったりなど)
- ・購入するかしないかは自由

60分 「おしゃべりタイム」

<参加者の声(抜粋)>

- ・スタッフや他の参加者とおしゃべりが楽しかった。
- ・友達とは彼氏とのセックスについては話しても自分でバイブを楽しむことについては話した事がなかったので、人生初の体験でした。
- ・少し恥ずかしくてあまり話せませんでした。スタッフさんの普段聞けないお話を聞いて、貴重な機会になりました。
- ・人には聞けない事を、オープンに話せて勉強になった。

<その他>

ラブピースクラブから参加者へのお土産やじゃんけん大会の勝者にはなんと！バイブを景品としてご提供いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。

## 5. ぶれいすボランティアスタッフ女子会

今回は、他部門のスタッフ2名と、合同研修会を終えたばかりの新ボランティアメンバーが参加してくれました。新人研修会のこと、長年続けているぶれいす東京の活動のこと、自分自身の身体のことなどなど、楽しくおしゃべり&情報交換できました。



<目的> ぶれいすのボランティアとして活動する女子(自称)が、ボランティア活動を通じて日ごろ感じていることや他部門と共有したいこと、聞いてみたいことなどをざくばらんに話し、部門を超えたネットワークをつくること。もちろん年齢制限はありません！

<場所> ぶれいす東京 多目的室

<日時> 2013年10月27日(日) 13:00~15:00

<参加者>6名(うち部門スタッフ3名含)



## 6. 第2回 HIVと性の教育セミナーでの部門活動報告

<日時> 2014年2月11日(火・祝)13:00~16:30

<会場> 文京区 日本性教育協会セミナー室

<内容> 第2回HIVと性の教育セミナーにて、部門の活動紹介をする時間を20分間いただきました。私たちの活動理念である「セックス・ポジティブ」とは？今までどんな活動してきたか？今の課題は？などを、スタッフのいみが報告しました。

## 7. 最後に

行動変容は簡単ではないと、いつも思います。「ゴムつけないとやばい」とわかっているでもそれが言いだせない女性も多いし、オーラルの時にセーフターセックスできなかつたり、定期検診にいかなきゃ…と思いつつも先延ばしにしたり。知識だけがあってもダメなのです。

今年度の活動の「オトナの女的 社会科見学ツアー」では、女性たちが自分の身体を大切にするためのきっかけを提供できたと思います。

個人的にはぶれいすスタッフ女子会のぶっちゃけトーク、かなり楽しいです。いろんな女性がいる、いろんな女性の人生があることに、毎回感動します。

【報告：みず】

## 部門報告 (Gay Friends for AIDS)

### 1. 電話相談(報告者:Y)

#### ●2013年度活動記録

##### (1)実施日

毎週土曜日 19時～21時

##### (2)年間相談活動日数

52日(2012年度:51日)

##### (3)電話相談活動時間数

104時間(2012年度:102時間)

##### (4)年間相談件数

102件(うち陽性者等の相談:11件)

(2012年度:相談件数103件、うち陽性者等8件)

##### (5)ろう者ゲイ(聴覚障がい者)のメール相談

2件

#### ●2013年度相談件数

##### (1)全般

表1は月別の相談件数および一日あたりの平均件数を表している。

2013年度の年間相談件数は前年度とほぼ同様な件数であった。月別件数で見ると、4月、10月、2月が前年度を上回っていた。

表1 月別の相談件数及び一日当たりの平均件数

年	月	2013年度			(参考)2012年度		
		相談件数 (件)	実施日数 (日)	平均件数 (件)	相談件数 (件)	平均件数 (件)	
2013年	4月	12	4	3.0	6	4	
	5月	8	4	2.0	12	4	
	6月	8	5	1.6	10	5	
	7月	6	4	1.5	14	4	
	8月	6	5	1.2	8	4	
	9月	10	4	2.5	11	5	
	10月	13	4	3.25	7	4	
	11月	7	5	1.4	7	4	
	12月	5	4	1.25	6	4	
	2014年	1月	6	4	1.5	6	4
		2月	14	4	3.5	4	4
		3月	7	5	1.4	12	5
合計		102	52		103	51	

##### (2)相談時間

表2は相談時間を10分単位にまとめたものである。

2013年度は、10分以内で終わる相談が5割以上であった。なお、1件あたりの平均相談時間は15.1分で、前年度の平均である19.9分と比べ相談時間が短くなっていた。

表2 相談時間

相談時間(分)	2013年度		2012年度	
	件数	割合	件数	割合
～10	53	52.0%	36	35.0%
11～20	29	28.4%	26	25.2%
21～30	9	8.8%	23	22.3%
31～40	6	5.9%	7	6.8%
41～50	1	1.0%	4	3.9%
51～60	2	2.0%	3	2.9%
61～	2	2.0%	4	3.9%
合計	102	100.0%	103	100.0%

##### (3)相談者年代

表3は相談者の年代別の相談件数を表している。

2013年度は、20代、40代、60代以上の相談者の割合が増加した。ただし20代と60代以上は、同一の相談者(いわゆるリピーター)がそれぞれ、9件、8件含まれている。

表3 年代別の相談件数

年代	2013年度		2012年度	
	件数	(割合)	件数	(割合)
10代	3	4.5%	4	5.2%
20代	25	37.9%	21	27.3%
30代	13	19.7%	32	41.6%
40代	10	15.2%	11	14.3%
50代	6	9.1%	8	10.4%
60代以上	9	13.6%	1	1.3%
不明	36		26	
合計	102	100.0%	103	100%
有効データ	66		77	
有効 = (合計 - 不明)				

##### (4)相談電話の発信地域

表4は相談電話の発信地域を示している。

前年度と同様な傾向だが、特に「関東以外」からの発信が約7割と大幅に増加した。

表4 相談電話の発信地域

地域	2013年度		2012年度	
	件数	(割合)	件数	(割合)
東京	13	19.7%	14	18.2%
東京以外の関東	8	12.1%	21	27.3%
関東以外	45	68.2%	42	54.5%
不明	36		26	
合計	102	100.0%	103	100.0%
有効データ	66		77	
有効 = (合計 - 不明)				

(5) 相談電話の情報源

表5は相談電話を知った情報源を表している。「インターネット」の割合が前年度より減少した。一方で「検査機関・パンフレット」を見て電話をかけている層の割合が大幅に増加した。

情報源	2013年度		2012年度	
	件数	(割合)	件数	(割合)
ゲイ雑誌	8	12.9%	9	11.8%
検査機関・パンフレット	19	30.6%	7	9.2%
他の相談電話	1	1.6%	1	1.3%
インターネット	30	48.4%	50	65.8%
携帯電話・モバイル	3	4.8%	4	5.3%
口コミ	1	1.6%	4	5.3%
その他	0	0.0%	1	1.3%
不明	40		27	
合計	102	100.0%	103	100.0%
有効データ	62		76	

有効 = (合計 - 不明)

(6) 相談者のセクシュアリティ

表6は相談者のセクシュアリティを表している。「既婚者・バイセクシュアル」の割合が減少し、「男性に性的興味を持った」の割合が若干増加した。また件数は少ないが「トランスジェンダー等」や「レズビアン」からの相談もあった。これらのセクシュアリティは、Gay Friends for AIDS 電話相談(以下、Gフレ電話相談)の対象外になってしまう。しかしまず感情の受け止めに大切にし、相談の主訴を聞いた上で、その当事者でないと対応が難しいケースの場合は、適切と思われる相談機関

を紹介している。ゲイ・バイセクシュアル以外の相談においても、まず受け入れることで、セクシュアル・マイノリティの孤立防止になると考えられる。

表6 相談者のセクシュアリティ

区分	2013年度		2012年度	
	件数	割合	件数	割合
ゲイ	79	78.2%	77	77.0%
ゲイ周囲	0	0.0%	0	0.0%
既婚者・バイセクシュアル	7	6.9%	15	15.0%
男性に性的興味を持った	7	6.9%	4	4.0%
レズビアン	1	1.0%	0	0.0%
トランスセクシュアル等	3	3.0%	1	1.0%
異性愛者(男)	4	4.0%	3	3.0%
異性愛者(女)	0	0.0%	0	0.0%
不明	1		3	
合計	102	100.0%	103	100.0%
有効データ	101		100	

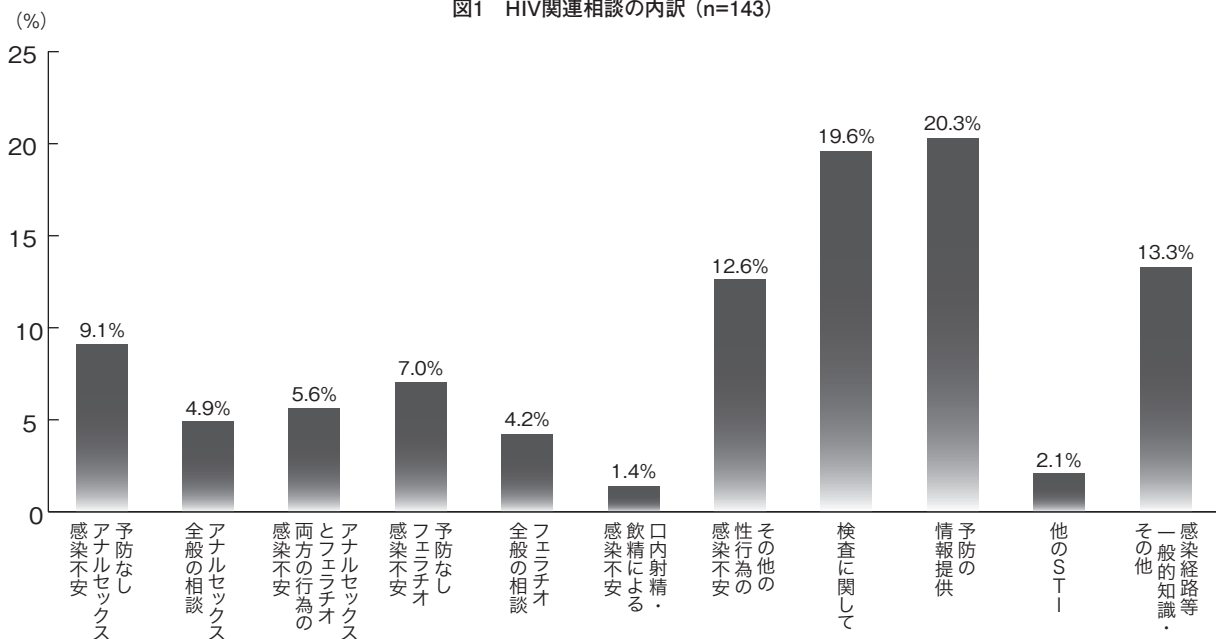
有効 = (合計 - 不明)

●相談内容について

2013年度は、102件の相談のうち陽性者対応11件(後述)と異性間性行为(男・女)4件を除いた87件について検討し、HIV関連相談とHIV以外の相談に分類した。前年度と同様に1回の相談で複数の内容の相談が寄せられているケースも見受けられた。複数の相談を独立させて計上した結果、HIVに関連した相談が143ケース、HIV以外の相談(非HIV関連)が53ケースの合計196件となった。

またろう者ゲイ(聴覚障がい者)のメール相談は2件であった。

図1 HIV関連相談の内訳 (n=143)



(7) HIVに関連した相談…143ケース(73.0%)

図1はHIV感染不安や検査あるいはHIV以外の性感染症(STI)などに関する相談(以下:「HIV関連相談」)の内訳である。

2013年度の相談特徴を前年度と比較してみると、「予防なしアナルセックス感染不安」が6.1%→9.1%、「予防なしフェラチオ感染不安」が2.7%→7.0%、「予防の情報提供」が14.3%→20.3%と増加した。一方で「感染経路等一般的知識」が25.2%→13.3%と減少した。

リスクのある行為をして相談してくるケースは、相談者のHIVに関する知識や予防に関する知識が乏しいことも多い、特に都市部以外の相談者が、なんらかのきっかけで電話を掛けてくる傾向がみられた。フェラチオに関する相談は、毎年のことであるがする側・される側ともに予防をしている者は、相談票の記載からは読み取れなかった。

次に「予防の情報提供」であるが、相談員の経験を基に、相談者に対して適切なアドバイスを行っていたようだ。

最後に、「感染経路等一般的知識」であるが、マッサージや売り専での性行為に関する相談が複数寄せられていた。これらの相談は、感染の可能性が低い行為(お互いのペニスをしごく、素股、フェラチオされる等)であることが多数を占めた。積極的にゲイと接する者と違い、マッサージ等に通うだけの人も含まれるのかもしれない。彼らは、HIVに関する知識を得る機会も少なくなる可能性もあるので、サービス提供者とともに協働していく必要性を感じた。

(8) HIV以外の相談(非HIV関連相談)…50ケース(27.0%)

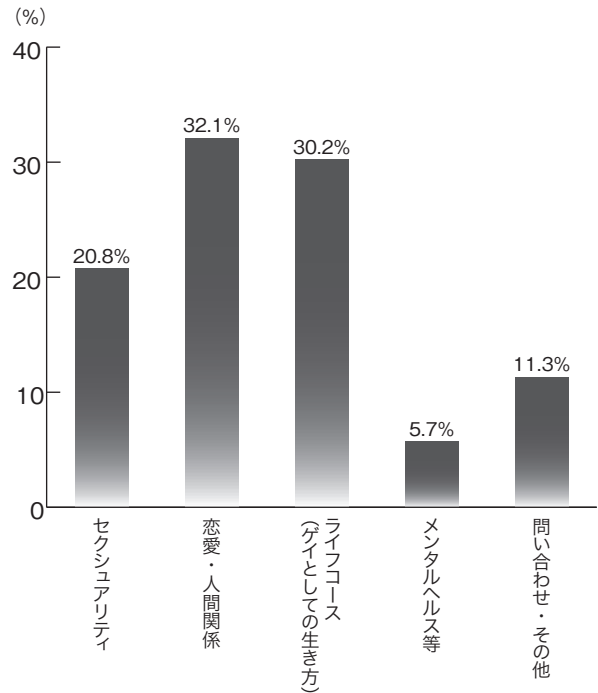
図2は、セクシュアリティ(性的指向)、ライフコース(ゲイとしての生き方)、そして人間関係などゲイとしてのアイデンティティーに関わる「非HIV関連相談」の内訳である。

前年度と比較すると「恋愛・人間関係」が28.8%→32.1%、「ライフコース(ゲイとしての生き方)」が28.8%→30.2%と増加した。また「メンタルヘルス等」の相談は減少した。

「恋愛・人間関係」では、出会いの機会、ウェブ上での出会い、恋愛にまつわる相談等、相談者周囲での出会いや人間関係の苦労が示されていた。

また「ライフコース(ゲイとしての生き方)」では、前出の「予防の情報提供」とも関連するが、性行為でアナル傷つけてしまう悩み、アナルセックスやフェラチオで感じる(感じさせる)方法、ローションやコンドームの種類があることや効果的な使用方法等、前出「予防の情報提供」とは異なった性行為の相談が多かったのが今年の傾向である。ゲイの中でも具体的な性行為の話題はしばらく、その場の雰囲気任せに任せてしまう者も多くいるであろう。非難されることなく、性行為に関する話ができることは、相談者の今後のセクシュアル・ヘ

図2 非HIV関連相談の内訳 (n=50)



ルスに関して重要であると考えます。

「メンタルヘルス等」の相談の中には、パートナーから性行為を強制される事例も見受けられた。また、混乱の中相談している精神疾患を抱えた者も複数存在したが、相談者の主訴から分類しているため、この項目には加えていない。

(9) 陽性者等の対応について…11件

2013年度の陽性者等の対応は、HIV陽性者自身からの相談が8件、パートナーや友人など陽性者本人以外からの相談が1件、検査での要確認の相談が2件で、全相談件数に対する陽性者等の割合は7.8%→10.8%と前年度よりも増加した。

内容は、要確認時の不安の受け止め、日常の報告、パートナーと受検して相手が判定保留だった、依存症に関する相談、献血後の陽性告知、陽性告知後の漠然とした不安、友人のターミナル期、陽性者との出会いの機会、服薬に関すること、対面相談のお礼等であった。なお、前年度と異なり、複雑で多岐にわたる相談が多い傾向であった。

(10) ろう者ゲイ(聴覚障がい者)メール相談の対応について…2件

メールでの相談は、2件ともハッテン場での設備や備品からの感染不安の相談であった。件数は少ないものの、いずれも感染の可能性が極めて低いものであり、電話相談における一般知識に関する相談者と同様にHIVに関する知識を得る機会が少ない可能性も示唆された。

後述するイベント「QOGL」の会場にも、聴覚障がい

の方が基礎知識を求めて足を運ばれたことがあり、彼らへの情報提供の方法や媒体についても検討する必要があると考えられる。

## ●今後の課題

### A. 新しい相談員とシフト担当

今年度より研修を行っていた新しい相談員2名がデビューした。一方転居で東京を離れ、来年度よりシフトに入れなくなった相談員もいるが、結果として1名増員することができた。前年度まで第1週～4週(5週)まで相談員を固定して1人体制であったが、現在では、週によって2人体制で行っている。1人体制だと電話が立て続けになった場合、相談票の記入を後回しにして次の相談を受け、相談終了後にまとめて記入する等あわただしいこともあった。2人体制のシフト時は、電話が鳴るまで相談員同士で話して情報交換、難しい事例を受けた場合、相談終了後に情報を共有し、今後に生かしていく等メリットも大きい。

また、今年度前半は相談員が本業の仕事の都合でシフトを変更することもあった。ミーティングで話し合った結果、シフト調整係が必要ということになった。現在ホットライン部門所属のゲイスタッフ1名が担当しており、今後は研修を経て、相談員としても活動する予定である。今年度は大雪で交通機関が麻痺したことが数日あったが、シフト調整係の素早い対応で、事務所近くの相談員が急遽代行することができた。

### B. 相談日数・時間枠の検討と広報の必要性

今年度の相談件数は、前年度と同程度であった。前出「相談電話の情報源」を見ると、相談者はあらゆる情報源を見て電話を掛けていることがわかる。よって現状の曜日、時間枠で行うことが妥当であると考えている。

### C. 陽性者等の対応に関して

今年度は10%台に増加した。これは、土曜夜に開いている相談機関に限られていることも影響しているのであろう。寄せられている相談も複雑で多岐にわたっていることが、前出「(9) 陽性者等の対応について」からわかる。例年通りGフレ電話相談では、感情の受け止めに大切に、専門的知識が必要な相談に関しては適切な相談機関を紹介し、陽性者等が孤立しないよう心掛けている

### D. 非HIV相談に関して

相談員は、かかってくるあらゆるすべての相談に対応している。しかし相談員により得意不得意があるのも事実である。特にセクシュアリティ(性的指向)の相談は、相談員自身の精神状態が揺れ、自己の価値観で相談者の話を聴いてしまう可能性もあり難しい。しかし専門家でないゲイという当事者が相談にあたるGフレ電話相談は、相談者と相談員は対等であり、相談の自由度が高い。解決策を見いだせないセクシュアリティ(性的指向)の相談も、自己の経験を踏まえて相談にあたっている記述も多く見られた。この点がGフレ電話相

談の特色である。これらを踏まえ、今後ミーティングやケースカンファレンスで情報を共有し、質の高い相談を続けていきたいと考えている。

### E. TwitterやFacebook等の活用

前年度より、試験的にTwitterやFacebookを使い、Gフレ電話相談やイベントの告知をしている。どのようにおこなえばよいのか試行錯誤であるが、ゲイの出会いが掲示板やスマートフォンのアプリが主体になっている現在、さらに活用することで可能性が広がることが考えられる。また、転居でシフトに入れなくなった相談員からは、LINEの通話機能を使えば、離れていても活動を続けることができると提案があった。自殺防止や薬物依存の相談では、若年層を対象にしてすでにLINEを使って相談を行っている機関が存在する。実現には課題も多いと思うが、電話相談の補助として活用できないか、他の取り組みを参考にしつつ、ニーズがあれば検討していきたい。

## 2. QOGL ～ Quality of Gay Life～(報告者：sakura)

昨年度から開催している「QOGL ～ Quality of Gay Life～」は、ひとりひとりが考える「理想のゲイライフ」に対して、「健康上や生活上のリスク」との折り合いをどのようにつけていくのかを考えるきっかけを提供するイベントである。同時に、会場内にHIV陽性の人がいることをふまえて、専門家によるレクチャーやクロストークの中に陽性者が会場にいることをごく当たり前のものとして絡めることで、コミュニティにおけるHIVのリアリティを伝える効果もプラスしたいと考えている。

2013年度は、8月と2月に2回の開催を計画したが、2/8(土)に開催予定だったvol.4は、当日首都圏を襲った大雪のため、当日になって急遽開催を中止することとした。ふれいす東京としては、日中のイベントは開催されていたが、当日のQOGLは19時からのスタートを予定しており、時間が遅くなるにつれて積雪も多くなり帰宅困難者を出す可能性があると判断したためである。

中止に関する告知はWebサイトとTwitter・Facebookを中心に、また電話対応並びにスタッフが会場に待機しての対応を実施した。

## ●QOGL vol.3 肌のトラブル編

### 「肌のチェック、してますか？」

開催日	2013年8月4日(日)
会場	新宿区戸塚地域センター
来場者数	12名(20～50代)
出演者	稲田香里さん(新宿東口クリニック/豊洲病院) 高久陽介さん(JaNP+) かなめさん

第3回は真夏のイベント開催となり、初回・第2回の来場者アンケートでも一定の票を集めたテーマである「スキンケア

ア」を取り上げることにした。日焼けやメンズコスメに対する関心のあるゲイ・バイセクシュアル男性も多く、また人によっては脂漏性皮膚炎をはじめとした皮膚症状をきっかけにHIVへの強い不安を持つこともある。

今回専門家ゲストとしてご出演いただいた稲田先生には、まずHIVと関連する皮膚疾患として脂漏性皮膚炎や帯状疱疹などについてのレクチャーをいただいたのち、一般的な皮膚のケアの話に展開していただきました。また後半のクロストークでは、見た目の問題であることから自尊心の話題に振れたり、HIV陽性者にとっても重要な加齢の話になったりと、奥の深いセッションになった。

今回は初めての試みとして、「ゲイ・バイセクシュアル男性」に限定しない形式のイベントとしました。セクシュアリティを細かく問うてはいないのですが、明らかに女性の方や、トランスジェンダーと思われる方の来場もあった。毎回来場者アンケートでは来場者の範囲についてたずねているが、「ゲイ・バイセクシュアル限定がよい」「LGBT限定がよい」「特に限定しなくともよい」のそれぞれに意見は常に割れている。今後も数回に1回の割合で、オープンな機会を設けていく予定である。

**QOGL 「肌のチェック、してますか？」**  
 — Quality of Gay Life —  
**Vol.3 肌のトラブル編**

■日時  
**2013年**  
**8月4日(日)**  
 14:30~16:30(14:00開場)

■場所  
**新宿区戸塚地域センター**  
 (高田馬場駅早稲田口徒歩3分)

**入場無料**  
**先着40名**  
※先着順です。定員は40名です。定員に達した場合は、入場できません。

イラスト：村田ボコ

■出演者 **稲田香里**(皮膚科/新宿東口クリニック) **高久剛介 他**

ふれいす東京  
**Gay Friends for AIDS**  
 Website : <http://gf.ptokyo.com>  
 Facebook : <http://www.facebook.com/ptokyoGF>  
 Twitter : [@ptokyo\\_gf](https://twitter.com/ptokyo_gf) / [http://twitter.com/ptokyo\\_gf](https://twitter.com/ptokyo_gf)  
 E-mail : [gf@ptokyo.com](mailto:gf@ptokyo.com)

※QOGLは東京ゲイ・バイセクシュアル男性向けのイベントですが、全国でゲイ・バイセクシュアル男性の健康増進を目的としたイベントを開催する予定があり、その一環として本イベントを開催いたします。  
 ※このイベントは特定の団体の方々の協力を得て開催いたします。  
 ※イベント情報はTwitterで配信しています。#ptokyo\_gfをフォローしてください

### 3. そのほかの活動

#### ●広告出稿

本年は、ピンクドット沖縄とレインボーマーチ札幌ファイナル、以上2つのイベントのパンフレットに、Gフレ電話相談とポジティブラインを中心とした広告を出稿した。

ピンクドットは名前のとおりピンクをテーマカラーにしたイベントであるため、同イベントパンフレット限定のピンクを基調とした広告を作成した。

#### ●広報用 Twitter、Facebook

Gフレでは、電話相談や前述のQOGLをはじめとした各種イベントなどの広報活動に役立てるべく、Gフレ独自のツイッターアカウント、フェイスブックページを運用している。

Twitter : @ptokyo\_gf

Facebook : <http://www.facebook.com/ptokyoGF>

#### ●NLGR+

今年も名古屋で開催されたNLGR+に参加した。今年もCBO合同ブースでの参加ということで、実行委員会に名を連ねているANGEL LIFE NAGOYAをはじめ、やろっこ、akta、SHIP、魅惑的倶楽部、MASH大阪、HaaTえひめ、Love Act FUKUOKA、nankr、JaNP+、三重ダルクの皆さんと合同で出展し、各種冊子の配布を行った。

今年のNLGR+は、毎年イベントのフィナーレを飾る恒例行事である「同性結婚式」において、ふれいす東京のスタッフが挙式することになった。そのためGフレ以外の部門のスタッフも含めふれいす東京関係者が多数参加した。また



CBO 合同ブース



Happy Wedding!!

CBOどうしの交流会や勉強会も開催され、充実したイベントとなった。

### ●TOKYO RAINBOW WEEK

LGBT関連のイベントとして、今年度よりTOKYO RAINBOW WEEKがスタートした。ゴールデンウィーク中にさまざまな団体がセクシュアルマイノリティー関連のイベントを集中的に実施するという試みで、ぶれいす東京もJaNP+との共催イベントとして5月6日にイベント「HIVとカミングアウト」を開催した。

Gフレメンバーも多くがスタッフとして参加した。TOKYO RAINBOW WEEKの関連イベントであることから、レズビアンやトランスジェンダーのかたの参加も多く、そうした方にぶれいす東京の活動を知ってもらうきっかけにもなったと思われる。また、ゲイ・バイセクシュアル男性の中にも、セクシュアリティで縛りをいれないイベントのほうが参加しやすいというかたがおられることもわかり、今後の活動にさまざまなヒントが得られる機会となった。

### ●最後に

2012年度は、QOGLという新たなシリーズイベントを立ち上げ、電話相談との二本柱の活動体制を作った一年となった。どちらも今後も継続し、さらによりよいものにしていくよう取り組んでいく所存である。

Gフレの活動にご支援くださった皆様はこの場を借りて御礼申し上げます。またイベントのフライヤー配布や、Twitter・Facebookなどを通して広報活動にご協力いただいた皆様にも心より感謝しております。ありがとうございました。

2014年度もGay Friends for AIDSをよろしく願い申し上げます。

## 部門報告（ネスト）

### I 活動概要

おもな活動は、ネスト・プログラムの運営、プログラムのための人材育成・研修、Webサイト「web NEST」の運営である。

#### (A) ネスト・プログラム

HIV陽性者やそのパートナー、家族が、安心して話し合ったり、学習や情報交換をしたり、交流したりすることを目的としている。多くのプログラムはHIV陽性者を対象としているが、陽性者のパートナーや家族を対象としたものも開催している。プログラムに参加するには、事前に守秘義務への同意と利用登録が必要である。プログラムでは、相談員や司会進行役のスタッフのもと、毎回、最初にグラウンドルールを確認している。

ネスト・プログラムにかかわるスタッフ、相談員、web NEST担当者などで会議を設け、企画運営をしている。また、毎月ネスト・ニュースレターを発行して、ネスト・プログラムの案内や報告などを掲載している。メール版、携

帯メール版も同時に配信している。

#### (B) 人材育成・研修

2012年度より積極的に人材育成を行うようになった。ぶれいす東京の合同研修修了者のなかで、ネスト・プログラムのボランティア希望者にファシリテーター研修を行っている。また、プログラムのセクレタリー（受付業務）として活動するスタッフには、別途、オリエンテーションと実地研修を行っている。

#### (C) Webサイト「web NEST」

HIV陽性者とそのパートナー、家族、ともだちのために役立つ、情報や経験の共有・共感の場をweb上で提供している。「つれづれ日記」「よくある質問集」、「あれこれリンク集」、「HIV関連ワード」などがある。ネスト・プログラムの案内や参加感想文、HIV陽性者に有益と思われる情報も随時掲載。2009年7月に、携帯サイト「mobile NEST」も開設した。

**会ってみる 参加型プログラム**

**HIV陽性者・パートナー・家族のためのネスト・プログラム**  
参加者が安心して話し合ったり、学習や情報交換をしたり、交流ができます。初めて利用する方は、守秘義務への同意、利用登録が必要です。

**● 学習会・セミナー**  
HIVと長く付き合いながら、自分らしく生きていくために、必要なスキルを身につけたり、専門家からの情報やさまざまな体験者の話に触れてみませんか？

**● 役立つスキルを身につけよう**  
・ストレス・マネジメント講座  
・アサーティブ・コミュニケーション入門

**● 役立つ情報を集めたい**  
・さまざまな専門家を知ろう  
・社会制度/医療の基礎を学ぶ  
・企業を招いた就職支援セミナー

**● グループ・ミーティング**  
ミーティングで直接、自分の経験を話したり、他のメンバーの話聞くことで、気持ちをわかってくれる人がいて、ひとりでないと思えたり、自分と違う考え方に接することで、視野が広がる可能性があります。

**● HIV陽性者向け**  
★ゲイ・バイセクシュアルの方も多く参加しています。  
・陽性とわかったばかりの人(6ヶ月以内)  
・男性(10代、20代、30代)  
・男性(40代以上)・女性・異性愛の男女  
・職業別(介護職)・職業別(看護師)

**● 陽性者の周囲の人向け**  
・陰性パートナーの会  
・母親の会・カップル交流会

**● 体験談を聞きたい/話したい**  
・陽性者のさまざまな体験を聞く会  
・就職活動の情報交換会

ネスト・プログラムの最新の情報や感想文などについては、web NEST(<http://web-nest.ptokyo.com/>)をご覧ください。  
問い合わせは、ぶれいす東京事務所にお電話いただくか、[nest@ptokyo.com](mailto:nest@ptokyo.com) までご連絡ください。

「HIV陽性者とその周囲の人のためのサービス」案内パンフレットより

表1 ネスト・プログラムと参加状況

プログラム名	実施回数	のべ参加者	(A) (B)		実施日ほか
			(A)	(B)	
<b>(1)グループ・ミーティング</b>	<b>70回</b>	<b>681名</b>	<b>68名</b>	<b>120名</b>	
1 新陽性者ピア・グループ・ミーティング	20回	115名	20名	45名	68期～72期まで実施 実人数：参加者32、ファシリテーター：ピア5/スタッフ5、コーディネーター1
2 新陽性者PGM同窓会	2回	16名	3名	2名	7/20(土)、3/1(土)
3 ミドル・ミーティング(40才以上の男性陽性者)	11回	237名	—	25名	毎月第2土の13-15時に開催
4 U40(アンダー・フォーティ)ミーティング	11回	87名	22名	15名	毎月1回開催
5 Women's Salon(女性陽性者のためのプログラム)	2回	6名	—	4名	7/21(日)、2/1(土)
6 異性愛者のための交流ミーティング	12回	137名	19名	16名	原則として奇数月の第4土と偶数月の第3金に開催
7 カップル交流会(+/+or+/-カップル)	2回	36名	4名	2名	10/20(日)食欲の秋満喫!中華食べ放題、1/4(土)新年会
8 陰性パートナー・ミーティング	6回	31名	—	6名	偶数月第1土の13-15時に開催
9 もめんの会(HIV/AIDSを支える母親の会)	4回	16名	—	5名	6/26(水)、9/25(水)、12/4(水)、3/11(火)
<b>(2)トークサロン</b>	<b>22回</b>	<b>101名</b>		<b>35名</b>	
1 就職活動を報告しあう会	10回	37名	—	15名	原則として毎月1回、水曜日と土曜日に交互開催
2 介護職として働く陽性者のためのミーティング	6回	33名	—	9名	4/15(月)、6/24(月)、9/2(月)、10/21(月)、12/11(水)、2/18(火)
3 看護師として働く陽性者のためのミーティング	6回	31名	—	11名	5/18(土)、7/16(火)、9/10(火)、11/13(水)、1/29(水)、3/19(水)
<b>(3)ピア+トーク NEW!</b>	<b>3回</b>	<b>44名</b>	<b>6名</b>	<b>7名</b>	
1 第1回 女性の陽性者と妊娠・出産	1回	13名	2名	2名	5/18(土)、ゲスト2名
2 第2回 何かにはまってしまった経験談を聞こう	1回	13名	2名	3名	9/27(金)、ゲスト2名
3 第3回 障害者枠で就職しているHIV陽性者の体験談を聞こう	1回	18名	2名	2名	11/16(土)、ゲスト2名
<b>(4)学習会/ワークショップ/セミナー</b>	<b>20回</b>	<b>175名</b>	<b>4名</b>	<b>52名</b>	
1 ストレスとうまくつきあうためのワーク	9回	53名	—	21名	第19期～第21期
2 アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC	4回	46名	—	12名	第2期～第3期各2日 講師1名(のべ4名)
3 シリーズ“専門家と話そう”	1回	18名	—	6名	8/22(木) 第12回「生命保険のプロと話そうⅢ」ゲスト2名
4 ベーシック講座「社会福祉制度」	4回	10名	—	3名	4/24(水)、7/24(水)、11/30(土)、2/22(土)
5 就職支援セミナー	2回	48名	4名	10名	第2回7/25(木)ゲスト2社(2名)、第3回1/22(水)ゲスト2社(2名)
<b>(5)交流会、その他</b>	<b>1回</b>	<b>33名</b>	<b>4名</b>	<b>8名</b>	
1 年末パーティー	1回	33名	4名	8名	12/22(日)
<b>プログラム参加者総数</b>	<b>116回</b>	<b>1034名</b>	<b>82名</b>	<b>222名</b>	

(A)ピア・ファシリテーターなど

(B)スタッフ・ファシリテーター、講師、セクレタリーなど

## Ⅱ. 2013年度活動実績

(2013年4月1日～2014年3月31日)

- スタッフ数(2014年3月31日現在) 6名
- 実利用者数 298名  
(うち新規利用者数 114名)
- 延べ利用者数 1,116名  
(うちピア・ファシリテーターなど積極的参加 82名)
- プログラム開催数 116回  
プログラム内容は表1を参照
- ネスト・ニュースレター 月1回 年12回発行

そのほかに、ネスト・プログラム・スタッフ会議や、新陽性者PGMファシリテーターによる、各回、各期の振り返りミーティング、web NEST運営委員会、多目的室の整備など、ネスト・プログラムやweb NESTを運営していくために、陽性者が積極的にかかわって、多くの会議や活動が行われている。

## Ⅲ. 2013年度活動報告

(A)ネスト・プログラム

web NESTの「レポート」には、ネスト・プログラムの報告や参加感想文が多数掲載されているので、合わせてお読みください。

### (1)グループ・ミーティング

#### (1)ー1 新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)

##### 1. 概要報告

新陽性者ピア・グループ・ミーティング(PGM)は、HIV陽性と知ってから6ヶ月以内の陽性者5～7名が、2時間のミーティングを2週間毎に計4回(1期)参加し修了となるプログラムである。2001年4月に第1期がスタートしてから、2014年3月で丸13年が経過した。開催数は通算で67期(268回)、参加者数はのべ1,428名(実人数：393名)である。

感染告知を受けて心身共に不安定になりがちな最初の数ヶ月間を同じ立場の仲間と過ごすことで、問題の解決のヒントや、先の見通しを得てもらうことがこのプログラムの大きな

目的である。また、このプログラムをきっかけとして今後も連絡を取り合う仲間を得たり、ぶれいす東京が提供する他のサービスに繋がるきっかけとなる場合もある。このプログラムへの参加を経験した、いわゆる卒業生からスタッフへと移行したピア・ファシリテーターは、2014年3月現在ピア全体の過半数を占め、循環型のプログラムとして順調に機能している。

2013年度は、第68期1回目から第72期4回目までの5期にわたり20回が開催された。以下、今年度内に期を終了した第68期(2013.4.6開始、5.25終了)から第72期(2014.1.11開始、2014.2.22終了)の5期分についての報告を行う。参加者はのべ人数115名、実人数32名であった。平日夜コースが2期、土曜の夕方コース(1回のみ祝日開催)が1期、土曜の夜コースが2期、計5期である。年度途中でコーディネーター交替があった一昨年度と比較し、開催期数は5期と例年並みに戻った(2010年度:5期、2011年度:4期、2012年度:3期)。2012年度では欠番期が生じ、対象者のニーズの変化や陽性者同士で出会える他のツール(SNSやその交流会など)への移行、また広報の問題などが危惧されたが、医療機関からの直接的な紹介などが復調傾向にあり(後述)、結果的に参加希望者の増加という形に繋がったと思われる。ぶれいす東京の公式Twitterや陽性者向けSNSでの案内などが広報面でかなり効果を上げていると思われる。参加人数は1期平均6.4名、出席率は89.8%と、昨年度(6名、87.5%)と比較すると若干上昇している。

現場担当であるファシリテーターの確保・育成が急務であったが、2012年度のボランティア合同研修、その後のファシリテーター研修の修了者の中から現場デビューを果たしたスタッフが複数おり、さらに2013年度の研修修了者からデビューに備えてトレーニングを受けているスタッフがいる。2014年3月現在で、ピア・ファシリテーター8名、スタッフ・

ファシリテーター4名、医療情報スタッフ2名、トレーニング中のファシリテーターが4名となっている。

## 2.「参加前アンケート」より

通期で参加者アンケートを実施しており、オリエンテーション時に行う「参加前アンケート」は、32名の回答を得ている。おもに参加者の属性やHIV陽性と知った経緯やその後の状況を聞いている。

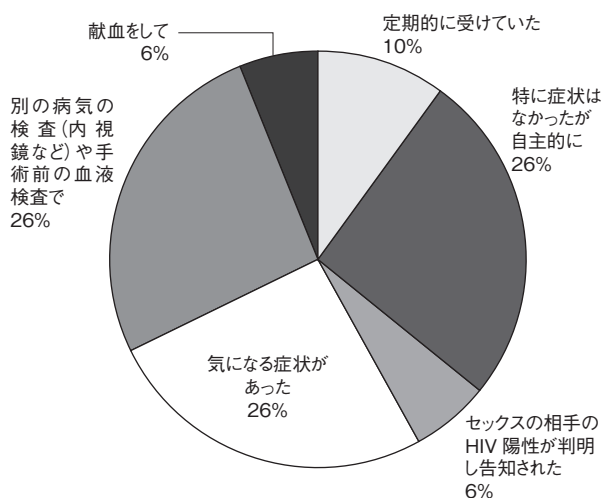
性別は全員が男性で、年代は30代が全体の38%ともっとも多く、次いで20代と40代がそれぞれ28%、50代以上が6%であった。陽性と知ってから参加までの経過月数は、2ヶ月と3ヶ月がそれぞれ8名ずつともっとも多かった。

抗体検査を受けるきっかけは、「特に症状はなかったが自主的に」「気になる症状があった」「別の病気の検査(内視鏡など)や手術前の血液検査で」が同率で26%であった。近年、特に症状がなく自主的に検査をして陽性とわかる人の割合が低く、何らかの理由で病院に行ったり症状があったりする人の割合が高いという傾向が続いていたが、今回についてはその状態がやや弱まった。抗体検査を受けた場所は、病院(外来)と病院(入院)を合わせると54%と昨年(66%)より減少したが、それでも過半数を超えている。

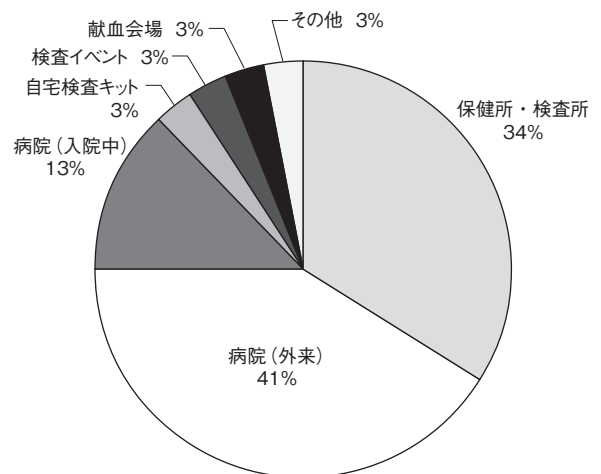
オリエンテーション時点において、全員が通院していた。25%がすでに服薬開始しており、4割以上が身障者手帳をすでに取得しているか、または申請中であった。治療ガイドラインで服薬時期が早まっていることや、相当数が何らかの症状を自覚しており、服薬が早まっていることが考えられる。

周囲への通知は、5人以上に伝えている人が22%いる反面、誰にも通知をしていない人も同率の22%であった。当事者にとって周囲へ通知することには依然ハードルの高さがあることがうかがえる。PGMをどうやって知ったか(複数回答)は、例年と同様にインターネットが最多であったが、看護師、

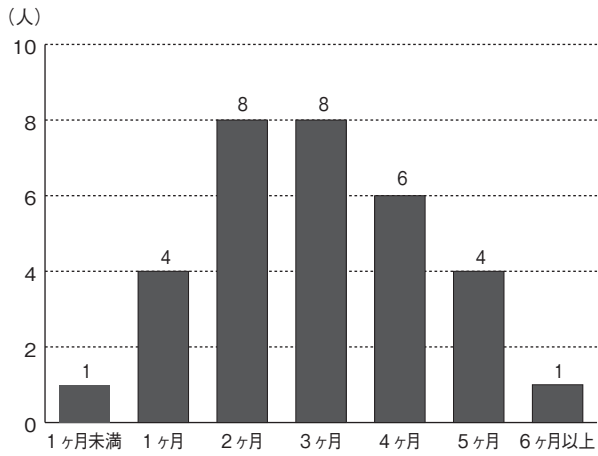
抗体検査を受けるきっかけ (n=32)



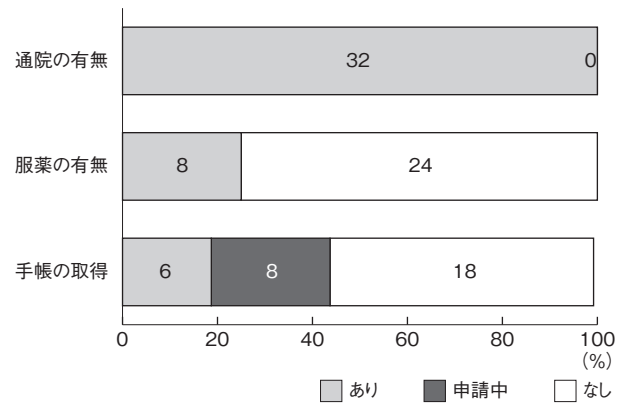
抗体検査を受けた場所 (n=32)



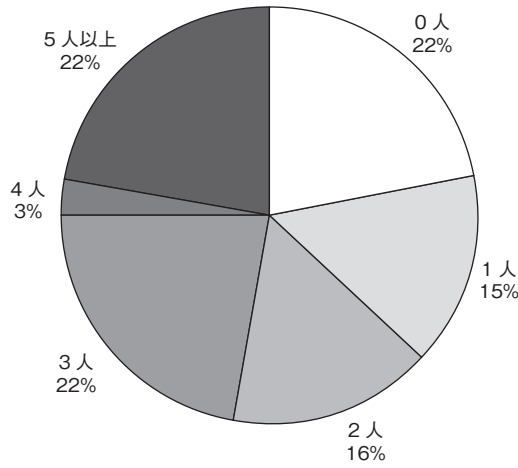
告知後の経過月数 (n=32)



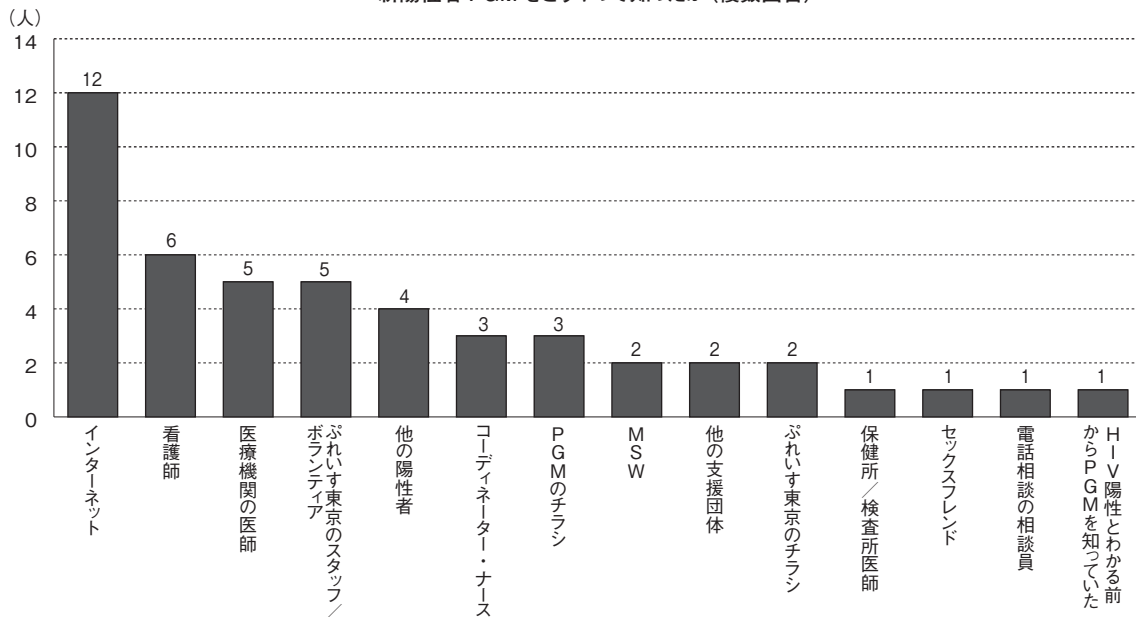
通院/服薬/身障者手帳の有無 (n=32)



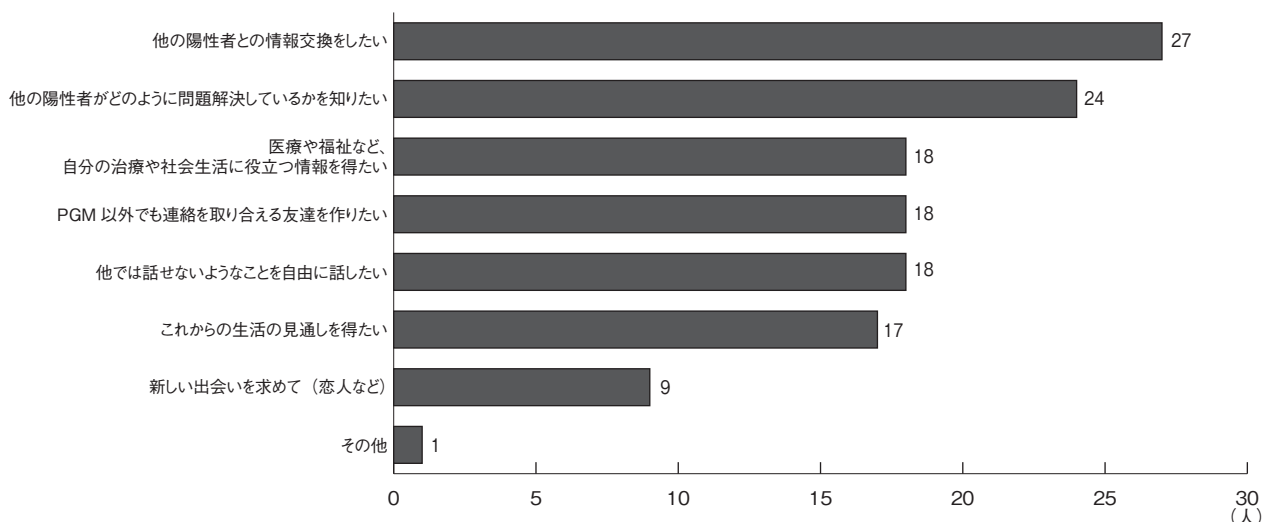
周囲への通知人数 (n=32)



新陽性者 PGM をどうやって知ったか (複数回答)



PGMに期待すること(複数回答)



医療機関の医師、コーディネーター・ナースなど、医療従事者からの紹介によるものが格段に増えている。医療機関への働きかけ、他のプログラム(就労に関するものなど)の相乗効果などが影響しているものと思われる。インターネットからのアクセス割合が今後も高まることが予想されるが、本当に必要な人に的確に情報を伝えるためには、これまで以上に医療機関や検査所などとの連携を強める必要がある。

PGMに期待することは、他の陽性者との情報交換や問題解決とした参加者が多かった。全体的な傾向は例年と同じと言えるが、各項目の差が小さくなっていることからニーズの多様化が進んでいると思われる。

### 3.「参加後アンケート」より

最終回のプログラム中で「参加後アンケート」を実施しており、最終回に欠席をした6名を除く26名の回答を得た。PGMに参加して感じたこと、参加者の意識の変化や、PGMで得られたもの、参加前と最終回の変化などについて聞いている。5段階評価と自由記述で構成されており、豊富な記述が得られた。その一部を下記に掲載する。

PGMに参加して感じたことを聞いた質問では、全員が「自分のプライバシーが守られている」「自分のペースで自由に話せた」「お互いの価値観を尊重しあうことができた」「言葉による暴力は受けなかった」「行われた部屋は適切だった」の項目で「とても当てはまる」「当てはまる」と回答した。「ミーティングの回数と開催間隔は適切だった」の項目では例年同様他の項目と比較して「とても当てはまる」「当てはまる」の割合は低めであった。自由記述の中には、PGMの「5回目」を数ヶ月後に開催して欲しいという要望もあった。

意識の変化について、「良く変化した」「やや良く変化した」と回答した参加者がもっとも多かったのは「気持ちの揺れ方」92%、次いで「日常生活のイメージ」が85%となっていた。「恋愛やセックスについての意識」「仕事についての意識」がやや低めの割合で、参加者が不安を持っていたり今後の課題だと感じていることが想像できる。

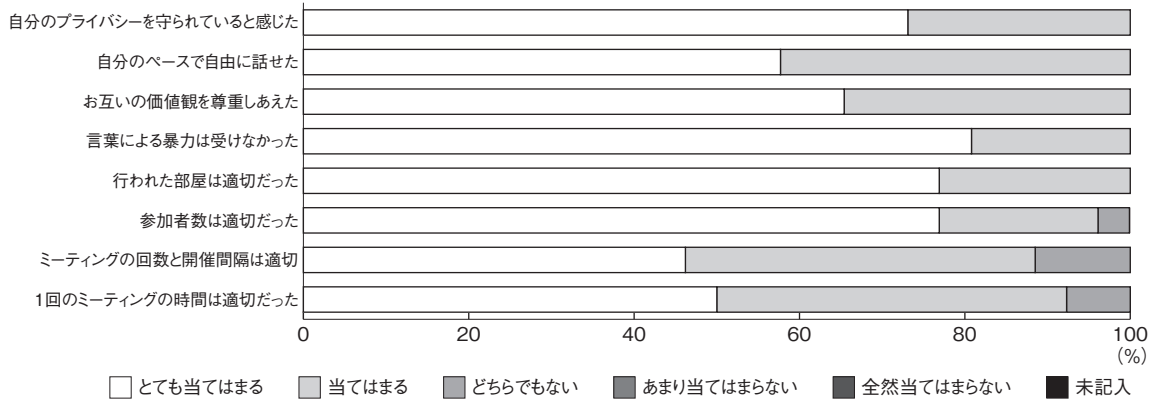
オリエンテーション時にPGMに期待していたことが得られたかという質問に対しては、回答者全員が「とても得られた」「得られた」と回答した。特に「とても得られた」の73%という数字は、この形式でアンケートを取り始めてからもっとも多い比率である。何が得られたかという質問に対する選択肢では、「似た境遇の人と会えて安心できた気持ち」において96%の参加者が「とても得られた」と回答している。例年他の項目と比較すると「とても得られた」「得られた」と回答する割合が低い「これからも連絡を取り合える仲間」については、今回は7割を超えており、参加前に期待していたニーズにある程度応えられていたと言える。

同じ立場で安全な場を共有し、安心感と客観視できる視野を得て修了するといった例年の傾向は引き続き保たれていると思われる。同じ境遇の人と安心して話せて、病気のイメージが好転したという傾向が見える。特に期待が集中した他の陽性者との交流に関しての満足度が高かったことで、全体的なプログラムへの評価が高まったと思われる。

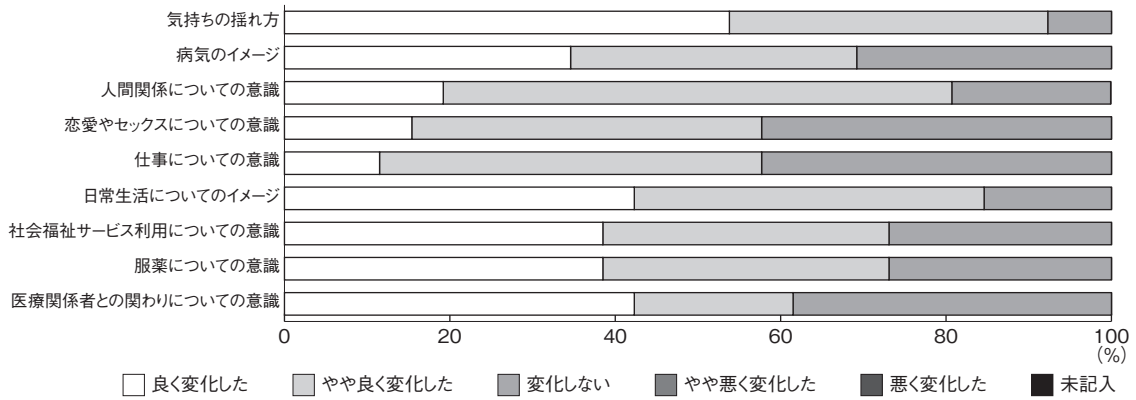
#### 参加者のアンケートより(抜粋)

- ・ファシリテーターお二人のお心遣いに毎回感謝しながら参加させていただきました。自分もお二人のような周囲への配慮に溢れた人間になれたらと思います。
- ・同じHIV感染者としての話は、リアリティがあり、とても参考になったと思う。難しい集まりではあると思うが、うまくマネジメントされていて安心感がありました。
- ・様々な想いの方がいて、自分と同じような考えの方には共感できたり、新しい考え方、価値観の方とは新たな発見(視野が広がって)ができすぎく勉強になった。
- ・「苦しいのは一人じゃない」ということ。これに尽きます。苦しい中でも、自分なりの打開策を見つけて少しでも前進しようとしている様子をうかがい知ることは、自分にも影響をもたらしました。
- ・PGMは心の安定性を得る上で、とても大事な機会でした。話し合いだけではなく、病気の知識も得られる、す

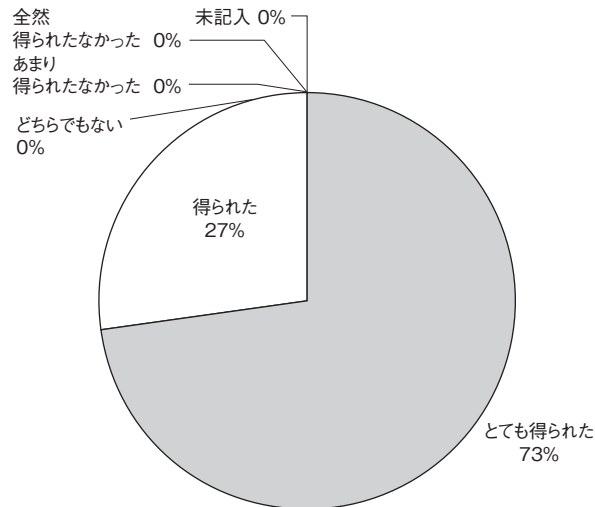
新陽性者 PGM で感じたこと (n=26)



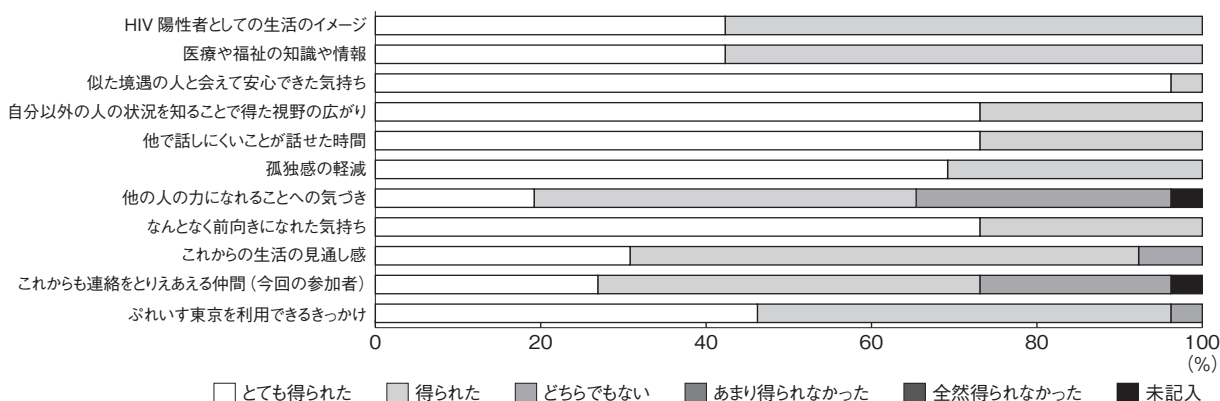
意識の変化 (n=26)



期待していたものが得られたか (n=26)



新陽性者 PGM で得られたもの (n=26)



ばらしいカリキュラムによって、私自身視野が広くなり、心にゆとりを得られた。

- ・参加前は不安感や絶望感を強く感じていたがミーティングに参加することによりその気持ちに変化を感じることができるようになりました。HIVを受け入れることができるようになった気がします。
- ・感染を知ってからは陰の考え方しかできませんでした。参加させていただいてそんな陰の裏には陽があることを改めて実感しました。時には悲しむ事も必要ですが、それをバネにしてもっと楽しく生きていこうと思えます。
- ・今回のPGMに参加させて頂き、とても良かったと感じています。自分一人だけではない、また支えてくれる人も沢山いるという事をとても感じることができました。明確な答えを出すものではありませんが、お互いが気持ちを共有して、様々な問題に対して意見交換をするという事は今後の自分の為にとっても良かったと思います。一点申し上げますが、最後の方の色紙を使う話題については、色紙を使う意図についてもっと詳しく説明して頂けると良かったと思います。どうもありがとうございます。(無料なのが申し訳ないくらいに感じます。)

### (1) - 2 新陽性者 PGM 同窓会

新陽性者 PGM 同窓会は、感染告知後間もない陽性者が集まる場として約13年間継続開催している「新陽性者ピア・グループ・ミーティング (PGM)」の参加者の「その後」を共有するプログラムとして2012年にスタートした。過去の PGM 参加者の声と、現場スタッフであるファシリテーターの想いから生まれたプログラムであり、新たなスタートを切った参加者同士が「PGM」というキーワードで繋がることができる新たな試みでもある。

2012年開催の初回はネスト・プログラムのコーディネーターであるピア・スタッフ2名による進行であったが、2回目はボランティアとして PGM に関わるピア・ファシリテーター1名とピア・スタッフ、3回目は通常の PGM と同じ形式で、ピア・ファシリテーターとスタッフ・ファシリテーター

の2名体制で行った。

参加条件は、「過去に一度でも新陽性者 PGM に参加経験があること」で、必ずしも4回連続で参加していなくてもよい。従って、例えば最終回の参加が叶わずに、気持ちの上で中途半端さを抱えたままの者が申し込むことも想定される。また、PGM という一定のルールに則ったプログラムの経験者ではあるが、同期ばかりが集まる訳ではなく、同窓会の場合初対面であることの方が多い。

感染当初のことも当然話題には上るが、実際には参加者たちの「今」をその場で共有することがメインとなった。感染告知直後に同じ立場の仲間と過ごしたことの効果や影響も語られるが、話題の中心は今現在抱えている問題や悩みのことであり、単なる思い出話を語るだけに留まらないものとなった。

2013年度は予定通り、2回実施した。通算2回目は2013年7月20日(土)午後開催で10名が参加。3回目は2014年3月1日(土)午後開催で6名が参加。

この同窓会をきっかけに、一度ぶれいすから離れてしまった方がまた参加するようになったり、今後参加者の中からボランティアなど新たな形でぶれいす東京と繋がってくれる人材が育つことや、既存のスタッフのモチベーションの向上にも期待が持てる。参加者にとってはもちろん、運営する側にとっても重要なプログラムである。

### (1) - 3 ミドル・ミーティング

毎月第2土曜日に開催しているミドル・ミーティングは、基本的には40代以上の男性 HIV 陽性者のミーティングである。今年度は11回開催して、のべ237名の参加があった。毎回20名をこえる人数が集まるようになった。毎月参加する方もいるが、時々くる人、新たに参加する人もいて、この人数が維持されている。2時間のミーティングがスムーズに進行できるように、ルールや進行方法を工夫するなど、試行錯誤を続けながら、ミーティングを進めている。参加者のなかには、遠距離から時間をかけて参加する方もいる。また、身体的なハンディのある方については、参加時と帰宅時にバディ・スタッフが付き添っている。現在、数人の方がバディを利用して参加している。参加者同士、定期的にお互いの顔をみて、

近況を聞き合いながら、また次回お会いしましょうねと散会する。この場が互いに励まし合う、定期的に挨拶をかわすサポート・ミーティングとなっている。

#### (1)－4 U40ミーティング(10代、20代、30代の男性陽性者)

2012年度に立ち上がり、原則月1回開催しているU40だが、今年度は11回・のべ87名の参加があった。曜日や日にちを固定せずに平日と土曜日を織り交ぜて開催しているが、コンスタントに毎回10名近くの参加者が集まるようになり、定番プログラムの一つとなった感がある。U40が初参加のプログラムとなる参加者数は17名にものほり、PGM同様ネスト・プログラムへの入り口としての役割も果たしつつある。今年度は2月8日に「地域における当事者支援のためのスタディ・プログラム」(ぶれスタ)の一環として、参加者の承諾を得たうえで見学者を受け入れた。またクリスマスである12月25日開催時には、質問を紙に書いて箱に投函し、くじ引き形式で読み上げてみんなで答えるという方法を取ったところ、匿名性が保たれたことで普段聞きづらいことが聞けたと参加者に好評であった。毎回その回が初参加となる方に優先的に話題提供をしてもらっているが、比較的感染から日が浅い参加者に対して先輩が経験などを語ることがある一方で、逆に感染から年数が経った参加者がフレッシュな意見を聴いて初心に戻るという場面もある。進行は引き続きピア・ファシリテーターであるスタッフ2名で行っていて、ミドル・ミーティングと並び、近況や悩みなどを共有するサポート・ミーティングとして機能している。

#### (1)－5 Women's Salon

Women's Salonは女性陽性者のためのプログラムで、他の参加者と交流しながら、女性どうして安心して情報をわかちあう場である。2013年度は「午後のお茶会～女性のためのフリートーク」と題して、7月21日(日)と2月1日(土)の2回開催した。7月の回は5名が参加して、近況報告から恋愛まで、話がつきることない女子会となった。2月の回は、当初5名の申し込みがあったが、当日体調が悪いなどでキャンセルがでて、結果的に1名の参加となった。そのため、生島も参加して、情報提供をした。

来年度からは、より気軽に集まれるように、予約不要のプログラムに移行して、ゲストを招いて行うプログラムは、「専門家と話そう」や「ピア+トーク」で、女性向けを開催する予定である。今後も、ネットワーク作りの手助けになれるような場、女性が気軽に集まれる会にしていきたいと思っている。

#### (1)－6 異性愛者のための交流ミーティング

男女各1名の呼びかけ人と相談員が話し合いを重ねて、2011年9月に立ち上げたミーティングである。当初2ヶ月に一度の割合で開催していたが、参加者からの要望で、2012年11月より毎月開催となり、現在は、原則として奇数月の

第4土曜日と偶数月の第3金曜日に開催している。2013年5月からは、ネスト・プログラムのファシリテーター研修を修了した、同じ立場の2名のピア・ファシリテーターが司会進行を担当している。2013年度は12回開催して、のべ156名(ピア・ファシリテーター2名のべ19名含む)が参加した。子づくり、男女の恋愛、結婚など、他のミーティングではなかなか話し合いづらいテーマを気兼ねなく話し合うことができる。異性愛の陽性者同士が交流できる場は限られており、難しさを共有できる仲間づくりができ、活発なミーティングとなっている。

#### (1)－7 カップル交流会

カップル交流会は、陰性パートナー・ミーティング参加者からの「カップルで参加できる場が欲しい」との声で開始した。陽性者と陰性者、陽性者同士のカップルが参加可能なイベントであり、持ち回りでカップルが世話人として企画・運営に主体的にかかわっている。参加するカップルも、同性愛、異性愛、陽性者と陰性のパートナー、陽性者同士、英語で会話するカップルなど、多様である。特に異性愛ミーティング参加者の参加が増えており、男女カップルも多く参加するイベントになってきている。本年度は、10月に中華食べ放題、1月に恒例の新年会の2回開催された。

##### ・第19回カップル交流会

「食欲の秋満喫！中華食べ放題」

2013年10月20日(日) 世話人1組と10組のカップル、計22名

##### ・第20回カップル交流会「新年カップル交流会」

・2014年1月4日(日) 世話人1組と8組のカップル、計18名

#### (1)－8 陰性パートナー・ミーティング

陰性パートナー・ミーティングは、奇数月の1土曜日に開催している。今年度は6回の開催で、のべ31名が参加した。男性だけではなく、女性のパートナーの参加もあり、セクシュアリティ、既婚の有無など多様な参加者が集まっている。陽性者の周囲で生活する人たちにとっては、他ではなかなか話せないことを話すことができる場となっている。2001年1月に始まって2014年2月まで、110回のべ404名が参加している。参加者の感想文(別掲)をぜひお読みください。

#### (1)－9 もめんの会(HIV/AIDSを支える母親の会)

もめんの会は、年に3～4回開催している。2013年度は4回のべ16名が参加した。子どもからその事実を知らされて10年以上経つ人もいれば、最近知らされて、そのことを受け止めるのに苦労している方もいる。子どもの年齢も10代から50代までと非常に幅広く多様だ。もめんの会は、子どもには言いづらい親としての思いをお互いに聞き合う会となっている。

HIV陽性者ともに暮らす、パートナーや母親などの家族が、他の場所でHIV陽性者とともに生活することに起因する様々

な思いを吐き出す場はなかなか得られない。どんなに有能な専門家の言葉よりも、時には「私もそうだったの」という一言に勇気づけられることもある。ミーティングが成り立つためには、その場をあたためてくれる同じ立場のメンバー達がいてくれることが開催の必要条件となる。こうした、「私も大変だったときに、他メンバーに支えられたから、来れる時は来ます」というお母さんたちの存在で、この貴重なサポートの場が保たれている。

#### 陰性パートナー・ミーティング参加者の感想文(「web NEST」2014年4月掲載より)

##### ■「二人の恩人」

むーこ(30代/男性/ゲイ/初回から参加)

わたしは初回からの参加です。パートナーのHIV感染発覚は、陰性パートナーMTG発足の半年前でした。わたしたちカップルは同じ秘密(パートナーが陽性者であることを)を共有し、世間に内緒にしていかななくてはならないはずなのに、陽性者であるパートナーには悩みを共有し、意見交換、情報交換する場があって、わたし(陰性パートナー)にはなかったことが当時はストレスになっていました。

もしこのMTGの発足があと半年遅かったらパートナーにイライラをおつけてしまうなど、2人の関係もギクシャクしてしまっていたかも?そういう意味ではこのMTGはわたしたちカップルの恩人です。わたしの場合の陰性パートナーMTGは、2人の関係の中だけでは発散されないガスを抜く「ガス抜き」的役割なのかと思います。

このMTGの面白いところは、人によって「駆け込み寺」になったり、「経験談を聞けるセミナー」になったりパートナーへの愚痴をこぼすための「井戸端会議」になったりと変幻自在なところ。(わたしは最近ではもっぱら「井戸端会議」利用です(笑))発足から13年経った今でも参加していますが、毎回「何か」を持ち帰っている気がします。

##### ■「自分を出せる場所」

メイ(女性/異性愛/パートナーの感染告知2009年)

半年ぶりにパートナー・ミーティングに参加した。この5年間、来られる時に来るというゆっくりペースで参加させてもらっている。パートナーのこと、自分の気持ち、病気のことはほかでは話せないから、ここはとても大事な場所。

きょうはたくさん笑った。ファシリテーターさんや参加の皆さんは、いつも思いやりにあふれている。苦難を乗り越えてきている人たちに囲まれることで私は癒されているなあ実感する。

思い起こせば5年前、パートナーの感染を知った私は崖っぷち。「陰性のパートナーって本当に存在しているの?会って話を聞いてみたい、私の話を聞いてもらいたい!」、その思いだけで参加した。デビューの時はボロボロに泣いていたけれど、ぶれいすさんや諸先輩方に癒され、鍛えられ、少しは成長してきたかな。

ここへ来るたびに勇気と希望をもらっている。皆さん、いつも本当にありがとうございます。これからもよろしくお祈りします。

##### ■「経験の分かち合い」

ビョウトル(男性/参加4回目/パートナーの服薬歴18年)

陽性パートナーがネスト・プログラムに参加し始めてから、次々に参加してましたので私も好奇心が出てきて、その上陽性パートナーと共通の趣味があり、二人で一緒に活動してきましたから、私は陰性パートナーが参加できる限りネスト・プログラムに参加したいと思っていました。

陰性パートナー・ミーティングではいろんな私の経験とは違う背景のある方の話を聞いたりすること、守秘義務の環境なので私が自由に話せることで自分の視野は広がってきて、孤立した気持ちが弱まってきました。

参加者の話はなるほどと即座にうなずく時があれば、しばらくして何かがあった時にふと言葉を思い出して、ためになることもあります。

##### ■「パートナーとの関係を続けるために必要な場所」

ハルピン餃子(40代/男/ゲイ/参加10回目くらい?)

なまじっか本人ではないから、陰性パートナーはストレスが溜まるんだと思う。この間も彼氏は薬を飲み忘れそうになった。本当に気が気じゃない。一番困るのは彼氏本人だと思うけど、傍らで見ている本当に冷や冷やする。「まったくこっちの身にもなって欲しい!」…そういう愚痴を言える場所は意外と無い。家族にも友達にも事情は話してあるけれど、親し過ぎる相手には、心配させてしまいそうで話せないことも多い。

でも、どこかで発散しないとストレス溜まるし、それでだんだんパートナーと上手くいかなくなっちゃう。陰性パートナー・ミーティングではそういうことを話せるから、ちょっとスッキリする。それで根本的な問題が解決するわけではないけれど、参加者同士で話を聞くことで、「そうそう!」って共感したり、他の人の状況に自分を重ねて、客観的に自分を振り返って冷静に考えられるようになったりしている。

僕にとっては、心の安定と、パートナーとの関係を続けるために不可欠な場所だから、いつも二ヶ月に一度の開催を心待ちにしている。

#### (2) トークサロン

2011年1月にスタートしたプログラム。少人数のグループで、日ごろ疑問に思っていることを、可能な範囲でお互いの経験を共有して、おしゃべりしながら、考える場である。2012年5月に「介護職として働く陽性者のミーティング」、そして、2013年1月に、「看護師として働く陽性者のミーティング」が新たにスタートした。

## (2)－1 「就職活動を報告しあう会」

一般枠で就職活動をしている人、障害者枠で就職活動をしている人など、就職活動といってもいろいろあるが、お互いの状況を聞きあいながら、自分の方向性を考えるきっかけをつかんでもらう場である。現在、毎月1回、水曜日と土曜日に交互開催している。

メンバーのなかから、就職して卒業するという方ができて、その後、ミーティングに成功体験を共有するために報告にきてくれるなど、実践的な情報が得られる場となっている。メンバーは入れ替わりながらも、毎回、3～8名の陽性者が参加し、自分の就職活動の方向性を考えたり、不採用という結果をうけとりながらも、心が折れないように互いを励まし合う場となっている。

2013年度 10回 開催 参加者 のべ 37名  
担当：生島 嗣(ぶれいす東京専任相談員)

## (2)－2 「介護職として働く陽性者のミーティング」

介護の仕事をしていると、利用者さんが、ケガしたり、ひっかいたり、つねったり、暴力行為をしたりする場合がある。このトークサロンは、介護に従事している陽性者同士で、仕事の悩み、将来のことなどを話し合う場である。介護職ミーティングでは、働き方を変えること(キャリアチェンジ)を検討中の人たちからの参加も受け入れている。実際、ミーティングに参加しながら、介護職員初任者研修に参加し、就職にいたった人たちもいる。現在、2ヶ月に一度、偶数月に開催している。

2013年度 6回 開催 参加者 のべ 33名  
担当：生島 嗣(ぶれいす東京専任相談員)

## (2)－3 「看護師として働く陽性者のミーティング」

日ごろ、HIVを持ちながら看護師として働くなかで、疑問に思っていたり、不安に思っていることについて、同じ立場の人同士であつまり、おしゃべりしながら考えてみる場である。介護職と同様に、同じ立場の陽性者と話してみたいという要望から、生まれた会である。2013年1月にスタートして、現在は、2ヶ月に一度、奇数月に開催している。HIV陽性である看護師の退職勧告事件が報道され、注目があつまっているが、実際に差別が一番残っている労働環境は医療や福祉業界なのかもしれない。

2013年度 6回 開催 参加者 のべ 31名  
担当：生島 嗣(ぶれいす東京専任相談員)

## (3)ピア+トーク

「ピア+トーク」は、2013年度の新企画で、さまざまな経験をもつHIV陽性者を迎えて話を聞くというプログラムである。下記のテーマで3回開催され、どれも好評であった。スピーカーと参加者の感想文を報告に変えさせていただいた

い。今後も、どのような経験を聞きたいか、利用者のリクエストを聞きながら企画する予定である。

### 第1回「女性の陽性者と妊娠・出産」

陽性とわかってから妊娠・出産を経験した女性陽性者2名にお話をお聞きした。参加者からもそれぞれの経験や思いなどが語られ、充実した会となった。

・日 時 2013年5月18日(土)  
・参加者 13名(女性陽性者とそのパートナー)

### 第2回「何かにはまってしまった経験談を聞こう」

アルコールや薬物を止められなくなった経験をお持ちのHIV+のおふたりに、そのことがどのように人生に影響したのかなどを話していただいた。

・日 時 2013年9月27日(金)  
・参加者 13名

### 第3回「障害者枠で就職しているHIV陽性者の体験談を聞こう」

平成23年度には全国で863名が免疫機能障害者としてハローワークに登録し、179名が障害者枠で就職している。障害者枠で働いている2人のHIV陽性の方に、実際に働いてみてのメリット、難しさなどを率直に語っていただいた。

・日 時 2013年11月16日(土)  
・参加者 18名

### 第1回「女性の陽性者と妊娠・出産」感想文(ぶれいす東京 Newsletter No.78 2013年8月号より)

スピーカーより

■『人生いろいろ、妊娠・出産もさまざままでいいと思う』

ハナ

今回ゲストスピーカーとして参加し、また何人かのお話を伺い、最も印象に残ったのは、人それぞれさまざまな妊娠・出産がある、ということです。この病気という共通の問題を抱えているにせよ、年齢や健康状態、パートナーの協力度や仕事の状況、それに親のサポートなど、それぞれ事情が異なるなかで、『この方法だけが正しい』と、結論づけるのはおかしな話です。

また以前、よく使用されていた薬に発ガン性があることが分かり使用中止になりましたが、時間の経過とともに事実も変わっていくわけですから、従来の方法を唯一のように捉えるのもどうかと思います。自分の患者に不測の事態が起きることは避けたい医療サイドの都合から、彼らにとってコントロールしやすい方法を勧められたとしても、それが上述したようなさまざまな条件のもとで、自分たちにとって最良の選択なのかは、別の問題だと思います。

結局のところ、どのような妊娠・出産であれ、これがベストという規定はなく、自分たちが取った選択が正しい方法なのだと思います。まずは自分とパートナーがリラックスして妊娠・出産を受け入れ、何より楽しみに思えるかが大事だと思います。

また、こう言ってしまうと身も蓋もありませんが、正直に言って、赤ちゃんへの投薬を除けば、あとはごく普通の妊娠・出産と何ら変わるところはありません。一般の妊娠・出産だって同じ様にリスクはありますし、母乳があげられないのはこの病気以外でもある話です。帝王切開に至っては、別に今の時代に珍しいことでも何でもなく、職場でも結構な割合でいるものです。むしろ仕事を持つ女性にとっては予定が立てやすいため好都合とも言えます。私は出産の3週間前まで普通に仕事に行っていました。

思うに病気がうんぬんより、この病気を持った殆どのママが、普通にママとして育児に追われているのが現状ではないでしょうか。案ずるより産むが易し、子供は本当に幸せを運んでくれます。皆さんがますます元気に幸せになれることを祈っています。

#### 参加者より

##### ■『定番にしてほしいテーマ』

M(初参加・30代後半・既婚女性)

妊娠・出産は女性にとって一般的なことです。でも病気で体調の調整に時間がかかってしまったり。子どもを持つことに迷って妊活をはじめた年齢が遅くなってしまったり。服薬とのからみ、妊娠の方法やかかれる医療機関。なかなか情報にたどり着けないとあせっていた、一番関心があるテーマでした。

素敵な二人のスピーカーから妊娠・出産の体験をととてもわかりやすくお話いただきました。病院での人工授精以外の方法で妊娠した人がいるということ、医療の変遷、入院中の病院の対応やプライバシーのこと、生まれた子どものケアや喜びのこと、仕事との両立などなど。

今まで知りえなかった本当の情報が得られ、とても短い時間に感じられました。

パートナーの方も参加されていたのもよかったです。このテーマでまたみなさんとお話できたらと思います。

参加させていただき本当にありがとうございました。

##### ■『彼女との将来のために』

GN(初参加/陰性パートナー/30代男性)

泣きながら彼女に病気のことを告白されてから半年、正直なところ、私生活において病気のことなどほとんど気にならなくなってきました。しかしこの先、彼女との将来を考えた時避けては通れない内容が今回参加したプログラム内容でした。将来子供を作り、家族になるための知識や問題を今回のプログラムで教えて頂きました。まだ、具体的に明確な話を彼女としたわけではありませんが、この先彼女と幸せになるために今回のプログラムに参加したことが必ずいきてくると思っています。

今回が初めてのプログラム参加でしたが、経験者の方、現在体験されている方の生の声が聞けて非常に貴重な時間を過ごさせて頂きました。私自身が陰性者で、パートナーとしての参加でしたので、気にされる方がいないかと少し

遠慮気味だったのですが、体験談や意見を忌憚なく発言される参加者の方を見て安心し、また非常にありがたかったです。

#### 第2回「何かにはまってしまった経験談を聞こう」感想文(ぶれいす東京Newsletter No.80 2014年2月号より)

##### スピーカーより

##### ■「病気になったのは『自業自得』?」

タニ(40代/ゲイ/2008年6月告知)

私はアルコール・薬物(処方薬や覚醒剤)依存症当事者です。今回はそれらに「はまってしまった」自身の体験と、依存症回復施設でスタッフとして働いている援助者としての見聞をお話しさせていただきました。

私自身の肌感覚としても「薬物アディクションを持っているゲイには、HIV+が多い」という認識がありました。今回のイベントでも、アディクションに悩んでいる人の様々な声、セックスの現場での薬物使用の実情等を聞き、さらにその意識を強くしました。

アディクションの原因としては、内的な要因(持って生まれた資質。遺伝にも左右されます)に加え、育ってきた環境やトラウマ等の環境要因も大きく関わっていることが判っています。依存症という「病気」になるかどうかは、個人の力では選択できないといっても過言ではないでしょう。

かたや「依存症になるなんて自業自得だ」という声が聞かれるのも事実です。それは「セックスでHIVに感染するなんて自業自得だ」という残酷な言葉とも似ているなあと、私は感じます。

正しい知識が差別や偏見をとり除くことを、私たちはHIVを通して学びました。依存症についても同じことが言えるのではないのでしょうか?そして「困難にきちんと向き合うこと・人と人とが助け合うこと」が、病気はもちろん、生き方への処方箋にもなると、私は信じています。

#### 参加者より

##### ■『依存症による負のスパイラル』

ワタル(30代/ゲイ/感染告知2006年/服薬歴5年/初参加)

今回のアルコールと薬物に関する依存症の方のお話を聞いて、改めて恐ろしい病気だということを感じました。

ヤメたい、ヤメなければという強い気持ちがありながら、借金をしたり刑務所へ行くような行動を取り続けてしまい、本人だけでなく周囲の人々も深く傷つけてしまうものだなということが感じられました。

また、依存対象をやめることが出来れば全てが解決するというのではなく、そこに至るまでの人生を振り返る作業や同じ間違いを繰り返さないために現在も様々な努力をしていらっしゃる、そのためには一人ではなく専門の治療機関や自助グループを活用しながら取り組んでいることがとても印象的でした。

予防や早期発見・治療をする上ではHIVと同じような

活動や努力、周囲の協力が必要になってくるものだとも思いました。私も含めて他の参加者の方々からも何かしらの依存症の傾向があるというお話を聞いて、他人事の特別な病気ではなく誰にも関係する身近なものなのだという認識も強まったような気がします。

今回このようなイベントに参加して、お二人の貴重な過去のご経験に関するお話や、参加者の方々との意見交換を通して多くのことを考えさせられるきっかけとなりました。どうもありがとうございました。

### 第3回「障害者枠で就職しているHIV陽性者の体験談を聞こう」感想文(ぶれいす東京Newsletter No.80 2014年2月号より)スピーカーより

#### ■「転職はゴールではなくスタート～細く、長く働く～」

たけし(初参加/2004年感染告知/服薬歴9年/40歳/男性/ゲイ)

今回、障がい者枠で就職している陽性者の体験談をお話させていただきました。

自分はこの障がい者枠で働くのは実は今回で3社目です。1社目、2社目とも1年もたたず転職をして現在の会社は1年6か月勤めています。前の2社を長く勤められず転職した経験も踏まえながらお話をしました。

私ともう一人の方のお話だけではなく、参加者からの質問コーナーなどでざっくばらんに話ができて、「ハローワークと転職エージェントについて」「会社の人にはどこまで話す!」「面接に行ったら驚いたこと」「お給料や貯金とかはできるの!」など自分も転職活動をしていた時に同じように不安に思った事ばかりで共感できました。

業種・企業・職種によってはこの障がいで就職はまだまだ厳しかったり、就職しても想像していた障がい者雇用のイメージ(条件)とは違う、と思うかもしれません。ただ、数年前よりは企業側もこの障がいに対して前向きに採用を検討しているのも事実です。

私は今回のプログラム参加で、今後も様々なプログラムにも積極的に参加したいと思いました。と同時に、転職はゴールではなくスタートで、この障がいと向き合って仕事を細く長くすることが大事だと改めて思い、皆さんにも伝わればいいな、と思いました。

#### 参加者より

#### ■「大丈夫。タイミングですよ!」

せつこ(50代/2011年4月告知/服用歴2年6か月/初参加)

いつも、最後には「職を得たい。」で終わるカウンセリング。生島さんのお薦めもあり初めて参加させていただきました。息を切らして駆け込んだ部屋、全員知らない方々ばかり、しかも女性は私一人なの…?一番前に席を用意して戴きつつ、お話を聴く前に、何度も後ろを振り返りました(笑)

笑顔で優しく話しを進めてくださったAさん、笑いを誘うように楽しく話しを進めてくださったBさん。お二

人の「就活物語」を聴かせて戴く前から、初めて参加する私は、心の中で、「お二人の成功を聴くこと、それは羨ましく、私自身の大きなストレスになったらどうしよう!」と少しだけネガティブになっていました。病気を告知された時に「なんで私なの!」と思ったのと同じく、就職できないのも然り。

お話を聴き、自分自身の甘え過ぎに気付きました。「100社には履歴書を送付した。」とのこと、「え?…」と一瞬、息を呑みました。私は「お断りメール」が来ると、数日落ち込んでしまう。「すぐに次を探してトライすればいいじゃない!」とポジティブに考えるべき!と心から思いました。

質疑応答で「職を得るには、年齢も関係あるのでは?」との質問に、お二人とも「関係ないと思います。タイミングですよ。」との答えがありました。その日に今後の私の課題が決まりました。「誰と顔を合わせても、みんな私をHIVとは気付かない。年齢を気にせず、ポジティブに障害者枠&健常者枠で(就活)すること。」既に履歴書・職務経歴書用意済み。

「大丈夫。タイミング!」を信じて…。

#### ■「自分だけが辛いじゃない」

SH(初参加/感染告知2011年/服薬歴2年10ヶ月/30代/男)

まず、私自身がこのようなネスト・プログラムの参加自体初めてなこともあり多少の緊張もあったが、障害者枠で就職している2名の体験談をお伺いするにつれて、自分が置かれている現状と同じような状況で働いている方々の就業状況やLife styleにおける(特に体調管理について重きを置いている)考え方などを詳しく聞けて大変共感が持てました。

また私自身も求職中なこともあり、会社の退職理由から就活状況、面談および企業側の対応などを詳しく聞くことができたので大変参考になりました。

ただ、話を伺っている中で、昨今免疫障害者枠での採用も増えてきたと言っても、まだまだ企業側の対応には不慣れな点もあり、ばつが悪い思いをした経験談を伺ったときには、障害をオープンにして働くメリット・デメリットを理解した上で、自分がどうなりたいかを十分考えて障害者枠・一般枠の就活行動に移すことが重要だと痛感しました。

今後、日本企業の中から理解ある企業がもっと増えることを切に願います。会社を退社して、精神的に落ち込んでいた私自身、このような話をお伺いできる機会を与えてくださったことに感謝すると同時に今後に向けて、ちゃんと前を向いて、一歩踏み出してみよう! そう思ったプログラムでした。

#### (4)学習会/ワークショップ/セミナー

HIVと長く付き合いながら、自分らしく生きていくために必要なスキルを身につけるためのワークショップや、専門家からの情報や、社会制度の基礎など、陽性者に役立つ情報を

提供する学習会、企業の人事担当などを招いて行う「就職支援セミナー」などを開催している。

#### (4)ー1 ストレス・マネジメント講座

～ストレスとうまくつきあうためのワーク～

HIV陽性者のためのストレス・マネジメント講座は、今年度、全3期を実施し、第19期から第21期の講座を開催した。平日の夜間開催であり、のべ53名が参加した。

各期は全3回のプログラムからなり、ストレスに関するワークをしながらマネジメントスキルを身につけることをめざした。実施日と各回の参加者数は次のとおりである。

##### 【第19期】

第1回 2013年5月20日(月) 7名  
 第2回 2013年6月17日(月) 5名  
 第3回 2013年7月22日(月) 8名

##### 【第20期】

第1回 2013年9月9日(月) 7名  
 第2回 2012年10月7日(月) 4名  
 第3回 2012年11月18日(月) 5名

##### 【第21期】

第1回 2014年1月27日(月) 5名  
 第2回 2014年2月17日(月) 7名  
 第3回 2014年3月10日(月) 5名

各回の内容は参加者数や事前アンケートによる参加者のニーズによって調整を行うが、基本的には第1回で「ストレス反応」について学習し、第2回では「思考パターン」を知り、第3回に「ストレス対処法(コーピング)」の見直しを行う。ストレスに伴う心身の状態に自覚的になることや、否定的で極端になりやすい思考や認知について学習することで、ストレスに対する自分の構えや傾向を知ることができる。また、より健康的な対処法を考えることで、ストレスに直面したときに、悪循環に陥らないように積極的な対処をすることができる。

参加者のストレス状態や生活状況はさまざまであるが、参加者同士で話し合うことで、自分の状態や傾向について新たな気づきを得ることができる。HIVにまつわる不安や恋愛や性に関する話題も出ることが多く、他の参加者と話し合うことで、安心感が得られたり、新たな対処法に気づいたりするようであった。

今後、参加者のニーズの多様性にあわせながら、有意義なグループワークとなるようにさらに改良しながら取り組んでいきたい。

次年度も継続的に開催する予定なので、多くの方の参加をお待ちしています。

(報告：野坂 祐子)

#### (4)ー2 アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC

相手も自分も大切に自己表現＝アサーティブなコミュニケーションを身につける、2回構成のワークショップ形式の講座である。ストレス・マネジメント講座を受講してから参加すると、より効果的なプログラムとなっている。

2013年1月に新プログラムとして始まり、2013年度は、7月に第2期、1月に第3期が行われた。講師は、パフスクールで「再出発のための自分史」を主宰し、NPO法人アサーティブジャパン認定講師である、沢部ひとみさんである。2日間連続の参加が条件ということもあり、今年度から、遠方からも参加しやすいように、土日連続開催となった。HIV陽性者を対象にしているため、関連した内容を盛り込んでいただいている。ロールプレイングでは、お酒の場に誘われたときに、どのように人間関係を壊さないように、断るかという課題が、一日目にはでてくる。そして二日目には、「セイファーセックス、コンドーム使用を望まない相手に、使いたいという意思を双方向コミュニケーションをつかって伝える」という課題だ。参加者はとても熱心に参加して、第2期、第3期とも、全員が2日間のコースを修了した。感想文(web NEST「レポート」に掲載)からも満足度の高さがうかがえる。参加者からは、フォローアップ・プログラムの開催を望む声もあり、今後の検討課題となっている。

##### 【第2期】

第1回 2013年7月6日(土)13名  
 第2回 2013年7月7日(日)13名

**第3期 アサーティブ・コミュニケーション 自己表現のABC**

あの時ちゃんと断っていたら……思い切った  
 頼っていたら……と後悔することはありませんか？  
 自分が望まなかったら断る。相手に、してほしかったら頼む。この2つはコミュニケーションの基本です。なのに、  
 これができない人はけっこう多い。どうしたら、相手に嫌な思い  
 をさせずに、自分の意思を伝えることができるのでしょうか？  
 「遠慮は他人は愛せられない」と言われますが、現在の自分が変われば、  
 未来はかなり変わってきます。相手も自分も大切に自己表現＝アサーティブなコミュニケーションを  
 身につけて、より幸せな未来を切りひらきましょう。ワークショップ形式の楽しい講座です。

**参加無料!**

**1日目**  
 2014年1月25日(土)  
 13:00～16:00  
 自分のコミュニケーションの書きかき、アサーティブなコミュニケーションの心構えを学びます。

**2日目**  
 2014年1月26日(日)  
 13:00～16:00  
 アサーティブの心構えにもとづき、自分の意思をどう伝えるのか、伝え方のスキルを学びます。

講師：沢部ひとみさん  
 パフスクールで「再出発のための自分史」主宰。  
 NPO法人アサーティブジャパン認定講師。

- 定員15名です。
- HIV陽性者の方のみ参加可能です。
- 参加費は無料です。手ぶらでお越しください。
- 会場は、ふれいず東京事務所にてご案内いたします。
- 申し込みが必要です。原則として、2回とも参加できる方に限ります。
- ネスト・プログラムに初めて参加される場合には、利用上のルールに同意して、利用登録をすることが条件となります。

お問い合わせ・申し込み

webNEST Tokyo  
 〒169-0075 東京都練馬区高島4-11-5 三幸ハイム403  
 Tel: 03-3361-8964 (月～土 12:00～19:00)  
 E-mail: nest@ptokyo.com  
 web NEST (HIV陽性者のためのWebサイト)  
 http://web-nest.ptokyo.com/

そのほかに、ふれいず東京には、HIV陽性者や周囲の人のための電話や対面による相談サービスもあります。  
 ふれいず東京 HIV陽性者や周囲の人のための電話相談  
 ボディアブライズ  
 ☎0120-02-8341 (月～土 13:00～19:00)

## 【第2期】

第1回 2014年1月25日(土)10名

第2回 2014年1月26日(日)10名

### (4)－3 シリーズ“専門家と話そう”

2013年度のシリーズ“専門家と話そう”は、ぶれいす東京に相談が多く寄せられる生命保険について、お二人の講師をゲストに迎えて開催した。

最近、発売されている生命保険のなかには、いくつかの条件さえクリアすれば、疾病をもっているかどうかは問わない商品も増えてきている。しかし、実際にどのようなことが課題になるのかを解説していただいた。また、同性のパートナー同士の場合、保険金受け取りの際の名義変更について、法律上と企業内の犯罪リスク予防の観点からの内規がずれていることがあるようだ。

後半の質問コーナーでも、たくさんの質問に対して、ひとつひとつ丁寧に応えていただき、充実した学習会となった。

#### 第12回「生命保険のプロと話そうIII」

・日時 2013年8月22日(木)

・ゲスト 赤石 和秋さん

(メットライフアリコ株式会社コンサルタント)

江川 守利さん(ファイナンシャルアライアンス)

・参加者 18名

### (4)－4 ベーシック講座「社会福祉制度」

2011年1月からスタートしたプログラム。今年で開催は丸3年となった。「基本のキ」をつかんでより良い制度利用ができるよう、わかりやすく解説している。「講義形式」というよりは、参加者が疑問に感じているところや興味も持っているところなどを中心に話を進行していく。今年は計4回の開催となった。来年度は、新陽性者PGMの医療情報セッションの出前講座である「HIVってどんな病気？」と「社会福祉制度」の2本立てとなる予定である。

・日時 4月24日(水)、7月24日(水)、11月30日(土)、2月22日(土)

・参加者 のべ10名

・担当 神原奈緒美

### (4)－5 就職支援セミナー

企業の人事担当者などに来ていただき、企業はどのような目線で応募者を見ているのか、求人情報、社内の情報管理や配慮はどのようなかなどを話していただき、陽性者の就職・転職活動に役立ててもらおうセミナーである。2013年度は7月25日(木)に第2回、1月22日(水)に第3回と、2回開催した。参加者はどちらも24名であった。それぞれ異なる2企業の人事担当者にきていただき、お話を伺った。後半では、活発な質疑応答が行われた。

## (5)交流会、その他

### (5)－1 年末パーティー

12月22日(日)に開催された年末パーティーには、参加者、ネスト・ボランティア、スタッフを含め、45名が参加した。合同研修からネスト・プログラムのファシリテーター研修を経てボランティアとなったスタッフには、今年も、当日の買い出しやセッティング、後片付けまで積極的に関わってもらった。ボランティア・スタッフの発案で、生島がトナカイのかぶりものをして参加したが、場がより和やかになり、人であふれんばかりの会場のなかでもすぐわかるので、好評であった。しばらくぶれいす東京から遠ざかっていた方から最近アクセスされた方まで、実に幅広い参加者の方々が集い、大変盛り上がった。昨年より1時間時間を拡大して開催したが、あつという間のひとときだった。




年末パーティー～サンタさんではなくトナカイ現る？

## (B)人材育成、研修

ネスト部門の人材育成・研修は、2012年度に初めて行った。2011年1月より利用登録制がスタートし、利用者の安全性が大幅に向上した。これまでの利用登録者は574人(2014年3月末現在)となり、ネスト・プログラムの数や参加者が増えてきている。そこで、多目的室の入場時のチェックなど、ゲートキーパー的な役割を担う人材(セクレタリー)開発が急務となった。また、新陽性者PGMのファシリテーター、web NESTのアンサー執筆者など、HIV陽性者を含む多様な人材がプログラム運営のなかで必要である。

現在、昨年の研修に参加したボランティアがセクレタリーとして入るようになり、プログラム運営がよりスムーズにいくようになっている。また、定期的にプログラムに参加していた陽性者が、昨年の研修に参加し、プログラムのファシリ

<b>2014年</b> <b>1月22日(水)</b> <b>開催</b> 19:00-21:30 (開場18:30)	<b>第3回HIV陽性者のための就職支援セミナー</b> 企業の人事担当者に来ていただき、企業はどのような目線で応募者を見ているのかをお話しいただけます。ぜひ、この機会をあなたの就職活動に役立ててください。これから転職をお考えの方にも参考になると思います。陽性であることを、必ずしも伝える義務はありませんが、伝えたい場合、どうなのかをこのイベントのなかで知ることができます。
<b>参加者募集</b> 申込 2014年 締切 1月17日(金)	
<b>対象</b> 就職、転職を検討中のHIV陽性者	
<b>会場</b> 新宿区内の予定 (お申し込みの方に直接お知らせいたします)	
<b>定員</b> 先着40名(定員になり次第、受付を終了します)	
<b>参加方法</b> 無料ですが、利用登録が必要です	
<b>参加企業</b> 2～3社を予定(詳しくはWebへ)	
<b>申し込み・問い合わせ先</b> ぶれいす東京 web NEST <a href="http://web-nest.ptokyo.com/">http://web-nest.ptokyo.com/</a> 電話：03-3361-6964(月～土 12～19時) 担当：佐藤、加藤 E-mail: nest@ptokyo.com	

テーターとして活躍している。

今年度も新人ボランティア合同研修修了者を対象に、ネスト部門のボランティア募集を行い、11月17日(日)に、ネスト部門を希望した10名(男性:7、女性:3)と、新陽性者PGMのファシリテーター1名、ピア・プログラムの担当スタッフ2名が参加して、「ネスト・プログラム ファシリテーター研修」を行った。プログラムでは、ファシリテーションのスキルに関するもの、自己の参加動機を振り返るような参加型のワークショップを行った。

その後、セクレタリーや新陽性者PGMファシリテーター候補者に、個別、またはグループで、オリエンテーションを行っている。

### (C)「web NEST」 <http://web-nest.ptokyo.com/>

—HIV陽性者とそのパートナー、家族、ともだちのためのサイト—

web NESTの主なコンテンツは、「つれづれ日記」、「よくある質問集」、「あれこれリンク集」、「HIV関連ワード」、「運営委員のつぶやき」の5つである。また、これらのメイン・コンテンツのほかに、ネスト・プログラムの案内や、プログラム参加者の感想文を数多く掲載しているため、こちらもぜひご覧いただきたい。携帯サイト「mobile NEST」では、主にネスト・プログラムの案内を掲載している。ネスト・ニューズレターの携帯メール版でも、mobile NESTの情報を参照してもらうことで、携帯メール版には掲載しきれない詳しいプログラム内容などをお知らせできるようになっている。

2014年3月末現在、運営委員は、陽性者スタッフ2名、ぶれいす東京スタッフ2名の計4名である。2013年度の運営委員会の開催は、6回、のべ23名であった。

「つれづれ日記」は、「よくある質問集」などで疑問や不安に答えるだけでなく、HIV陽性者の日常を伝えることも大切なのではないかということからはじまった企画である。2014年3月末現在、ライターは7名(女性1名:男性6名)である。1年間の書き込みは103であった。つれづれ日記は、女性・男性/異性愛者・同性愛者/関東・地方・海外在住/告知年1992-2011などなど、さまざまなプロフィールの方にライターをお願いして、多様性が伝わるようにしている。つづっている内容も、仕事や家族のこと、友人やご近所とのつきあい、社会情勢についてなど、多岐にわたっている。なかには10年以上書き続けてくれている方もいる。ボランティアで参加していただいているライターのみならず、この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

「よくある質問集」は、2014年3月末現在、次の7カテゴリーの47の質問に対して、578件のアンサーが掲載されている。「告知直後によくある質問」と、「人間関係や恋愛・セックスについての質問」に、それぞれ追加アンサーを1件掲載した。また、女性陽性者からよくある質問「Q1:妊娠中の検査でHIV+と言われました。おなかの子どもはど

うなってしまうのでしょうか?」、「Q2:婦人科検診や妊娠などについて、医療機関での対応に不安を持っています。他の女性陽性者の経験を教えてください。」の相談員のアンサーを更新した。今後も随時追加アンサーを掲載していく予定である。

### 告知直後によくある質問

質問数:7 アンサー数:109

(追加アンサー Q6:発症してはじめてHIV感染を知りました。これからどうなってしまうのでしょうか。とても不安なのですが…。 1件)

### 人間関係や恋愛・セックスについての質問

質問数:8 アンサー数:132

(追加アンサー Q5:親に打ち明けようか迷っています。皆さんはどうされたのでしょうか。 1件)

### 仕事や日常生活についての質問

質問数:12 アンサー数:159

### 医療や福祉制度を利用する上での質問

質問数:5 アンサー数:50

### 女性陽性者からよくある質問

質問数:2 アンサー数:11

### パートナー・家族からの質問

質問数:3 アンサー数:31

### 過去の質問

質問数:10 アンサー数:86

「HIV関連ワード」は、告知もないHIV陽性者の方などが「よくある質問集」のアンサーを読んで、普段なじみのない専門用語にぶつかったとき、すぐに参照できるようなものがあったらいいねということから始まった。現在は、質問集にでてくる言葉に限らず、広くHIV陽性者が目にすることの多い言葉も加えるようにしている。HIV関連ワード内で用語検索ができるようになっており、調べたい文字だけでなく、頭文字や、医療/福祉/セックス・セクシュアリティ/コミュニティのカテゴリー別に検索ができるようになっているので、ぜひご利用いただきたい。2014年3月末現在、合計63(抗HIV薬一覧を含む)の用語が掲載されている。

あれこれリンク集は、2014年3月末現在、14のカテゴリーに、合計248サイト(医療機関と冊子・資料集のPDF版を含む)が掲載されている。今年度は、「メンタル・ヘルス」というカテゴリーを新設して、HIV関連情報サイトにあったサイトをここに移動した。今後さらにいくつかのサイトを掲載する予定である。

掲載サイト数は、「HIV陽性者のサイト」、「手記集・日記集」、「HIV陽性者などの団体・ネットワーク」、「支援団体」、「福祉・法制度」、「冊子・資料集」にそれぞれ1件、「拠点病院/クリニック」と「HIV関連情報サイト」にそれぞれ2件、計10件増えている。詳細は以下の通りである。

HIV陽性者のサイト(56)  
HIV陽性者のパートナー・家族・友だちのサイト(4)  
HIV陽性者などの手記集・日記集(10)  
HIV陽性者などの団体・ネットワーク(10)  
支援団体(NGO/NPO)など(12)  
コミュニティセンターなど(9)  
拠点病院／クリニック(87)  
医療に関する情報(7)  
セクシュアル・ヘルスについて(9)  
福祉・法制度情報(7)  
HIV関連情報サイト(11)  
冊子・資料集(PDF版)(23)  
会員制サイト(SNSなど)(2)  
メンタル・ヘルス(1)

リンク集では、新規のリンク掲載のほかに、サイト情報の更新やリンク切れのチェックなど、メンテナンスが欠かせないので、リンク担当者は日々、アンテナをはって情報を収集している。

#### IV 最後に

ネスト・プログラムでは、ここ数年、ストレス・マネジメント講座や、アサーティブ・コミュニケーション入門など、メンタル・ヘルスに貢献するプログラムの充実をはかっている。また、ミドル・ミーティングの下の世代であるU40(10～30代男性)、新陽性者PGMの参加者たちのための同窓会の立ち上げなど、プログラムが充実してきた。

ぶれいす東京は、2003年よりボランティア希望者のための3日間に及ぶ合同研修を開始した。そこには、HIV陽性者や周囲の人たちも含まれている。そうした方々のなかから、HIV陽性者、周囲の人のためのネスト・プログラムに参加を希望する人たちがでてきた。一方で、グループ・プログラムにおける受付業務、ピア・ファシリテーターの役割を担う人材育成が急務になり、2012年度からネスト・プログラムの研修を開始した。これまでは、相談員と新陽性者PGMのコーディネーターが個別に声かけをして、ピア・ファシリテーターやスタッフ・ファシリテーターをリクルートしてきたが、この研修を立ち上げることで人材育成のステップが整理されることになった。

またweb NEST上では、プログラムに参加したHIV陽性者、パートナーの感想文を掲載していて、東京に来られない人たちも、web上で見ることができるようになっている。ネスト・プログラムのコーディネーターが感想文の執筆依頼、受け取りなどに積極的に関わるようになったことで、掲載数も多くなった。

2014年2月には、これまで運用してきた「ネスト・プログラムのご案内」と「グラウンドルール」を改定し、口頭で伝えていた注意点や補足情報を、新たに明文化した。また、受

付業務を行うセクレタリーやピア・ファシリテーターなど、ネスト・スタッフの役割を明記した。個々のミーティングで話されている話題は、非常に貴重な情報であるにもかかわらず、今まで記録してこなかった。今回の改定では、個人情報を除いた形でメモを作成することを書き加えた。ぶれいす東京が優先して考えていることに「初参加することを不安に思う人が、安心して参加できる環境であること」がある。グラウンドルールの冒頭にそのことを明記した。

#### 謝辞

今年度も多くの個人のみなさまと団体からご寄付をお寄せいただきました。社会情勢が厳しくなっているなかでご支援いただいたことを深く感謝いたします。助成していただいた東京都福祉保健財団、ご寄付をお寄せいただいたヴィーブヘルスケア株式会社、MSD株式会社、オフィス Two I、中外製薬株式会社、ヤンセン ファーマ株式会社(敬称略、五十音順)、そして多くの個人のみなさまに改めて御礼申し上げます。

「サムソン」というゲイ雑誌に、支援者の語りが毎月掲載されております。また、「Badi」というゲイ雑誌でも、2014年2月号(2013年12月発売)から連載がはじまり、ぶれいす東京のスタッフ3名が交代で執筆しています。その執筆者の原稿料を活動収益金とさせていただきます。

(文責：生島 嗣、佐藤 郁夫、加藤 力也、原田 玲子)

## 部門報告 (バディ)

### 1. スタッフ研修

バディ・スタッフとして活動するには、基礎研修を受けた上で部門の研修を修了することを条件としている。基礎研修は、HIV/AIDSに関する知識を身につけるとともに、自己のHIV/AIDSのイメージを認識すること、そしてバディとしての関わり方をどのようにもつか、自分自身でイメージしてもらうことを目的としている。基礎研修は、年に1度の各部門合同での「合同研修」にて、部門研修は「バディ・ワークショップ」にて行っている。

#### (1) 基礎トレーニング

##### ● 合同研修

今年度は2013年9月8日、15日、22日の3日間で行われた。この研修は各部門合同であり、研修項目も共通したものとなっているが、バディ部門のみならず、ぶれいす東京の全体の活動とHIV感染症の関連領域も学び、幅広い視点と知識を得てもらうことを目的としている。(詳細は5ページを参照)。

##### (実 績)

2013年度の研修終了時点で活動希望者は7名となった。

#### (2) 一日ワークショップ (8時間)

バディとして活動を始めようとする自分自身を見つめ直すこと、またクライアントがどのような状態にあるのか理解を深め、その上でバディの役割とは何か、クライアントとの関係性について、自分がバディとして何ができるか、等を考えてもらうことがこのワークショップの目的となっている。また、ワークショップの中では、実際の利用者に協力いただき、利用者の生活についてお話していただくなどしている。

##### (内 容)

- ・アイスブレイキング
- ・自分の最初の喪失について
- ・自分がバディだったら(仮想体験)
- ・HIV陽性者と語る
- ・喪失を体験するワークショップ
- ・分かち合いの時

##### (実 績)

2013年11月3日(日)に開催。4名が参加、修了してバディの登録を行なった。

### 2. スタッフ・ミーティング

##### ● バディ活動スタッフのためのミーティング

活動中のスタッフを対象として、バディ・ミーティングを行っている。午前ミーティングは、奇数月/第1土曜日

/11:00～、偶数月/第1木曜日/11:00～に開催、夜間ミーティングは第3木曜日の18:30～で開催した。なお木曜日の午前ミーティングについては参加者が少ないため、参加がある場合にのみの開催とした。

参加者は2～8名程度で、それぞれが担当しているクライアントとの関わりについて、担当者同士やコーディネーターと相談できたり、お互いにアドバイスしあえる場となっている。また、必要に応じて、個別にクライアントに関わる個別ミーティングやスーパーバイズも実施している。

##### (実 績)

バディ・ミーティング 2013年度は19回(中止4回)開催し、のべ76名が参加  
個別ミーティング 2013年度は17回実施。

### 3. 登録バディのフォローアップ・トレーニング

##### ● フォローアップ研修

基礎トレーニングを終了したスタッフを対象とした研修となっており、待機中のバディに陽性者との関わりについてイメージする機会や、関係の深い問題について知識を得て、考える機会を提供している。

また、既にバディ活動を行っているスタッフが、自分とクライアントとの関係について、バディの役割について、客観的にとらえる機会になることを目的している。

### 4. スタッフの構成 (2014年3月末現在)

#### (1) 性別

男 性	35名
女 性	27名
合 計	62名

#### (2) 年齢

20歳代	6名
30歳代	14名
40歳代	27名
50歳代	12名
60歳代	1名
70歳代	2名

### 5. 2012年度バディ活動実績

#### (1) 派遣依頼

・前年度より活動を継続	18名
・新規依頼	2名
・再依頼	1名
合 計	21名
・バディ派遣終了	0名

※2014年3月末現在の派遣状況

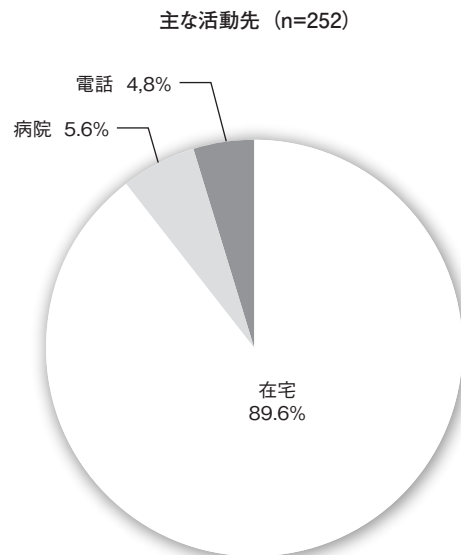
・活動休止中 .....	4名
・派遣継続中 .....	17名
合 計	21名

(2) 活動バディ・スタッフ

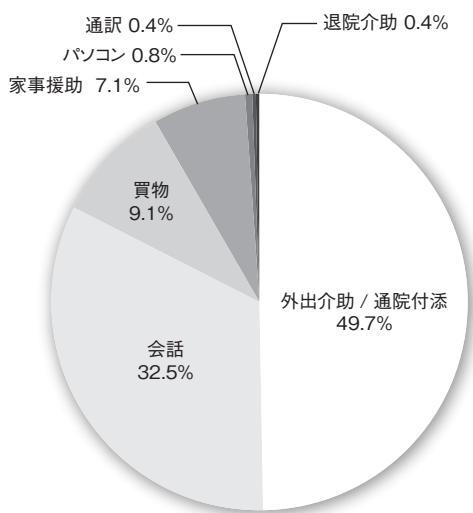
派遣依頼17名(休止中の4名を除く)に対し37名のスタッフを派遣した。(利用者1名に対する実人数でカウント)

(3) 活動内容

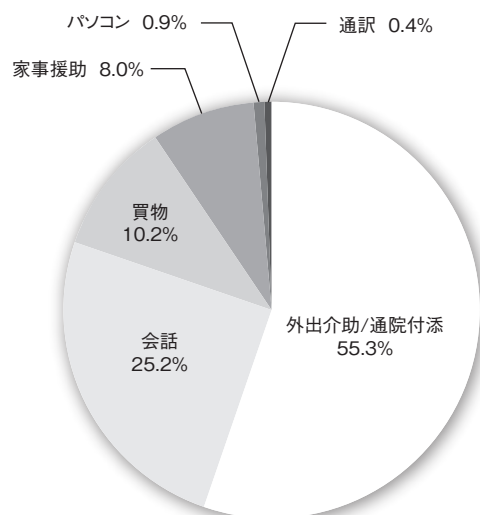
今年度のバディ派遣件数は、スタッフの報告をまとめたところ252件であった。そのうち、在宅訪問は226件(89.6%)、病院への訪問は14件(5.6%)、電話によるコミュニケーション(訪問連絡等の電話は件数に含まず)は12件(4.8%)であり、今年度の総活動時間は約707時間となった。



全体の内容別活動のまとめ (n=252)



在宅での活動内容 (n=226)



訪問したクライアント数は、昨年度より2名減少し、新規派遣は2名であった。新規の派遣内容は、外出介助、家事援助での利用で、両方とも継続となった。今年度は活動が終了となるケースはなかった。

(4) 訪問先とサービス内容

●在宅訪問

在宅訪問での主な活動内容について、合計で226件の活動があり、内容別では、外出介助/通院付添が一番多く125件(55.3%)であった。次いで会話が57件(25.2%)、買物が23件(10.2%)、家事援助が19件(8.0%)、パソコンの設定が2件(0.9%)、通訳が1件(0.4%)となった。ただし、主な活動としてまとめているため、外出介助/通院付添の活動でも会話がある場合がほとんどであった。外出介助/通院付添の内容としては、車椅子の介助だけでなく、視覚に障害のある方の歩行介助、杖歩行の方の外出の介助/付添いがあった。

●入院先訪問

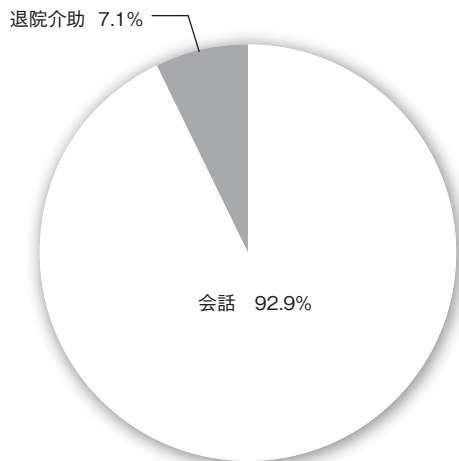
入院先訪問は、昨年度より更に減少し、合計で13件の活動となった。活動内容は、会話が13件(92.9%)、退院介助が1件(7.1%)、となった。退院介助は、視覚に障害がある方の退院時の介助であった。

6. まとめ

●派遣件数は横ばい

派遣件数は、昨年度より10件程の減少はあったが大きな変化はみられなかった。新規派遣は、昨年に続き数は少なく、継続も派遣回数が月に1回程度の方が多くなってき

病院での活動内容 (n=14)

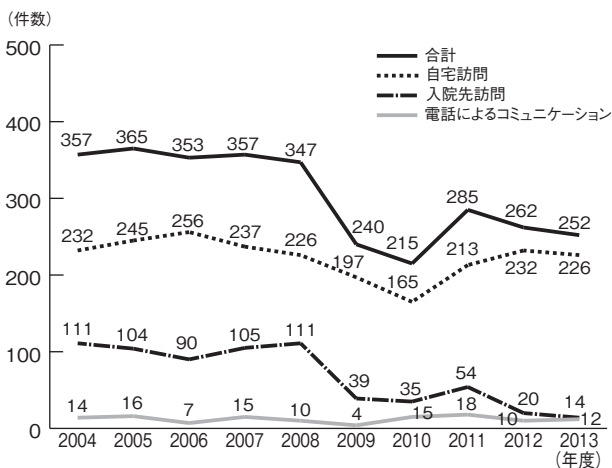


ている。全体の総活動時間は約700時間で、個々の活動時間としては、2時間～6時間まで、かなりばらつきがみられた。これは車椅子や杖歩行、視覚など、身体に障害を持つ方の利用の通院や外出時の介助など、1回の活動時間が長いものから、会話のみの活動で短時間のもので、利用者に応じた多様な活動になってきているためだと考えられる。

長時間の活動の多くは、月に1回程度ではあるが、4～7時間程度となっており、バディの負担も大きくなっている。入院先での活動は減少しており、今年度の利用は、元々は在宅の方が他の疾患等で入院した場合の利用であった。在宅の利用者が急な入院になった場合、入院に必要な荷物を取りに行ける人、依頼できる人が少ないことがみられ、またそうした場合にヘルパー等の福祉サービスは利用できないため、バディに活動が依頼されていた。

なお、今年度は活動が終了になるケースがなく、新規の2件も継続となった。

年次活動件数の推移



### ●クライアントの傾向

クライアントの傾向は、ここ数年の傾向が続いており、身体に何らかの障害をもちつつ在宅で生活をしている方で、単身の中高年の男性が占める割合が今年度も非常に高くなっている。ちなみに、継続派遣の17名中14名が男性の単身世帯、また身体や精神に何らかの障がいのある方は14名で、半身麻痺等による車椅子使用や杖歩行などの歩行困難が12名、視覚障害が2名となっている。

### ●クライアントとの関わり

クライアントとの関わりは、長期的な派遣が多く、7年以上の関わりを持っているケースは9名となった。長期派遣になる背景としては、医療の発達により免疫が安定した状態を維持できるようになったことが大きい。しかし、バディ利用者の多くは、発症や加齢による疾病等で身体に障害を持ちつつ、生活しており、そうした障害を含めた支援が求められてきている。

身体に何らかの障害を持つ方は、福祉サービス等の社会サービスを利用したり、家族が支援しているが、そうした既存サービスの中では得られにくい、セクシュアリティも含めた話し相手、行政のサービスが不足する所でのバディの利用、通院や外出での介助、付添い等での利用が増えている。

また、限られた人間関係の中で生活しているクライアントにとって、医療従事者や福祉サービスの提供者以外の定期的な訪問による会話や、同行しての外出は、利用者が社会とのつながりを確認できる機会にもなっているようである。最近では、定期的なネストプログラムの参加を、バディを利用して継続している方も増えつつある。

家族等と同居しているケースは少なくなっているが、支援している家族の負担は大きく、相談できる場所は少ないため、バディが継続して関わるのがクライアント本人だけでなく、家族やパートナーの支援になるケースもある。

クライアントとの関わり期間

関わった期間	件数	うち継続
7年以上	9	9
5年以上7年未満	2	2
1年以上5年未満	8	8
1年未満	2	2
合計	21	21

### ●外部サービスへの作用や連携

クライアントの中には、医療や福祉のサービス提供者との関係性が安定しないケースもあり、そこにバディが関わることでバランスがとれるようになることもある。バディでの日常的な支援は限界があるが、今後もこうした困難さを持つケースについては、医療機関や在宅サービス機関と

連携を取り、クライアントの社会参加の支援、生活の質の向上につながる活動ができればと考える。

## 7. 今後の活動にむけて

### ●活動の継続性と体制づくり

クライアントの関わりでも触れているが、身体に何らかの障害をもちつつ、在宅で生活をするクライアントの増加と、関係性の長期化が傾向としてみられる。

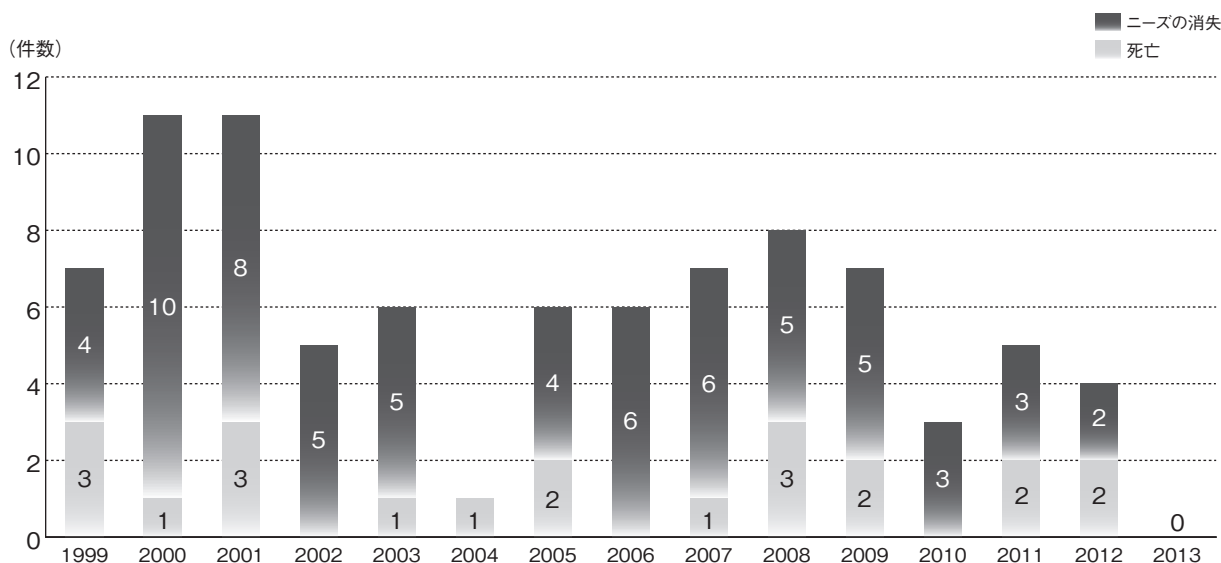
こうした介助が必要なケースとの関わりでは、バディ・スタッフの介助の知識や技術などの準備をするだけでなく、クライアントと長期的な関係を視野にいれた関係づくりを考える必要がある。中には、徐々に身体の機能が低下するケースもあり、より介護が必要になってきているケースもある。そうしたクライアントの状態の変化によって、活動時間が長くなる依頼が増えているため、活動するバディにとっても負担を軽減できるような体制づくり、環境づくりを、クライアントとも相談しながら、時には福祉サービスの関係者とも連携し調整していきたいと考える。

また、新規依頼が少ない状況が続いているが、サービスの問い合わせは、カウンセラーや病院の看護師などから時々あり、認知度は徐々に上がっていると思われるが、スタッフの数が潤沢な状態ではなく、曜日や時間によっては利用者のニーズに対応できない場合もある。特に、平日での活動はかなり難しい状況である。病院での活動など、様々なニーズに対応できるよう、継続的にスタッフの確保にも励んでいきたい。

最後に、日頃から活動を続けていただいているバディ・スタッフの皆様、今年度も活動にご協力いただき、本当にありがとうございました。バディ活動は、協力いただけるバディ・スタッフあつての活動です。これからも、みなさんの力を借りながら、クライアントの生活の向上につながるバディ活動の運営に努めていきたいと思ひます。今後とも活動にご協力いただけますよう、よろしくお願ひいたします。

(文責 バディ・コーディネーター 牧原/九岡)

活動の終了理由



## 部門報告 (HIV 陽性者と周囲の人への相談サービス)

### (1) ぶれいす東京 相談サービス報告

ぶれいす東京では、HIV 陽性者とその周囲の人へ、電話や対面、E-mail/Fax などによる相談サービスを提供している。電話・対面による相談は、2009年4月以降は厚生労働省の委託事業として、HIV 陽性者とそのパートナー、家族のための専用の相談電話「ポジティブライン」0120-02-8341(月～土:13:00～19:00)と、プライバシーに配慮した個室で行う「対面相談サービス」(月～土:12:00～19:00)として提供している。なお相談は原則匿名で行っている。

対応は、HIV に関する電話相談や直接的なケアを担当してきた相談員(社会福祉士/医師)、4人が担当した。

#### ■相談/連絡期間

2013年4月1日～2014年3月31日

#### ■相談/連絡件数

電話による相談	1386件
対面による相談	655件
メール/fax/書簡による相談	1488件
合計	3529件

#### ■相談者の背景

##### ▼電話相談、対面相談(メール/fax/書簡は除く)

のべ合計2041件(男:1872、女:169)

HIV 陽性者	1818件(1766:52)
パートナー/配偶者	74件(42:32)
家族	59件(6:53)
専門家	41件(19:22)
その他/不明	16件(13:3)
確認検査待ち/判定保留	33件(26:7)

##### 「家族」の内訳(59)

母親(34)、きょうだい(22)、おじ(2)、親戚(1)

##### 「専門家」の内訳(41)

医療機関(13)、就労関連(12)、福祉関連(7)、地域団体(6)、保健所(1)、その他(2)

##### 「その他/不明」の内訳(16)

友人/知人(12)、性的関係のあった人(1)、判定保留中の人のパートナー(1)、不明(1)、感染不安(1)<当初は陽性と申告、のちに感染不安が判明>

#### ■相談者の年代

20代	127件
30代	722件
40代	586件
50代	267件
60代	78件
70代以上	2件
不明	259件

#### ■新規相談のまとめ(n=311)

属性		(男:244 女:67)
HIV 陽性者	189	(181: 8)
パートナー/配偶者	39	( 21: 18)
家族	25	( 4: 21)
専門家	25	( 12: 13)
その他/不明	13	( 10: 3)
確認検査待ち/判定保留	20	( 16: 4)

当該年度における新規相談は311件で、電話/対面相談の1割強が新規の相談となっていた。属性としては、HIV 陽性者が多く、次いでパートナー/配偶者、家族、専門家となった。専門家としては、医療ソーシャルワーカー、ケアマネジャー、企業人事担当者、行政の担当者などからの相談があった。その他は、友人/知人、判定保留中の方のパートナー等となっていた。今年度も確認検査待ち/判定保留中の方からの相談があった。検査を受けた場所は、医療機関、保健所など様々であったが、判定保留通知時の情報提供不足から、確認検査の結果を待つ間にネットで色々と調べるうちに混乱しパニックなる方もみられた。

居住地/発信地	
関東	231
近畿	23
東海	14
九州/沖縄	13
中国/四国	11
北海道/東北	11
甲信越/北陸	8

相談者の居住地/発信地は、関東地方が多く全体の7割強を占めているが、その他の地域からも相談がよせられるようになっていた。

相談をするきっかけとなった情報源としては、インターネットや冊子などの情報をもとに連絡を取った方が約半分を占めているが、以前に比べ医療や行政などの紹介で連絡をとってくる方も増えてきている。そうした方は、HIV 以外の問題、就労や薬物、精神的な問題を併せて持っていることが多く、支援の輪を広げる目的で紹介されることも多いように

感じられた。

情報提供者	
情報・ネットワーク(ネット・冊子等)	169
医療や行政などの専門家	53
人的ネットワーク(他陽性者・家族等)	43
地域のネットワーク(電話相談・団体)	16
その他	10
不明	20

HIV陽性者において、どのような経緯でHIV感染を知ったか、どこで検査を受けたかをまとめた。ただし、相談の中で聞き取れた範囲内でのデータであり、新規連絡の半数程度でn=98となっている。

検査を受けた機関(n=98)	
病院(外来)	49
保健所/検査所	26
病院(入院)	15
自主検査キット	2
献血	2
イベント検査	1
その他	1
不明	2

検査のきっかけ(n=98)	
自発的(症状なし)	21
HIV関連の症状(医師の勧め)	20
その他の症状(医師の勧め)	20
自発的(症状あり)	18
術前検査	8
性的接触があった人からの通知	2
献血	2
健康診断のオプション	1
妊産婦検診	1
配偶者/パートナーからの通知	1
その他	4

HIV検査が導入された状況は、医療機関の外来：49件が多く、次いで保健所/検査所：26件、病院に入院中が15件であった。他に自主検査キット2件、献血2件、検査イベント1件などであった。また、自発的な検査は98件中の39件で、うち症状があったものが18件をしめていた。医師などからの勧めというものが40件で、HIV関連の症状があったものがその半数を占めていた。他に医療機関にて実施される、内視鏡や術前のルーティン検査により陽性と判明したというものが8件あった。加えて、献血：2件、健康診断のオプションの検査：1件、妊娠時の検診：1件があった。さらに、配偶者/パートナー/性的関係者が陽性とわかったことで、受検を勧められてという相談が3件、その他が4件あった。

## ■相談全体の内容項目

HIV陽性者からの相談について、相談記録をもとに、内容を1～9の項目に分類し、詳細をまとめた。複数の項目に該当する相談内容であった場合は、それぞれの項目に含めて集計している。

周囲の人の相談、専門家からの相談や連携については、それぞれの属性で内容をまとめた。

1	検査や告知に関する相談	52
2	告知直後の漠然とした不安	104
3	対人関係に関する相談	331
4-1	生活に関する相談	677
4-2	制度に関する相談	181
5	心理や精神に関する相談	559
6	病気や病態の変化や服薬	281
7	医療体制や受診に関する相談	178
8	医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス	53
9	連絡等のコミュニケーション	844
▼	周囲の人からの相談	149
▼	専門家(外部)からの相談や連携	41

### 1 検査や告知に関する相談：52

1 検査や告知に関する相談	
判定保留時の不安や対応	33
告知の状況	9
検査の信憑性	5
検査機関の対応	4
その他	1

HIV検査についての相談では、医療機関やHIV検査の実施機関などで、スクリーニング検査で陽性を伝えられた相談者が、その後、確認検査の結果を伝えられるまでの間によせられた、「判定保留時の不安や対応：33件」が最も多くよせられていた。この数字からも、確認結果を待つまでの1～2週間の時期への心理的なケアの重要性がわかる。また、医療機関の対応で検査への同意が十分でない事例や、保健所・検査所での医師の告知時の対応に疑問の声もよせられていた。また、相談者のなかには、HIV陽性の最初の告知の場面で聞いた情報が、その後、医療機関へのアクセスを阻害したり、健康保険の利用、障害手帳の申請などにネガティブな影響を与えていた事例が複数みられた。「HIV陽性」という結果を通知する際には、その後に役立つ情報集(例：告知直後の人向けの冊子「たんぽぽ」)の配布、説明などによりこうしたリスクは低減できると思われる。

## 2 告知直後の漠然とした不安：104

2 告知直後の漠然とした不安	
身体状況に関する不安	34
漠然とした不安や混乱	32
生活のイメージ	19
他陽性者との交流	8
プライバシー不安	7
その他	4

告知直後では、身体状況に関する不安、漠然とした不安や混乱に関する相談が多くみられた。身体状況の不安について、発症にて判明した方や、何らかの症状があり検査し判明した方で、より強い不安や自信の喪失が見受けられた。漠然とした不安や混乱において、ネット等で様々な情報を得る方が多いのだが、ネット上の情報を見すぎることによって逆に不安になる方がいることが推測される。混乱している状況では、情報の判断ができなくなるため、発症など様々なことが自分に起こるのではないかと最悪の状況を想像してしまう。ネットの情報の見方、制限を勧めつつ、適切な情報提供を行うように心がけている。

また、もともとHIV感染症に対してネガティブなイメージを持っている方も多く、医療従事者などの専門家から情報提供を受けてもそれが信じられない、というケースもあった。

## 3 対人関係に関する相談：331

3 対人関係に関する相談	
相手との関係性	158
HIVの通知	60
トラブル	46
性に関する相談 (sexやセクシュアリティ、セイファーセックス)	22
恋愛、結婚、離婚など	13
プライバシー	8
検査(受検勧奨等)	1
その他	23

相談の対象者	
パートナー/配偶者	98
家族	72
会社	23
性的関係のあった人	23
友人/知人	21
他陽性者	19
元パートナー	9
漠然とした周囲	8
行政	5
NGOスタッフ	3
その他	15

対人関係に関する相談で登場する対象者は、パートナーが一番多く、次いで家族となっていた。そして、性的に関係があった人、会社の人間関係、友人/知人などが登場していた。また、HIV陽性者同士の人間関係についても相談がよせられており、ピアな人間関係が広がることで、安心や安定につながる一方で、新たに悩みが増えるといった面もあるようだ。

最も多くよせられた相談内容は、相手との関係性で、病名を知らせたことによる関係性の変化に関する相談であった。カミングアウト(通知)とも関連した相談であり、個人的な人間関係であるパートナー/配偶者/性的な関係があった人から、会社の人間関係、行政やNGOなどサービスを利用するなかでの人間関係など多様な相談がよせられていた。

カミングアウトをする動機の中には、恋愛がある。体調がコントロールされれば、やはり誰かと生きていきたいと思うのは自然なことだ。しかし、自分のHIVのコントロール状況と性行為により相手にどの程度感染させ得るのか、社会からその事はどの程度許容されているのか、という不安についての相談が寄せられていた。

トラブルの項目では、伝えた相手からのネガティブな反応に基づくものがあり、病気に起因するトラウマみたいなものが、相手のなかにも、HIV陽性者自身のなかにも存在しており、対人関係を悪化させていた。精神面の不安定さを同時に抱えている相談者の場合には、より大きな影響を受けていた。また、人権侵害だと思われるような、暴力的な脅迫にさらされているにもかかわらず、秘密を抱えていることで周囲に助けを求められずに苦しむ相談も数件よせられていた。

## 4-1 生活に関する相談：677

4-1 生活に関する相談	
就労/就学	479
経済的な問題	54
住宅問題/ホームレス(野宿生活)	36
生命保険	28
海外渡航(留学)/海外からの帰国	19
外国人	18
法律問題	17
医療費	7
健康診断	5
その他	14

就労は、毎年最も多く寄せられる相談であり、生活に関する相談の7割を占めている。就労を続けながら、病気を知ったこと、定期的に通院することを秘密にしていることは、大きなストレス負荷を抱えることにもなる。失業状態にある、転職活動中の方からの就職活動を実践する上での相談などがよせられている一方で、引きこもり状態、しばらく働けない状態に陥り、リハビリ段階からの社会復帰に関する相談などもよせられていた。

また、失業することで、経済的な自立が損なわれ、住宅問題などにつながっていた。その一方で、経済的な安定があり、長期に賃貸に住むよりも、住居を購入するという選択をする人たちもいる。その際に、借入れを起す際のローンの時に求められる生命保険への加入をどうするのかといった相談も複数寄せられていた。

加えて、海外に居住する日本人、国内に居住する外国籍の陽性者からの相談も寄せられている。就労の継続とビザなどの滞在資格も関連がある相談となっていた。

#### 4-2 制度に関する相談：181

4-2 制度に関する相談	
障害者の制度利用 (手帳取得、自立支援、重度医療、障害者控除、施設入所)	65
生活保護	56
健康保険 (高額療養、傷病手当、付加給付、後期高齢者医療)	20
障害年金	12
プライバシー	10
ビザ	7
障害者雇用	5
サービス利用時の対応	4
その他	2

制度利用の多くは、服薬時の障害者手帳を取得するタイミングや、発症等で入院中での相談が多くみられた。手帳取得で利用できる、自立支援や重度心身障害者医療費助成の医療費助成に関する相談だけでなく、障害者施設等への入所に関する相談もみられた。身体に何らかの障害がある方の施設入所や転居等は、まだまだ厳しい現状があるようである。

発症で判明し、入院や療養が必要となった方では、その後の生活保障としての生活保護、障害年金に関する相談がみられた。また、更生施設に入所中の方の相談や、生活保護を受給している方から就労への移行に関する相談もあった。健康保険に関して、職場に未通知の方から、判明後の継続使用や、転職後の保険変更により何か問題が生じないかといった相談があった。健康保険組合と病院や役所とのやりとりが見えないため、不安になる人が多いようであった。

また、海外在住/赴任の方の一時帰国時、帰国後の手帳の取得や制度利用に関する相談があり、海外で投薬を開始した場合、帰国後の手帳取得の困難さが考えられる相談があった。

#### 5 心理や精神に関する相談：559

精神疾患に関しては、本人から申告があった場合にのみカウントしており、感染をきっかけとして悪化するケースもあれば、感染をきっかけに精神疾患を持つようになる方、脳梗塞等をきっかけとして精神疾患を持つ方もある。

具体的には、統合失調症、躁鬱病、人格障害、てんかん

5 心理や精神に関する相談	
精神疾患(統合失調、躁鬱、人格障害、パニック障害、その他)	182
精神との付き合い方	137
薬物依存	107
精神的な不安定さ	40
ストレス	24
その他の依存傾向(アルコール、セックス、ギャンブル、対人、その他)	18
精神科の受療に関する状況	17
人間関係の閉塞感	17
自殺念慮	5
セクシュアリティの受容	5
HIVの受容	5
その他	2

どに関する相談、精神疾患との付き合い方に関する相談が多く寄せられていた。精神状態のバランスを崩した状態で相談をされる方が多く、そうした時期は相談の頻度が高くなる傾向がみられた。

また、昨年度に比べても薬物依存の問題を持つ方からの相談が増えていた。拘留中に弁護士を通じて相談を受けるケース、服役中に服役後の相談を手紙でもらうケース、服役後の社会復帰に関する相談をするケースなどが見られた。相談経緯としては、薬物の専門医療機関等からの紹介、もともとぶれいすの相談者だった方などであった。全体として、継続相談になるケースが多いため、相談者は増える傾向がある。なお、類似の依存問題としては、対人、セックス、アルコールなどに関する相談もある。

加えて、感染判明後にプライバシー不安から、人間関係を閉じる方もあり、そうした方がある程度時間が経ってから、ようやく相談するケースもあった。中には、判明後10年経ってから、というケースもあった。

その他、セクシュアリティ、HIVの受容の難しさ、できなさにに関する相談もあった。

#### 6 病気や病態の変化や服薬：281

6 病気や病態の変化や服薬	
その他の疾患	87
HIVの関連症状	57
服薬の継続	33
副作用	23
CD4の変化	23
投薬前の不安	16
入院中の病態	15
その他	27

「その他の疾患」、「HIVの関連症状」に関する相談が多くみられた。分類は、基本的に相談者本人から聞いた症状(状況)

を元に相談員が行ったものである。主な疾患としては以下のようであったが、相談内容としては、HIVと他疾患が重複した際の難しさ、関連症状の治療方針や予後や後遺症に関する相談がみられた。また、今年度もHAND (HIV関連神経認知障害)に関する相談があり、自分自身もそうなのかといった漠然とした不安からの相談が多かったように思われる。

(順不同)

その他疾患 ～ 骨折、B型/C型肝炎、梅毒、带状疱疹、蜂窩織炎、脳梗塞、癌、口唇ヘルペス、コンジローム、痔、インフルエンザ、原因不明の体調不良、子宮筋腫、腸閉塞、花粉症などのアレルギー症状、難聴等

HIVの関連症状 ～ 悪性リンパ腫、髄膜炎、カンジダ、サイトメガロ網膜炎、HAND (HIV関連神経認知障害)、トキソプラズマ脳症、カボジ肉腫等

服薬に関する相談として、今年度は1日1回1錠の薬剤が承認されるなど、服薬の選択肢が増えており、そうした影響を受けての相談や、仕事や生活のリズムに合わせてなど、様々な理由やタイミングで薬剤変更を検討しているというような相談があった。また、飲み忘れ時に不安になり相談するケースなどあった。副作用に関する相談は、以前は投薬前の不安の相談が多かったが、長期的な服薬による腎機能や肝機能に関する相談も増えつつあるように感じる。また、発症で感染が判明した方から、関連症状、副作用、cd4の変化などに関する不安や問題などの相談が多くよせられていた。

## 7 医療体制や受診に関する相談：178

7 医療体制や受診に関する相談	
医療・検査機関の選択	61
医療従事者とのコミュニケーション	54
他科受診	30
歯科受診	10
通院や服薬の中断・拒否	5
精神科受診	4
セカンドオピニオン	2
その他	12

医療・検査機関の選択として、仕事や生活の変化による転居等での通院先の変更に関する相談、医療に対する不満などの理由での転院に関する相談がみられた。また、告知直後の情報がない中での通院先の選択に関する相談もあった。その他、他科受診や、風邪の時の医療機関の受診、歯科受診における医療機関の選択に関する相談もあった。

医療従事者とのコミュニケーションでは、医師、看護師、医療ソーシャルワーカー、薬剤師、カウンセラーとの関係性に関する相談があった。長期的に治療を継続するにあたり、相談者はより安心して受診できる治療環境を求めていること

が考えられた。また、地方においては、医療機関、医療従事者を変えられない中でどのように付き合っていくのか、という相談もみられた。

気になったのは、通院や服薬を中断・拒否している方もあり、経済的な理由での中断、医療従事者との関係性の悪化による中断、精神疾患による中断が主な理由となっていた。そうしたケースではできるだけ状況を伺いつつ、医療従事者とのつながりを再構築できるような支援をしたり、ブロックの拠点病院につなげるなど、孤立しない対応を心がけた。

## 8 医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス：53

8 医療機関以外の支援体制・リソースへのアクセス	
ぶれいす東京のサービスの問い合わせ	19
その他の機関・リソースの利用	13
他陽性者との交流	11
地域の支援団体	4
外国の情報(ビザ、医療機関、医療状況)	2
その他	4

ここでは、主にHIVの感染をきっかけとし、社会的なネットワークを広げていくなかで、ぶれいす東京という団体についての問い合わせや、どんなサービスがあるかの確認、他の支援団体等でのサービスに関する問い合わせが多くよせられた。また、薬物依存に関する医療機関やサービスに関する問い合わせがみられた。

## 9 連絡等のコミュニケーション：844

9 連絡等のコミュニケーション	
近況報告	533
ネストプログラムの利用	96
利用登録	69
面談の調整	53
積極的な協力・参加	33
その他	60

相談において、件数が一番多い項目となった。数が多くなった要因としては、定期的に身体状況を報告する方、相談後の経過報告をする方なども多く、カウントされ易い項目となっている。加えて、ぶれいす東京における電話や面談の相談サービス、ネストプログラムを継続的に利用する方、新たに利用を希望される方が増えていることが挙げられる。継続する方の傾向として、地方在住で他に相談相手がない方や引きこもり気味の方、精神疾患を有する方、薬物問題を抱える方が多くみられ、定期的に連絡することで、感情や気持ちを客観視し、整理して、生活や精神の安定に役立てているようであった。HIV感染症は単なる「ウイルス感染症」ではなく、社会のあらゆる面に影響を及ぼす疾患である由縁であり、他問題を抱える脆弱性への対応も求められているものと思われる。

る。また、積極的な協力/参加として、今年度はぶれいす東京が関わる当事者ミーティングへの運営協力として、英語を話す方のサポートミーティング「Launch of the Tokyo HIV Peer Support～東京HIVピア・サポート～」の立ち上げや、その他研究や冊子製作におけるアンケートの回答や手記の執筆、新聞やTVの取材など、様々な形で参加をいただいた。

▼ 周囲の人からの相談：149

- ・パートナー/配偶者等からの相談：74
- ・家族からの相談：59(母親：34、きょうだい：22、親戚：3)
- ・その他の人からの相談：16

パートナーからの相談74件のうち、32件は女性からであった。相談者たちは、ある日、直接パートナー/配偶者から、あるいは本人の同意のもと医療者から、陽性であることを伝えられ、混乱しているなかでの相談であることが多かった。女性パートナーのなかには夫が男性との性行為で感染したことを知らされ、さらに混乱している人も含まれていた。相手を支えたいという気持ちと、離婚を考える気持ちとの間で悩む人が多い印象であった。

パートナー/配偶者からの相談、家族からの相談に共通するのは、HIV陽性であると知ったことで、関係がどのように変化するのかというものだ。しかし、パートナー/配偶者とHIV陽性者の間に、感染の可能性のある性行為が存在する場合には、相談してきている本人の健康問題でもあることから、感染の有無をどう確認するかという不安を聞くこともある。

男女間のカップルの場合には、子づくりということが、感染判明前にも、その後にも存在し、同性間とは違う相談内容もよせられている。その他の人のなかには、友達、セックスの相手、同居人などが含まれている。

▼ 専門家(外部)からの相談や連携：41

専門家の属性	
医療機関	13
就労関連	12
福祉関連	7
地域団体	6
保健所等	1
その他	2

陽性者が多く集まるエイズ治療拠点病院だけでなく、周囲の医療機関のソーシャルワーカーなどから、連絡がよせられた。福祉機関のなかには、高齢者向けサービス提供者、生活保護ケースワーカーからの相談などもあった。そのほとんどは、普段提供するサービス利用者として、HIV陽性者からの利用申し込みがあったのだが、どのように対処したらいいかという情報を求める声であった。また、就労関連の相談のな

かには、就職支援機関からの相談以外に、企業の人事担当者からの連絡も増えており、障害者枠でHIV陽性者を前向きに雇用したいという連絡もある。こういった相談をきっかけとして、研究部門による資材の紹介、研修部門の出前研修につながった事例もでてきている。

■ 1年を振り返って

今年度の面談の増加について、要因として定期的に面談を行っているケースが増えていること、ぶれいす東京の運営するネスト・プログラムの増加に伴い、参加希望者が増えていることが挙げられる。プログラムへの参加は、告知後間もない方から、告知後かなり年数を経た方まで、幅広く利用されてきている。

相談内容として、就労に関する相談が多く、就職活動、転職に関する相談から、引きこもりなどでしばらく働けない状態からの、リハビリを踏まえた社会復帰に関する相談など、幅広い相談がよせられるようになっていた。研修部門において、実際に陽性者を雇用している、することにした企業へ出前研修を行うに至った例もあった。

相談者の傾向は、ここしばらく継続していることであるが、今年度も薬物依存や精神疾患など、HIV以外にも様々な困難さ、問題を持っている方からの相談が多くみられ、HIVに留まらず生活全般にわたる支援を求められるケースが多くなっていった。そのため、定期的な相談、長期的な支援になる傾向がみられた。薬物に関しては、2014年の4月から、違法薬物として取り締まりの対象となる薬物、違法となる行為の範囲が拡大されたことで、相談が増える可能性もある。研究部門の厚生労働科学研究では、調査や研修などを通じて医療機関や支援団体と協力態勢を築いてきており、今後も連携し支援を続けていきたいと考える。

また、中国語などの外国語を話す方の相談も増えつつある。ぶれいす東京では、日本語でコミュニケーションが可能な方を中心に対応しており、母国語でのサポートが必要な場合には、シェアやクリアチーボスなどの支援団体を紹介している。今年度は、英語を話す方のサポートミーティング「Launch of the Tokyo HIV Peer Support～東京HIVピア・サポート～」の立ち上げに協力するなど、リソースづくりにも関わった。

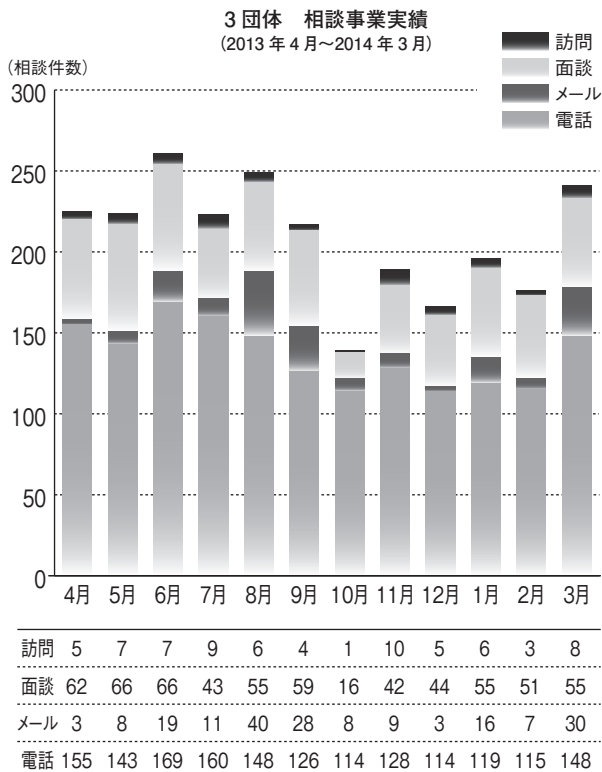
今後の課題として、様々な問題や課題を持つ方が増えている事を踏まえ、これからも支援のネットワークづくりを広げていきたいと考える。これまでにも、医療従事者や他領域の専門家、行政の担当者などと協力関係を築くように努め、少しずつ成果が得られつつある部分もあるので、それらも活かしつつ、更に充実させていきたいと考える。

また、相談で得られた様々な陽性者の声を、いろいろな形で社会に届けることを、今後も継続していきたいと考える。

## (2) HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業

本事業は厚生労働省による事業受託として5年目に入った。今年度もぶれいす東京、SHARE(特定非営利活動法人シェア=国際保健協力市民の会)、CRIATIVOS(特定非営利活動法人CRIATIVOS HIV-STD関連支援センター)の3団体にて運営を行った。昨年度は、電話相談事業とピアカウンセリング等の支援事業は別々になっていたが、今年度はまた従来の「HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業(ピア・カウンセリング等による支援事業)」として1つの事業として受託することになった。本事業は、HIV陽性者(エイズ患者を含む)やパートナー、家族を対象にピア・カウンセリングや電話・対面による相談サービスを提供することを通して、その社会生活を支援し、生活の質を高めることを目的としている。

### ●3団体合計の月別相談件数の実績



※PCの故障によりぶれいす東京の面談の2013年10月14日～31日のデータが欠損している。

※メール相談には、ぶれいす東京のものは含まない。

### I 事業の概略

本事業は、以下の7つの柱からなっている。

- ① HIV陽性者参加型のピア・カウンセリングの実践とグループ・プログラムの開発と運営
- ② HIV陽性者を含むスタッフの研修及び育成
- ③ HIV陽性者の社会参加のためのサポート
- ④ フリーダイヤルによる HIV陽性者と周囲の人のための電話相談

⑤ピア・カウンセリングを支える対面相談

⑥「地域における当事者支援のためのスタディ・プログラム」

⑦在日外国人への相談サービスの提供

### II 事業の実績

①～③の実績に関しては、P26 部門報告(ネスト)に詳細あり。

④と⑤に関しては、当部門の報告の前項目(1)を参考に以下にもまとめた。

⑥に関しては、P3 部門報告(事務・総務)のハイライトを参照されたい。

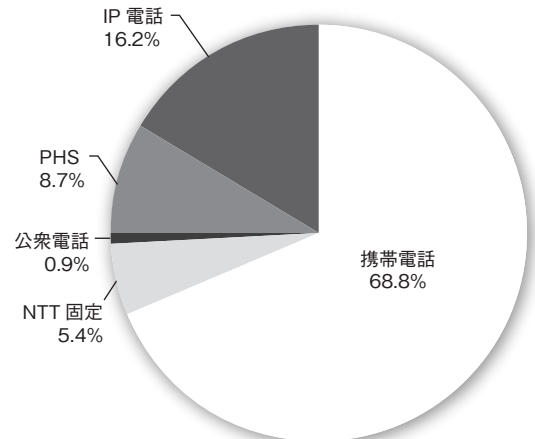
#### ④フリーダイヤルによる HIV陽性者と周囲の人のための電話相談

ここではフリーダイヤル(ぶれいす東京でのみ電話相談で導入)の実績について考察する。

NTTカスタマーセンターの集計のため、無言電話や間違い電話も含む。通話できた数は1,600件(2013年4月～2014年3月)だが、通話に至らなかったものが、6,829件もあった。

通話できた数は全体の19.0%となり、十分な対応とはいえなかった。

フリーダイヤルにおける端末の割合  
(2013年4月～2014年3月) n=1,600



昨年と比較すると、携帯電話からのアクセスが、72.9%から68.8%と少し下がった。また公衆電話は0.9%(14件)と少ないが、入院中などの環境からのアクセスも重要だと考える。専門医療機関でない機関で告知をされた場合など、携帯電話をつかった検索で、この電話番号にたどりつき、相談に至るケースもある。

また地域別のデータでみると、東京都403件(25.2%)、広島県325件(20.3%)、神奈川県203件(12.7%)、大阪府95件(5.9%)、埼玉県93件(5.8%)、北海道43件(2.7%)、沖縄県35件(2.2%)と続いており、全国のニーズに 대응していることがわかる。東京に次いで広島の件数が多い要因には、

頻回相談者の存在がある。

#### ⑦在日外国人への相談サービスの提供

在日外国人への相談サービスの提供をした2団体(CRIATIVOS/SHARE)のデータからまとめた。

#### ●相談者とサポートの対象者の属性

相談者の傾向は、HIV陽性者の相談がもっとも多く、のべで377件となっている。次いで専門家104件、その他25件、家族1件で、パートナーからの相談はなかった。また、確認検査の結果を待っている間の相談は2件よせられた。具体的なサポートの対象者は、HIV陽性者で459件あった。

##### ○相談者の属性(のべ件数)

HIV陽性者：377件(男：348、女：28、その他：1)／  
家族：1件(男：1)／専門家：104件(男：30、女：74)  
／その他：25件(男：23、その他：2)

##### ○サポートの対象者の属性(のべ件数)

HIV陽性者：459件(男：399、女：56、その他：4)／  
確認検査待ち：2件(男：2)／その他：46件(男：37、  
女性：5、その他：4)

#### ●国籍と言語

スペイン語/ポルトガル語圏の相談者はCRIATIVOSでの対応が多く、その他東アジア、東南アジア圏からの相談は主にSHAREが対応していた。具体的な国籍は、ペルーが最も多く、次いでブラジルだった。また国籍は不明だがスペイン語圏の相談者も見られた。その他、タイ、中国、台湾、フィリピン、ミャンマー、ネパールと続いた。また、数は少ないがその他の多様な言語によるコミュニケーションの支援ニーズが存在していた。

相談者の国籍/言語(のべ人数)n=507

ペルー：164件/ブラジル：136件/  
スペイン語圏：85件/日本語：30件/  
タイ語：45件/中国：13件/台湾：6件/  
フィリピン：6件/ミャンマー：5件/  
ネパール：4件/ベトナム：3件/ウガンダ：3件/  
オランダ：2件/シンガポール：1件/  
スリランカ：1件/メキシコ：1件/その他：2件

#### ●相談者の相談手段(のべ人数)n=507

相談や支援の手段は電話が最も多く、次いでメール、訪問/同行、対面と続く。

対応しているエリアが広範囲に及ぶため、電話による対応が多くを占めている。

##### ○電話による相談(n=253)

HIV陽性者：152件(男：133、女：19)／  
家族：1件(男：1)／専門家：84件(男：26、女：58)／  
その他：16件(男：16)

##### ○メールによる相談(n=182)

HIV陽性者：164件(男：162、女：1、その他：1)／  
専門家：11件(男：4、女：7)／その他：7件(男：7)

##### ○来所面談(n=1)

HIV陽性者：1件(男：1)

##### ○訪問/同行(n=71)

HIV陽性者60件(男：52、女：8)／  
専門家：9件(女：9)／その他：2件(その他：2)

#### ●相談者の年齢層(n=507)

相談者の年齢層は、40代：156件(30.8%)、30代：153件(30.2%)、20代：90件(17.8%)、50代：49件(9.7%)、以下60代、10代と続いた。

#### ●相談者の居住地域(n=507)

最も多かったのが関東甲信越(東京以外)で270件(53.3%)、東京152件(30.0%)、東海25件(4.9%)、近畿11件(2.2%)、北陸7件(1.4%)であった。他には、中国・四国と海外からの相談がよせられ、日本からのみならず、海外からの相談もあった。

#### ●相談時間(n=325 / n=総相談件数からメール相談数を引いたもの)

相談時間は、30分以内244件(75.1%)、30～59分13件(4.0%)、60～119分51件(15.7%)、120分以上17件(5.2%)となった。

#### ●相談内容

電話相談では、「通訳派遣及び調整」69件が最も多く、「医療体制・医療との関わり・連絡」62件、「HIVの情報提供」35件、「服薬・副作用に関する相談」31件、「通訳/翻訳」24件、「社会資源活用の情報提供」21件、「他のSTIや医療の相談」20件と続いた。

メールの相談では、「医療体制・医療との関わり」107件が最も多く、「通訳派遣及び調整」73件、「社会資源活用の情報提供」34件、「生活上の具体的問題&市民生活支援」24件、「病気や病態の変化に伴う不安や混乱」24件、「HIVの情報提供」14件と続いた。

訪問/同行では、「通訳/翻訳」69件が圧倒的に多く、「医療体制・医療との関わり・連絡」14件、「HIVの情報提供」8件、「母国語の情報提供/帰国支援」8件となった。

各団体が提供したサービスの内容は以下のとおり。

#### ■ CRIATIVOS

電話相談(n=158)、メール相談(n=169)、対面相談(n=1)、訪問/同行(n=62)。

対象者の国籍/言語は、ペルー(164)、ブラジル(135)、スペイン語圏(85)、日本語(6)。

通訳派遣は、東京都(32)、神奈川県(9)、大阪府(8)、茨城県(5)、千葉県/愛知県(各2)、

三重県/滋賀県/岡山県/広島県(各1)など関西圏まで広く実施した。

#### ■ SHARE

電話相談(n=95)、メール相談(n=13)、訪問/同行(n=9)。

対象者の国籍は、タイ(45)、日本(24)、中国(13)、フィリピン/フィリピン(各6)、ミャンマー(5)、ネパール(4)など。

通訳派遣は、東京(5)、千葉(4)で実施した。

### Ⅲ 事業の広報について

相談サービスの広報は、フリーダイヤルや外国語相談などの電話番号を掲載した印刷物の配布及びインターネットの活用により行なっている。またHIV陽性者本人やパートナー、家族にはもちろんのこと、行政や医療を含めた専門家/支援者への認知の向上についても、地域の連携会議や勉強会への参加や講師をつとめることを通じて行っている。

今年度は新たに「HIV陽性者とその周囲の人のためのサービス」案内と題したパンフレットを作成した。3つ折りで手に取りやすい、目につきやすい工夫をしながら作成し、医療機関や保健所等に配布し、広報を行った。

※詳しくは、P6 部門報告(事務・総務)をご参照ください。

### Ⅳ HIV陽性者等のHIVに関する相談・支援事業のまとめ

日本語による相談では、東京周辺の相談はもちろんあるが、他の地域からもよせられるようになっている。今年度は新たにパンフレットを制作したが、このパンフレットは、陽性者の電話相談や対面相談だけでなく、外国人向けの相談窓口なども案内している。今後は、このパンフレットをできるだけ多くの医療機関に配布し、より多くの陽性者に利用できる窓口、リソースして周知されるよう、広報したいと考える。

外国語による相談対応では、医療者との言語によるコミュニケーションだけでなく、日本で生活する上での生活課題の支援、心理的なケアに至るまで、幅広い場面において貢献していた。2020年には、東京でのオリンピックが予定され、来日する外国人も増加することが考えられる。不測の事態も考えて、あらゆる面から外国人支援のネットワークをより強化できればと考える。

また、今年度から「地域における当事者支援のためのスタディ・プログラム」を実施し、地方で陽性者支援を行う支援者のための研修を始めた。今年度は、鹿児島と新潟からプロ

グラム参加を受け入れた。東京での実践を共有することで、プログラムの運営から、プログラム作りまで、より具体的にイメージができ、実践に繋がれるように心がけた。こうした取り組みをきっかけとし、各地で陽性者支援の輪が広がることにつながればと考える。今後も、こうした支援者に向けた支援を続けていくことができればと考える。

## 部門報告 (研究・研修)

### 1. 研究事業

ぶれいす東京は、当事者の視点を生かした独自の研究や、厚生労働科学研究費補助金による研究など、さまざまな調査研究を実施しています。また、調査研究で得られた成果を冊子やWeb、学会発表を通じて情報発信し、普段の支援・予防啓発活動などにも活用しています。

#### ● 厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業

平成24年度に3か年計画で始まった厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究」に、研究代表者として理事の樽井が、研究分担者として代表の生島が関わっているほか、ぶれいす東京のスタッフが引き続き協力して研究を行っています。詳しくは、58ページからの「厚生労働科学研究報告」をご覧ください。研究班に関する最新の情報や各分担研究報告書は、平成20～22年度に実施した前研究班の成果とあわせ、下記のWebサイトに掲載しています。

「地域におけるHIV陽性者等支援のためのウェブサイト」  
地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究班

<http://www.chiiki-shien.jp/>



#### ● 受託研究(厚生労働科学研究)

厚生労働科学研究費補助金エイズ対策研究事業「MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究」(研究代表者:市川誠一氏)からの依頼で、前年度に引き続き、HIV検査担当者のMSMへの理解促進のための研修プログラムの企画や運営などを実施しました。

#### ● 学会発表

● 第72回日本公衆衛生学会総会(10月23日～10月25日 於 三重)

「HIV陽性者の地域支援研究(1) 東京都、大阪府の行政窓口による相談対応に関する調査」(示説)

● 第11回アジア・太平洋地域エイズ国際会議(11月18日～11月22日 於 タイ・バンコク)

「Attitudes on Support for PLHIV and Drug Use in Regional Counseling/Support Organizations in Japan」(示説)

● 第27回日本エイズ学会学術集会・総会(11月20日～11月22日 於 熊本)

「HIVと薬物依存との関連要因の検討:薬物使用者を対象にした聞き取り調査から」(口頭)

「新陽性者PEER Group Meeting (PGM)における医療情報セッションを担当して」(口頭)

「地域相談機関におけるHIV陽性者へのサービス提供における課題について—東京都と大阪府での検討」(口頭)

「『Futures Japan ～HIV陽性者のための総合情報サイト～』—作成の経緯・内容分析—」(示説)

※その他に、シンポジウムやセミナーなどでも多数の発表をしました。

### 2. 研修事業

ぶれいす東京では、HIV/エイズの一般知識、HIV陽性者支援、性教育やセクシュアリティ、人権などをテーマに、学校や企業、その他専門家の集まりなどへ向けた講師派遣や研修の企画・運営を幅広く行っています。

講師派遣では、HIV陽性者の支援経験が豊富な相談員やセクシュアリティの専門家、性教育の専門家などを派遣しています。研修の企画・運営においては、企業や教育機関、保健所を含む行政機関、医療機関、国際協力団体などの研修を受託し、独自のプログラムの立案も行っています。JICA青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修(シェア=国際保健協力市民の会に運営協力)や新人スタッフ合同研修(詳しくは、5ページの「部門報告(事務・総務)」をご覧ください)などでも採用している、包括的な研修プログラムの依頼にも対応しています。

講師派遣や研修をご希望の方は、ぶれいす東京Webサイトの「講師派遣・研修」のページ(<http://www.ptokyo.com/services/lecturers.php>)から「講師派遣依頼書」をダウンロードして必要事項をご記入の上、事務所にメール([office@ptokyo.com](mailto:office@ptokyo.com))かFAX(03-3361-8835)でご送付ください。

2013年度の講師派遣実績は次項の通りです。

● 講師派遣

▼ 講演 (一般)

2013年

5月 28日～29日

愛媛県保健師研修会 (参加者9名)

5月31日 IT企業 (参加者3名)

6月 1日～2日

青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修  
(参加者8名)

3日 ヤンセンファーマ (参加者12名)

21日 東京都保健所職員研修会 (参加者32名)

24日 IT企業 (参加者3名)

7月 5日 三井物産ビジネスパートナーズ (参加者15名)

10日 沖縄県保健師研修会 (参加者16名)

26日 エイズ予防財団「HIV/エイズ基礎研修会」  
(参加者90名)

29日 JICA 関西 (参加者6名)

8月28日 PLAS Meetup #4「知ることから始めませんか? 日本とアフリカのHIV/エイズ問題～いま、あなたとできること～」(参加者34名)

9月 6日 世田谷区障害者雇用支援セミナー「90分で分かる! 障害者の採用と職場定着」(参加者50名)  
不動産企業 (参加者2名)

21日 akta community forum vol. 3「セクシャリティの多様性とセクシャルヘルス」(参加者15名)

23日 エイズ・サポート千葉20周年記念講演会「あなたの性、私の性、若者の性—そしてエイズ」  
(参加者25名)

30日 ZEL「東北HIV検査担当者向け研修会」  
(参加者18名)

10月 4日 埼玉県保健所研修会 (参加者16名)

10日 カトリック教会HIV/AIDSデスク (参加者17名)

19日 北関東・甲信越地区エイズ治療拠点病院SW連絡会議 (参加者24名)

22日 千葉県保健所研修会 (参加者20名)

30日 内閣府「東南アジア青年の船」ディスカッションプログラム “Health Education (Measures against HIV/AIDS)” (参加者32名)

11月 1日 国立保健医療科学院 エイズ対策研修  
神奈川県保健所研修会 (参加者19名)

8日 墨田区 (参加者30名)

15日 三井物産ビジネスパートナーズ (参加者40名)  
akta ボランティア研修会 (参加者14名)

20日 法務省人権啓発指導者養成研修会

12月 4日 東京都エイズ予防月間講演会「働く世代に多いHIV/エイズ～ともに働くとき、知っておきたいこと～」(参加者90名)

7日 神奈川県医療事業協会研修会 (参加者35名)

9日 「社会福祉施設の感染症対策研修会」  
(参加者100名)

16日 長野県・長野市保健所職員研修会 (参加者28名)

21日 関西性教育研修セミナー 2013 冬「LIVING TOGETHER～池上千寿子が歩み続ける道～」  
(参加者60名)

2014年

1月 5日 「Living Together計画/新春トークイベント Re-United in Anger」(参加者78名)

18日～19日

沖縄看護師研修会・mabui (参加者15名)

2月 8日 HIV/AIDS看護学会 (参加者15名)

12日 東京障害者職業センター「雇用サポート講習会」  
(参加者18名)

22日～23日

青年海外協力隊エイズ対策技術補完研修  
(参加者14名)

26日 AIDS & Society 研究会議 (参加者17名)

3月 5日 板橋区保健所 (参加者19名)

14日・20日

三井物産ビジネスパートナーズ (参加者30名)

23日 映画「トークバック」ミニワークショップ/トーク (参加者80名)

▼ 講演 (教育機関)

2013年

6月 9日 放送大学 (参加者12名)

13日 早稲田大学本庄高等学院

16日 放送大学 (参加者14名)

29日 聖学院中学校・高等学校 (参加者12名)

7月 2日 東京都立八潮高等学校 (参加者40名)

5日 東京都立光丘高等学校 (参加者120名)

11日 東京工業高等専門学校 (参加者82名)

12日 東京都立田柄高等学校 (参加者100名)

17日 東京都立板橋高等学校

19日 東京都立城東職業能力開発センター江戸川校  
(参加者80名)

10月11日 蒲田保育専門学校 (参加者80名)

11月18日・25日

東京YMCA国際ホテル専門学校 (参加者103名)

12月 4日 上野学園高等学校

6日 台東区立御徒町台東中学校

11日 東京都立井草高等学校 (参加者280名)

13日 東京都立第四商業高等学校

24日 東京都立忍岡高等学校

2014年

1月15日 東京YMCA国際ホテル専門学校 (参加者14名)

17日 上野学園中学校

3月 6日 東京都立中央ろう学校 (参加者40名)

※参加者数未記載は不明のもの

出講件数自体はここ数年減少傾向にありますが、とりわけ職場における HIV/エイズ研修(東京障害者職業センター「雇用管理サポート」事業など)等の一定のニーズがあるものに対し、相談・支援活動と連動させて効果的に対応できるよう、引き続きプログラムに検討を加えていきたいと思ひます。

(文責：大概)

### 平成25年度厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業 総括研究年度終了報告書

#### 地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究 (H24-エイズ-一般-013)

研究代表者：

樽井正義

(特定非営利活動法人ぶれいす東京/慶應義塾大学)

研究分担者：

生島 嗣

(特定非営利活動法人ぶれいす東京)

大木幸子

(杏林大学保健学部看護学科)

肥田明日香

(医療法人社団アパリア アパリア・クリニック)

若林チヒロ

(埼玉県立大学保健医療福祉学部健康開発学科)

#### 研究要旨

目的：本研究は、HIV感染症と薬物使用を含むメンタルヘルスに関して、その現状と課題を明らかにし、必要とされる対応を検討することにより、HIV陽性者と薬物使用者を支援するための基礎資料を策定することを目的とする。

方法：本研究は6つの課題から構成される。

- HIVおよび精神保健専門機関における支援と連携に関する研究(大木)
- 地域相談機関におけるHIV陽性者へのサービス提供における課題について一東京都と大阪府での検討一(生島)
- HIV陽性者の生活と社会参加に関する研究(若林)
- 薬物使用者を対象にした聞き取り調査一HIVと薬物依存との関連要因をさぐる(生島)
- 依存症治療施設におけるHIV陽性者診療の状況調査(肥田)
- NGOにおけるHIV陽性者および薬物使用者の支援に関する調査(樽井)

結果：本研究は3年計画の2年目であり、HIV陽性者への支援に必要なこととして、保健行政機関の相談担当者の調査からは、薬物使用を含むメンタルヘルス問題をもつ陽性者への支援に際して、HIV担当者に薬物相談の経験が豊富な精神保健担当者が協力することが挙げられた。地域の相談機関の調査からは、相談・支援の業務に必要と見られる障害認定等HIVに関連する基礎知識がまだ不足していることが認められた。またいずれの機関でも担当者は、保健問題である薬物使用への対応に困難を感じており、これに応える方策の検討が課題となる。

陽性者のほぼ半数が薬物使用経験を持つが、1年以内では数%であること等、使用の形は多様であることが示された。またかつて薬物使用を経験した陽性者等の質的調査から、薬

物使用の社会的背景、薬物と性との関係、必要とする支援等について示唆が得られた。

これらの研究成果から、一つには、HIV陽性者、薬物使用者の実情にかなった理解を進めて、適切な支援の提供を図ること、いま一つには、感染と使用を予防するために、状況に即した必要な注意を促すことが課題とされる。

薬物使用/依存は、メンタルヘルスの課題の一つであり、健康問題として対処することが、陽性者支援にとって、さらにはHIV対策ならびに薬物対策にとっても、不可欠な課題であることが、改めて確認された。

#### A. 研究目的

本研究は、HIV感染症と薬物使用を含むメンタルヘルスについて、その相互関連の現状を背景とともに明らかにし、求められる対応を検討し、HIV陽性者と薬物使用者の生活を支援するための基礎資料を策定することを目的とする。HIV医療領域および精神保健福祉領域の専門機関、地域の相談機関、陽性者支援NGO、薬物依存回復施設、HIV陽性者および薬物使用者自身とそのパートナーや家族、そして行政諸機関に提供し、もってHIVと薬物使用の予防と治療に資することを目指す。

我が国では、薬物の静脈注射によるHIV感染の件数は、先進諸国やアジア近隣諸国と比べて、きわめて少数にとどまっているが、ここ数年、HIV感染症と薬物使用との関連を示す事例が、エイズ拠点病院、陽性者支援NGO、依存回復施設等から少なからず報告されている。これを受けて、2012年に改正されたエイズ予防指針では、「薬物乱用者」が、HIV感染の予防と治療において固有の対策を必要とする個別施策層の一つとして明記されることとなった。

これまでのエイズ対策研究において、薬物使用との関連を対象とする研究としては、地道に継続されてきた疫学研究や諸外国の動向調査がある。しかし、HIV陽性者支援についての研究としては、主任研究者等による個別施策層に関する研究(2002～04)における、薬物使用を含むメンタルヘルスに関する分担研究が挙げられるにとどまる。HIVに関わる医療機関やNGOでは、薬物使用に関する情報と理解が求められており、また薬物使用に関わる精神保健福祉機関やNGOには、HIV感染症とHIV陽性者に関する知識が十分とは言えない。この不足が補われ、HIV陽性者と薬物使用者に対する適切な支援が提供される必要がある。

本研究の分担研究者は、一方では、HIV陽性者が直面する課題と社会の支援資源、さらには課題の背景をなす職場や地域社会における疾病理解促進についての研究に従事してきた。また他方では、エイズ拠点病院や保健所等の全国の精神保健機関、首都圏における各種相談機関を網羅する支援の現状と問題点に関する調査を、多年にわたり行ってきた。この調査研究を継承して、昨年度は医療機関および地域相談機関における陽性者支援の現状と課題について質問紙調査を実施

したが、本年度はその結果の分析を進めた。また陽性者の社会生活について質問紙調査とその結果の分析を行った。併せて、昨年度実施した薬物使用経験をもつ陽性者への面接調査を継続して薬物使用の背景を考察し、また昨年度の陽性者支援NGO職員に加え、本年度は薬物依存からの回復施設の職員への面接調査により、HIVと薬物使用との関連を検討する。

## B. 研究方法

HIV陽性者にとっての薬物使用を含むメンタルヘルスの問題、陽性者の療養と社会生活を支援する医療機関、地域相談機関、NGOの対応、その現状と課題を明らかにすることを目的とする本研究は、(1) HIV医療領域および精神保健福祉領域の専門機関の医療者、(2) 地域の相談機関の担当者、(3) 陽性者支援および薬物依存回復施設の担当者、(4) そしてHIV陽性者、これら4グループを調査対象とし、質問紙と面接による調査を行う。3年計画の2年目である本年度は、(1)と(2)に対して質問紙調査の結果を分析し(a、b)、(3)と(4)に対しては面接調査を継続し実施した(d、f)。また(4)に対しては質問紙調査を実施した(c)。

- a. 昨年度実施した医療従事者への質問紙調査について、エイズ治療拠点病院での調査結果の分析に続き、本年度は全国の保健所および政令指定都市・特別区の保健センターのエイズ対策担当者(449、回収率60.3%)と精神保健相談の担当者(371、回収率54.7%)からの回答を分析した。調査項目は、精神保健の課題を含むHIV陽性者への支援実態、自己効力感、直面する課題等とした。
- b. 昨年度実施した東京都と大阪府の福祉事務所、就労支援相談窓口等の相談機関に対する質問紙調査について、機関としての回答の分析に続き、本年度は担当者(東京都：550、大阪府：400、回収率51.5%)からの回答を分析した。調査項目は、担当者のHIVに関する知識、研修の必要性の認識、自己効力感等とした。
- c. 陽性者への質問紙調査を本年度実施し、エイズ治療ブロック拠点病院に通院している1,095名(回収率61.3%)からの回答を分析した。調査項目は、10年前と5年前に行った社会生活全般の調査を踏襲するとともに、新たに薬物使用を含むメンタルヘルスに関する質問を追加した。
- d. 薬物使用経験のあるHIV陽性者でゲイ・バイセクシュアル男性/MSM、そしてクリーン(無使用)期間が6ヶ月以上の19名を対象に、半構造化面接調査を行い、過去の薬物使用状況、それに関連する背景要因等の実態を探り、必要とされる対応を検討した。
- e. 依存症クリニックの通院患者を対象に、診療録の閲覧と面接により、薬物使用経験、精神症状と治療、感染症罹患の有無等を調査し、医療者と回復者・使用者とによる依存症治療の可能性について検討する。この研究は3年目に実施する。
- f. 薬物依存症からの回復を援助する施設の職員に半構造化面接調査を実施して、薬物使用の文脈においてHIVの問題が注目され始めた経緯、および薬物使用とHIVとの関連

において現在直面している課題を明らかにした。  
(倫理面への配慮)

質問紙調査と面接調査の参加者には、研究趣旨を説明し同意を得た。質問紙は回答返送をもって同意と見なした。プライバシーに配慮し、質問紙は無記名とした。リスクに関しては、とくに薬物使用経験者の面接調査へのリクルートに際して、面接が引き金とならないよう配慮した。

研究計画は、特定非営利活動法人ふれいす東京等、研究者の所属機関の倫理委員会で審査され、承認を受けた。陽性者への質問紙調査(c)については、配布する拠点病院の倫理委員会にも審査と承認を依頼している。

## C. 研究結果

本年度(2年目)の各研究の成果は以下の通りである。

- a. 保健所および保健センターにおけるエイズ担当者(A)と精神保健担当者(B)への質問紙調査からは、(1) いずれもこれまでの保健所業務でHIV陽性者から相談を受けた経験は多くはないが(A：18.1%、B：11.7%)、相談内容に精神保健課題、薬物使用問題が含まれること、(2) 精神保健担当者の方がHIV担当者よりも、薬物使用に関する相談経験が豊かであること(A：35.4%、B：75.3%)、(3) また自己効力感についても、陽性者で精神保健の課題を併せ持つ者(A：22.4%、B：45.3%)、あるいは薬物の課題を併せ持つ者からの相談に対しても(A：9.0%、B：15.8%)、「十分対応できる」「まあ対応できる」との回答が多いことが示された。(4) また薬物相談への対応を困難にしている要因として、薬物使用は疾患か人格か(A：51.4%、B：53.8%)、どこまで関わるのか(A：70.5%、B：48.0%)がわからない、依存症治療の知識が不足している(A：90.7%、B：76.3%)、通報すべきか否かが分からない(A：40.8%、B：29.5%)等が挙げられた。
- b. 相談機関の担当者に対する質問紙調査からは、(1) HIVに関する知識について「全く知らない」「ほとんど知らない」との回答が、「抗HIV薬の開発により、ウイルスを血液中からみつからないレベルまでコントロールする技術が開発された」では3分の2(東京：63%、大阪：72%)、「障害者認定のなかに、HIVによる『免疫機能障害』が位置づけられた」では3分の1(東京：32%、大阪：44%)見られた。(2) こうした知識と、HIV陽性者の薬物使用に関する相談に対応できるとする自己効力感との間には、有意な相関が認められた。(3) HIVの知識や陽性者・支援者の経験に関する研修が業務に役立つと考えている担当者は、生活保護、障害者福祉、就労の担当者に多く(約6割)、年金の担当者には少ない(3割以下)ことが示された。
- c. 陽性者への質問紙調査(A)からは、(1) 注射器の共用による感染は、動向調査(B、2012年度)の0.4%より高い0.7%で、注射によるのか性的接触によるのか分からないという回答がさらに1.4%あり、また性的接触も動向調査より同性間は高く(A：80.7%、B：56.6%)、異性間は低い(A：12.8%、B：28.7%)こと、(2) いずれかの薬物(ぼつき薬を

含む)使用経験は55.0%(過去1年以内に使用:20.9%、1年以上前に使用:34.1%)、(3)使用量・回数を自身でコントロール「できている」「およそできている」は92.3%、「あまりできていない」「できていない」は7.7%であること、(4)薬物についての基礎知識、HIVとの関係についての情報を、陽性者の半数近くが求めていること等が示された。

- d. 薬物使用経験をもちMSMであるHIV陽性者19名への面接調査においては、(1)使用していない現在において、非就労という社会復帰・適応の問題、うつ症状というメンタルヘルスの問題を、それぞれ4割の者が持っていること、(2)薬物についてのネガティブなイメージ(危険、違法)は使用を控えさせるが、それがポジティブ(安全、カッコイイ)に転化され、あるいは自暴自棄になって放棄されること、(3)セックスと薬物が、社会的差別・排除に抗する手段として使用されること、(4)薬物使用に関連する複数の要因でセーフターセックスが阻害されること、が示された。
- e. 依存症クリニックの通院患者を対象とする調査については、昨年度にパイロットスタディを行ったが、本年度はクリニックの事情で研究実施を控えた。
- f. 薬物使用の回復施設職員へのインタビュー調査からは、(1)薬物使用の文脈において2005年以降HIVの問題が注目され始めた経緯として、一部のMSMにとってのセックスドラッグであったゴメオの麻薬指定=使用の犯罪化による使用者の動揺に加えて、(2)刑事収容施設法および障害者自立支援法の制定により、回復施設ガルクの社会での役割と認知が拡大し入所者が増加したことが指摘された。(3)また現在直面している課題としては、2014年に指定薬物の所持・使用が犯罪化されることの使用への影響と、(4)2016年に実施される刑の一部執行猶予制度への対応が挙げられた。

#### D. 考察

保健行政機関の相談担当者の調査からは、薬物使用を含むメンタルヘルス問題をもつ陽性者への支援に際して求められることとして、まずは業務分担制をとっている機関内での連携が、つまりHIV担当者と精神保健担当との協力が挙げられた。また機関外の専門機関であるエイズ診療拠点病院および精神保健福祉センターとのネットワークが、地域内に形成されることが必要とされている。

地域の相談機関の調査において注目されたのは、治療の現状や障害認定等の知識が、相談・支援の業務に必要と見られる部署において、まだ不足していることである。たとえば地域包括支援センターでは、これまでは陽性者との接触が少なかったが、今後高齢者が増えることが予想されるが、同時にそこでは、書類を介しての接触が主となるため、知識の必要が気づかれていない。こうした問題への対応が求められる。

メンタルヘルス問題をもつ陽性者への支援に際して共通する問題として、医療機関でも、相談機関でも、担当者が薬物使用への対応に困難を感じていることがある。刑事問題としてあってはならないという捉え方が強いために、保健問題と

してどのように対応したらよいか、戸惑いがあるように思われる。これに答える方策の検討が課題となる。

陽性者に対する質問紙調査からは、薬物使用(ぼつき薬を除く)の経験は、1年以上前に遡ればおよそ半数だが、1年以内では10分の1以下になる。また9割以上が使用量と回数を自分でコントロールできるとし、できないというのは数%にとどまる。こうした数字の幅を踏まえて、陽性者を薬物使用との関わりの有無、程度といった行動の面から、幾つかのタイプに分けることが可能であり、また必要であるように思われる。

かつて薬物使用をしていた陽性者への面接調査からは、HIV感染と薬物使用のそれぞれについて理解と支援が必要であることが明らかにされた。また彼らの経験が少数で特異であろうとも、使用に至る背景と、使用者が必要とする支援について、そこから貴重な示唆が得られるように思われる。これらの陽性者の研究成果は、一方において、HIV陽性者、薬物使用者に関して、その実情にかなった理解を進めて、適切な相談と支援を提供する前提となり、また他方では、感染と使用の可能性をもつ人に、状況に即した必要な注意を促し予防をはかる基礎となることができる。

#### E. 結論

HIV陽性者への支援に必要なこととして、保健行政機関の相談担当者の調査からは、薬物使用を含むメンタルヘルス問題をもつ陽性者への支援に際して、機関内において、HIV担当者に薬物相談の経験が豊富な精神保健担当者が協力すること、また地域の精神保健福祉センターやエイズ診療拠点病院とのネットワークの形成が挙げられた。地域の相談機関の調査からは、相談・支援の業務に必要と見られる障害認定等、HIVに関連する基礎知識がまだ不足していることが認められた。また医療機関、相談機関のいずれにおいても、担当者は保健問題である薬物使用への対応に困難を覚えており、こうした問題に対応する方策の検討が課題となる。

陽性者のほぼ半数が薬物使用経験を持つが、1年以内では数%である、使用経験を持つ者の数%はコントロール困難と認めているが、9割以上は可能と答えている等、使用の形は多様であることが示された。またかつて薬物使用を経験した陽性者等の質的調査から、薬物使用の社会的背景、薬物と性との関係、必要とする支援等について示唆が得られた。これらの研究成果を踏まえて、一つには、HIV陽性者、薬物使用者の実情に即した理解を進めて、求められる適切な支援の提供を図ること、いま一つには、感染と使用を予防するために、状況にかなった必要な注意を促すこと、それが課題とされる。

薬物使用/依存は、メンタルヘルスの課題の一つであり、健康問題として対処することが、陽性者支援にとって、さらにはHIV対策ならびに薬物対策にとっても、不可欠な課題であることが、改めて確認された。

(文責:樽井)

## 2013年度 HIV/エイズに関する保健所職員を対象にした研修会 MSMへの理解促進を目的とした研修プログラムとその評価 報告書

特定非営利活動法人 ぶれいす東京 生島嗣

2013年度(平成25年度)に、HIV/エイズに関する保健所職員を対象にした本プログラムにて実施された研修会は8回で、東京、神奈川、千葉、埼玉、仙台、沖縄、愛媛、長野において開催された。この研修会内で実施されている研修プログラムは、「エイズ予防のための戦略研究(研究リーダー：市川誠一)」(2007-2010)のMSMむけ検査環境改善プログラムの一環として、HIV検査担当者がMSMへの理解を促進し、検査の場におけるコミュニケーションを改善することを目的に開発された。2011年から後の実施は、MSM首都圏グループ(特定非営利活動法人akta、特定非営利活動法人ぶれいす東京、名古屋市立大学)に引き継がれた。

研修プログラムの企画立案は、首都圏グループを代表してぶれいす東京が行い、運営は首都圏についてはMSM首都圏グループが、その他の地域ではコミュニティセンター、NGOなどが行った。

東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県における研修については、MSM首都圏グループが、各自治体と厚生科学研究「MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究」(研究代表者：市川誠一)と連携しつつ、aktaが受託している厚生労働省委託事業「同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業」により実施した。また、宮城県：仙台、愛媛県、沖縄県の研修会の開催にあたっては、各地のコミュニティセンター(同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業)、NGOが研究班(MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究)との連携により開催し、本プログラムの企画・運営についてはぶれいす東京が実施した。

さらに、長野県については、長野市、長野県が厚生科学研究「MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究」(研究代表者：市川誠一)、厚生科学研究「地域においてHIV陽性者等のメンタルヘルスを支援する研究班」(研究代表者：樽井正義)との共催で開催し、プログラムの企画・運営についてはぶれいす東京が担当した。

東京都、神奈川県は独自の予算による運営であったが、他の自治体については、厚生労働省委託事業「同性愛者等のHIVに関する相談・支援事業」、研究班による講師派遣などの協力により運営された。

8カ所の研修参加者の多くは、保健所職員などHIV検査に携わる人であったが、県庁職員、福祉領域の行政職員、エイズ治療拠点病院職員など、幅広い参加者がみられ、合計167人が参加した。

### ■ 研修の開催日時、開催形態、参加者数など

(1)東京都：平成25年度保健所職員等エイズ専門研修

日時：平成25年6月21日(金) 9:30～17:00

主催：東京都 協力：MSM首都圏グループ

対象者：HIV・性感染症検査事業に従事している(関心のある)保健所職員、

HIV検査委託実施機関の関係者(医師、保健師、検査技師、事務等)

参加者：22人 アンケート回答者：22人

(2)神奈川県：平成25年度保健所HIV検査担当者向け研修

日時：平成25年11月1日(金)10:00～16:30

主催：神奈川県

協力：横浜市健康福祉局健康安全部健康安全課、MSM首都圏グループ、かながわレインボーセンターSHIP、厚生労働科学エイズ対策研究事業(以下厚労科研)

「MSMのHIV感染対策の企画、実施、評価の体制整備に関する研究」班

対象者：県内の医療従事者等(特に検査従事者)

参加者：19人 アンケート回答者：19人

(3)埼玉県：エイズカウンセリング研修 MSM(男性と性的接触を持つ男性)

日時：平成25年10月4日(金)10:00～16:30

主催：埼玉県

共催：MSM首都圏グループ、エイズ予防財団

対象者：保健所職員、拠点病院、医師、看護師、MSW

参加者：20人 アンケート回答者：20人

(4)千葉県：エイズ担当者当研修会

日時：平成25年10月22日(火)10:00～16:20

主催：千葉県

共催：MSM首都圏グループ、エイズ予防財団

対象者：HIV・性感染症検査事業に従事している保健所職員等。

参加者：13人 アンケート回答者：13人

(5)宮城県・仙台・東北地域におけるHIV検査担当者向け研修

日時：平成24年10月29日(月) 13:30～17:00

主催：コミュニティセンター zel、エイズ予防財団

対象者：保健所職員、拠点病院、医師、看護師、MSW

参加者：15名 アンケート回答者：15人

(6)沖縄県：保健所同性愛者等支援についての研修

日時：平成25年7月10日(水)

主催：mabui、エイズ予防財団

協力：沖縄県、沖縄市

対象者：保健所職員、拠点病院、医師、看護師、MSW

参加者：11人 アンケート回答者：11人

(7)愛媛県：(中四国地区)HIV検査担当者向け研修会  
日 時：平成25年5月28日(火) 13:20～17:00  
実施主体：厚労科研「MSMのHIV感染対策の企画、実施、  
評価の体制整備に関する研究」班、HaaT えひめ  
対象者：HIV検査担当者  
参加者：12人 アンケート回答者：12人

(8)長野市：HIV感染者・エイズ患者の支援を考える会  
日 時：平成25年12月16日(月) 10:00～16:00  
主 催：長野市  
共 催：長野県,厚労科研「男性同性間のHIV感染対策と  
その介入効果に関する研究」班(研究代表：市川  
誠一)、厚労科研「地域においてHIV陽性者等の  
メンタルヘルスを支援する研究」班(研究代表：  
樽井正義)  
対象者：保健所職員、拠点病院等の医師、看護師、MSW、  
長野市の保健・福祉・人権対策分野の職員  
参加者：講義35人、ワークショップ15人

## ■研修プログラムとその内容

### (1)守秘義務やグランドルールの確認及び

#### アイスブレイク(導入)

同じ職場の人同士になることもあるので、守秘義務や参加者の安全性を担保するための  
研修用グランドルールの確認した。

### (2)HIV陽性者などの手記リーディング

MSMのHIV陽性者や周囲の人たちの手記を朗読し、検査サービス提供者である研修参加者に、  
利用者側のリアリティに触れてもらいつつ、支援の課題について振り返ってもらった。

### (3)講義パート

- 講義：セクシュアリティについて  
講師は、保健師や医師、NGOや当事者など。セクシュアリティについての基楚知識、対応に際して求められる態度、配慮のポイントなどを講義。
- 講義：MSMの疫学的な知識  
講師は名古屋市立大学の研究者。研究データや、保健所・検査所の受検者アンケート結果をフィードバック。
- 講義：地域のHIVの動向  
講師は主に自治体の担当者。地域のエイズ動向及びエイズ対策事業についても紹介。
- 地域検査サービス提供者による取り組み事例(事例提供者が得られる場合のみ実施)  
講師は検査サービス担当者。先駆的な取り組みや、工夫などを共有。
- 講義：医学的な知識(沖縄県のみ)  
講師はエイズ診療拠点病院の医師。

### (4)模擬対応

研修参加人数に応じて数名のMSM当事者に参加してもらった。研修参加者は4～5人程度のグループに別かれた。MSM当事者が決められたシナリオをもとに受検者役となり、HIV検査のプリテスト・カウンセリングの場面を設定して、3分半の模擬対応を演じた。

その後の3分半で研修参加者、MSM当事者、観察していた他のメンバーで振り返りを行った。進行役が一人はいった方が運営はスムーズであるため、講師や行政の技官にも参加してもらい、模擬対応の運営を行った。数名のMSM当事者はグループを移動しながら、それぞれ同じ役を演じた。全員が模擬対応を経験した後、感じたこと、気がついたことをグループごとに話し合い、その後、全体で共有した。

### (5)NPOによる資料の紹介

コミュニティセンターやNGOが制作している資料を紹介し、HIV検査場面での活用方法および検査環境にMSMを意識して制作された資料が設置されることの意味について解説した。

## ■プログラム内容

各地域でのプログラム内容は以下のとおり。

### (1)東京都：平成25年度保健所職員等エイズ専門研修

日 時：平成25年6月21日(金) 9:30～17:00

9:30 あいさつ～感染症対策課

9:35 アイスブレイキング(自己紹介/研修への期待)、手記リーディング(ぶれいす東京 生島 嗣)

10:40 講義「セクシュアリティの理解とセクシュアルヘルスへの支援」  
(杏林大学 大木 幸子)

11:30 講義「首都圏におけるMSMとHIV/AIDSの現状を学ぶ—MSM首都圏グループの取組み方」  
(名古屋市立大学 岩橋恒太)

12:20 休憩(1時間)

13:20 HIV検査環境への取り組み例の紹介

① 北区保健所～即日検査を実施して～

(北区保健所保健予防課 馬場幸一郎)

② HIV検査相談の充実と利用機会の促進に向けた試み～カードツールの活用～

(公衆衛生活動研究所 上木隆人)

14:25 インテーク場面での模擬対応

(ぶれいす東京 生島 嗣、aktaスタッフほか)

16:30 全体の振り返り、まとめ(ぶれいす東京 生島 嗣)

16:45 アンケート記入、その他

(2)神奈川県：平成25年度保健所HIV検査担当者向け研修

- 日 時：平成25年11月1日(金)10：00～16：30
- 10：00 あいさつ、事務連絡（健康危機管理課）
- 10：10 アイスブレイク～手記リーディング  
（ぶれいす東京 生島 嗣）
- 11：00 セクシュアリティへの理解と求められる配慮  
（杏林大学 大木幸子）
- 11：30 MSMにおけるHIV／エイズの現状  
（名古屋市立大学 市川誠一）
- 12：00 休 憩
- 13：00 検査環境への取り組み事例の紹介  
横須賀市保健所
- 13：40 模擬対応  
（ぶれいす東京 生島 嗣、akta、shipスタッフほか）  
セクシュアリティに配慮した相談の実際
- 15：40 検査相談に利用できる資材について  
（akta 荒木順子／かながわレインボーセンター  
SHIP 桜井亮介）
- 16：00 全体の振り返り、まとめ（ぶれいす東京 生島 嗣）
- 16：20 アンケート記入、その他

(3)埼玉県：エイズカウンセリング研修 MSM（男性と性的接触を持つ男性）

- 日 時：平成25年10月4日(金)10：00～16：30
- 10：00 主催者あいさつ、埼玉県のエイズの疫学動向と  
埼玉県のHIV／エイズに関する事業について  
（疾病対策課）
- 10：20 アイスブレイク～手記リーディング  
（ぶれいす東京 生島 嗣）
- 11：00 セクシュアリティへの理解と求められる配慮  
（杏林大学 大木幸子）
- 11：40 MSMを対象にしたエイズ予防のための戦略研究  
結果・研究の成果など  
（名古屋市立大学/akta 岩橋恒太）
- 12：00 休 憩
- 13：00 保健所の取組事例の紹介&意見交換  
埼玉県鴻巣保健所 鈴木幸子
- 13：10 「セクシュアリティに配慮した相談の実際」模擬  
対応  
（ぶれいす東京 生島 嗣、aktaスタッフほか）
- 15：10 検査相談に利用できる資材について  
（akta 荒木順子）
- 15：30 全体の振り返り、まとめ  
（ぶれいす東京 生島 嗣）
- 15：50 アンケート記入、その他

(4)千葉県：エイズ担当者当研修会

- 日 時：平成25年10月22日(火)10：00～16：20
- 10：00 あいさつ&千葉県のエイズの疫学動向と  
HIV／エイズに関する事業について  
疾病対策課感染症対策課 感染症対策予防班
- 10：20 アイスブレイキング &手記リーディングワーク  
（ぶれいす東京 生島 嗣）
- 11：45 セクシュアリティへの理解と求められる配慮  
（akta 荒木順子）
- 11：00 MSMを対象にしたエイズ予防のための戦略研究  
結果・研究の成果など  
（名古屋市立大学 岩橋恒太）
- 12：00 休憩(1時間)
- 13：30 実践ワーク:相談対応を体験してみよう  
（ぶれいす東京 生島 嗣、aktaスタッフほか）
- 15：30 検査の現場で利用可能な資源の紹介  
（akta 荒木順子）
- 15：50 まとめ（ぶれいす東京 生島ほか）
- 16：10 アンケート記入、その他

(5)宮城県・仙台：東北地域におけるHIV検査担当者向け研修

- 日 時：平成24年10月29日(月)13：30～17：00
- 13：30 あいさつ（エイズ予防財団 白田千代子）
- 13：35 HIV/AIDSの疫学動向  
（名古屋市立大学 塩野徳史）
- 14：05 セクシュアリティについて（ZEL 太田 貴）
- 14：20 手記リーディング（ぶれいす東京 生島 嗣）
- 14：50 模擬対応  
「セクシュアリティに配慮した相談の実際」  
（ぶれいす東京 生島 嗣、ZELスタッフ）
- 16：50 振り返り、まとめ

(6)沖縄県：保健所同性愛者等支援についての研修

- 日 時：平成25年7月10日(水)
- 09：30 開会 県健康増進課課長
- 09：35 疫学的観点から（琉球大学 健山正男）
- 10：35 休 憩
- 10：45 mabui/nankr 沖縄活動報告  
（mabuiスタッフ 金城 健）
- 11：15 保健所アンケート中間報告  
（名古屋市立大学 塩野徳史）
- 12：00 お昼
- 13：00 自己紹介/アイスブレイキング  
（ぶれいす東京 生島 嗣）
- 13：20 リーディング/グループワーク  
（ぶれいす東京 生島 嗣）
- 14：05 セクシュアリティについて  
（レインボーアライアンス沖縄 砂川秀樹）
- 14：55 休 憩

- 15:05 模擬対応 (生島 嗣、塩野徳史、mabui スタッフ)
- 16:15 振り返り、まとめ、アンケート記入  
(ぶれいす東京 生島 嗣)
- 17:00 閉会 (mabui スタッフ 金城 健)
- 17:00 情報交換会

(7)愛媛県:(中四国地区)HIV検査担当者向け研修会

- 日時 平成25年5月28日(火)13:20~17:00
- 13:20 開会・参加者挨拶 (HaaT えひめ 新山 賢)
- 13:30 HIV/AIDSの疫学動向(日本・中四国)  
(名古屋市立大学准教授 金子典代)
- 14:00 セクシュアリティ(性的指向)について  
(四国学院大学 教授・HaaT えひめ 大山治彦)
- 14:30 手記リーディング(HIV陽性者とその周囲の人たちの手記)  
(ぶれいす東京 代表 生島 嗣)
- 15:00 模擬対応  
「セクシュアリティに配慮した相談の実際」  
(ぶれいす東京 代表 生島 嗣)
- 16:50 振り返り、まとめ
- 17:00 閉会

(8)長野市:HIV感染者・エイズ患者の支援を考える会

- 日時:平成25年12月16日(月)10:00~16:00
- 10:00~12:30
- ①情報提供
  - ・県内のHIV検査・相談状況(担当:長野県長寿課担当職員)
  - ・HIV受検者の感想(担当:長野市保健所担当職員)
- ②講話「セクシュアリティ(性的指向)について」  
(担当:名古屋市立大学教授)
- ③手記リーディング  
「HIV陽性者とその周囲の人たちの手記」  
(担当:ぶれいす東京 代表 生島 嗣 )
- 13:30~16:00
- ④模擬対応(グループに分かれて実施)
  - ・セクシュアリティに配慮した検査・相談の実際  
(検査前、陰性告知、陽性告知、予防的な関わり、リピーターへの対応)
  - ・質疑応答・まとめ  
(担当:ぶれいす東京 代表 生島 嗣、MSM当事者)
- 16:00 閉会

■エイズ担当者等研修会 参加者アンケート結果

研修の前後にアンケートを実施し、参加者への影響を考察した。

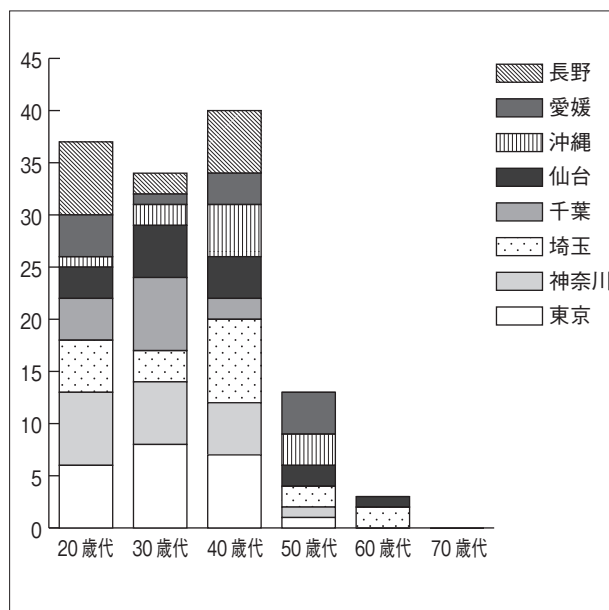
長野県の研修では、講義部分にHIV検査担当者以外にも参加したが、全部のプログラムに参加した訳ではないので、アンケートの対象外とした。ここでは、評価のための研修前、研修後に実施したアンケートのうち、回収した127票を分析する。

	参加人数	アンケート回収数
東京都	22	22
神奈川	19	19
埼玉県	20	20
千葉県	13	13
宮城・仙台	15	15
沖縄	11	11
愛媛・松山	12	12
長野	35	15
参加者合計	147	127

研修参加者の属性について:

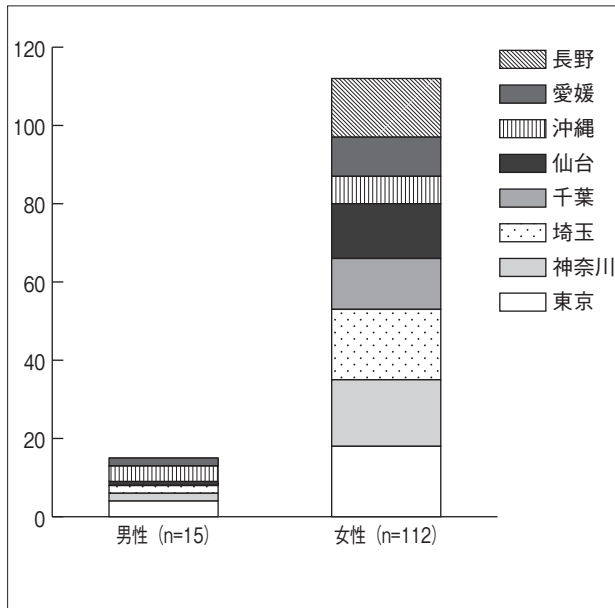
属性1.

参加者の年代:20代、30代、40代が多かった。(N = 127)



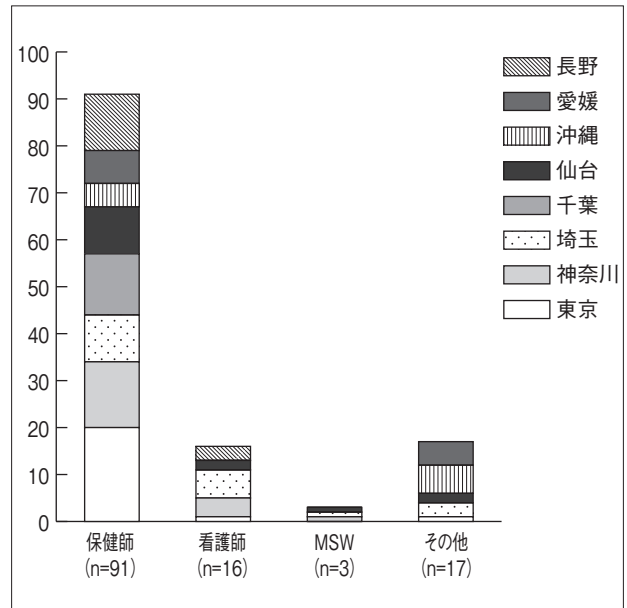
属性2.

性別：127人の参加者のうち女性(n = 112)が88%、男性が13%であった。



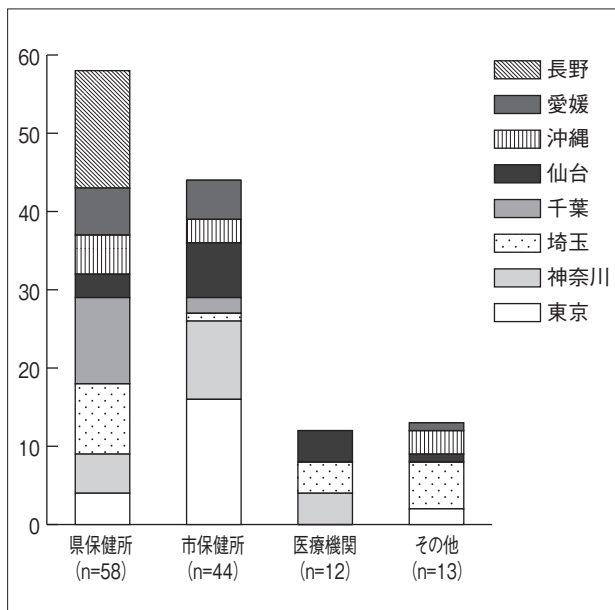
属性4.

職種：保健師の参加が多かった。保健師(n=91)の参加は、全体(N = 127)の72%を占めた。



属性3.

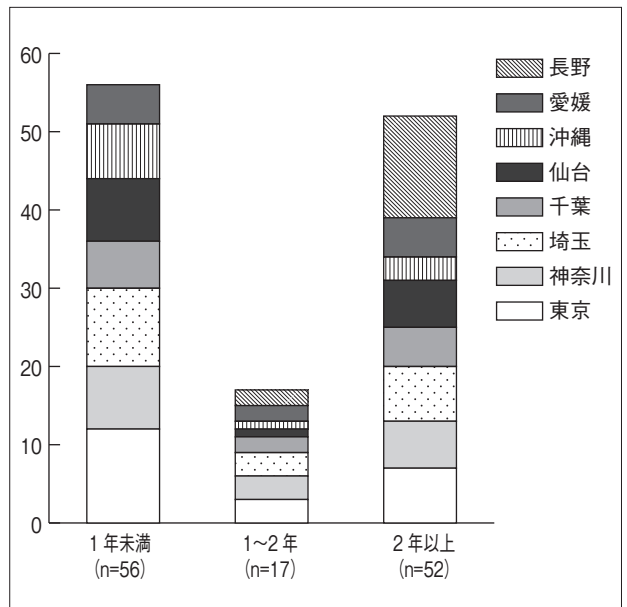
所属機関：参加者(n=127)のうち、県保健所と市保健所で全体の80%を占めた。



アンケート結果(研修前および研修後の比較を含む)：

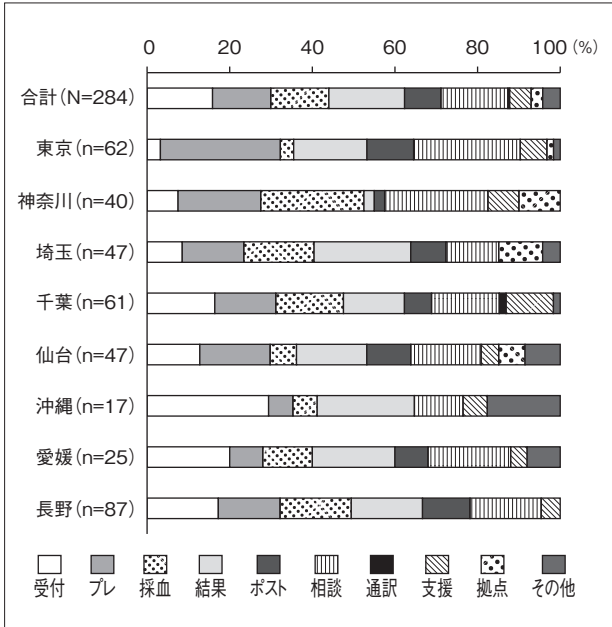
1. HIV業務経験年数：『HIV業務に関わった経験年数を教えてください。』に対する回答。

回答データを、以下の区分で分類すると、1年未満の参加者が最も多く全体の45%を占めた。



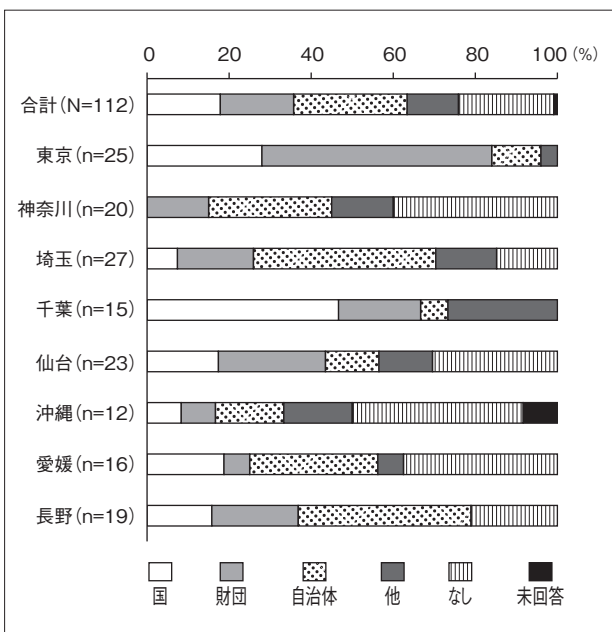
2. 担当業務(複数回答):『HIV検査における担当業務は何か?』に対する回答。

参加者は、「受付」、「プレカウンセリング」、「結果説明」、「ポストカウンセリング」、「日常相談」など、広範囲な業務を兼任していた。しかし参加者による担当業務の分布をみると、ポストカウンセリングが少ない等、自治体により保健師が担当する業務の役割に違いがあると推測された。



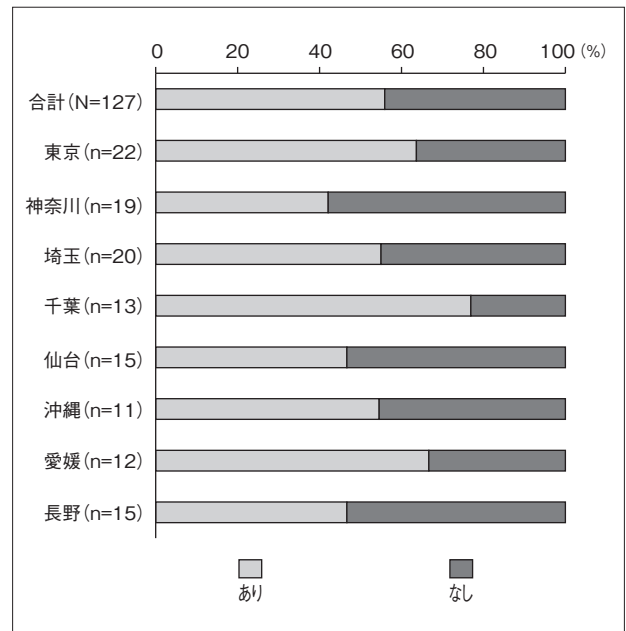
3. 研修受講状況(複数回答):『HIVに関する研修を受講したことがあるか?』に対する回答。

127人の回答からみると研修の受講状況は十分とは言えない。地理的な要因も影響していると推測されるが、研修を受けた経験は自治体によって違った。



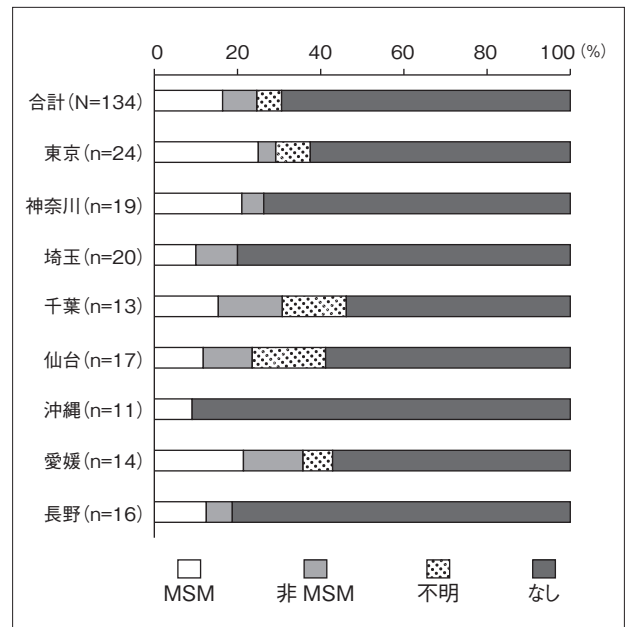
4. MSM対応経験:『MSMの受検者もしくは相談者に対応した経験はありますか?』に対する回答。

研修参加前調査ではMSMへの対応経験を有する割合は、地域により違いがみられた。



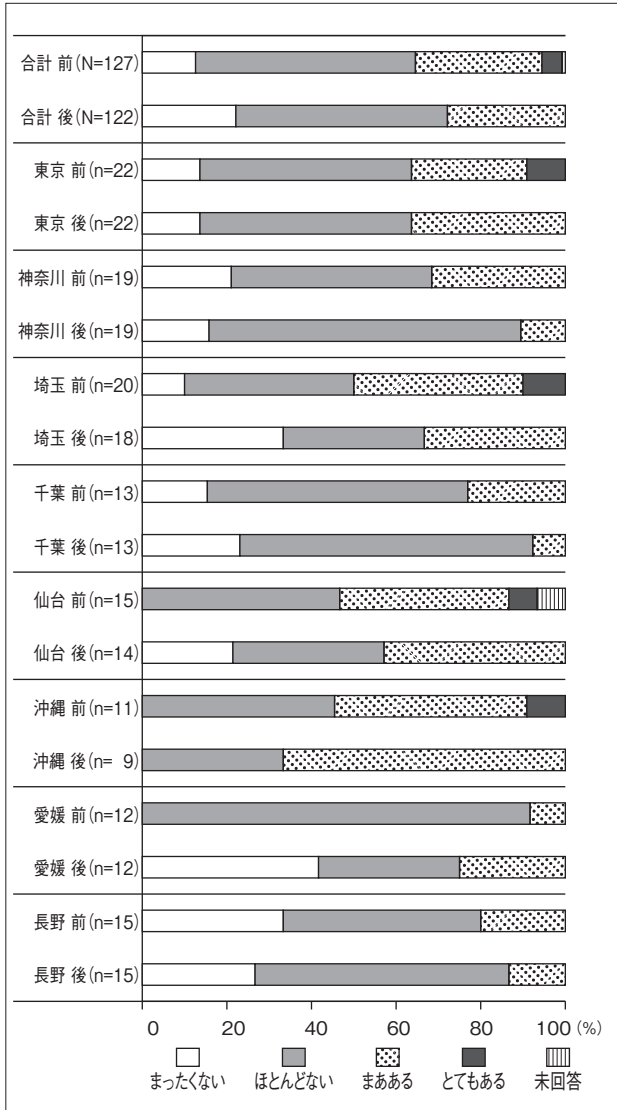
5. 陽性告知経験(複数回答):『陽性告知に関わったことがありますか?(複数回答可)』に対する回答。

自治体ごとの保健師の業務役割にもよると思われるが、陽性告知後の支援に関わる経験に差があった。



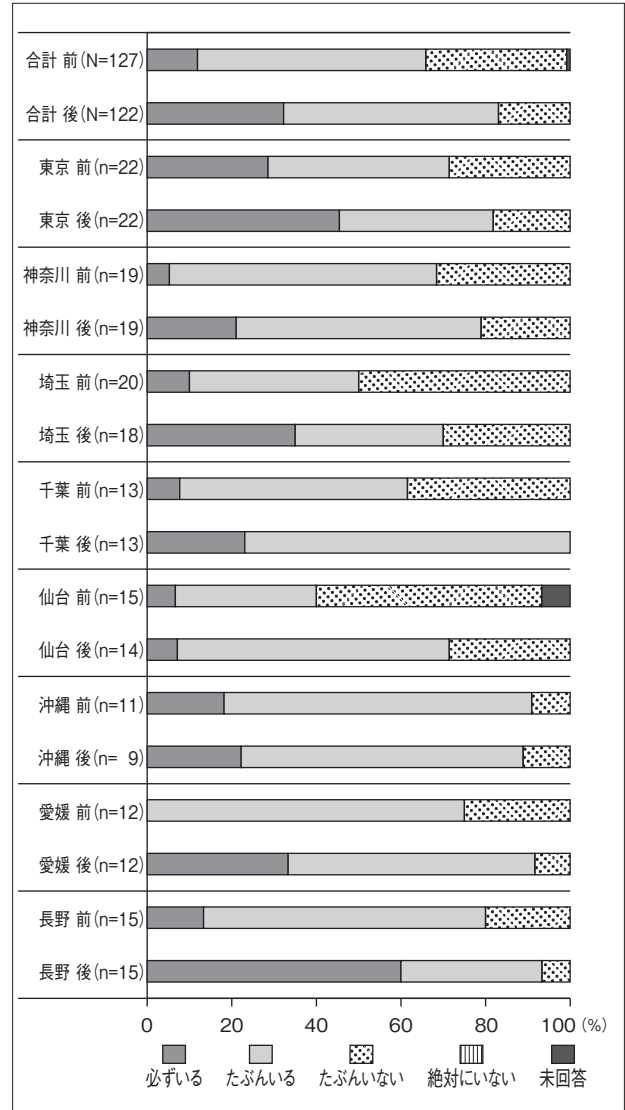
6. 性やセクシュアリティへの抵抗感：『あなたは、検査や相談のなかで、同性間の性行為、性的な話題になったとき、抵抗感がありますか？』に対する回答。

研修前に比べ研修後は、セクシュアリティへの抵抗感が『全くない』および『ほとんどない』という参加者が増加した。



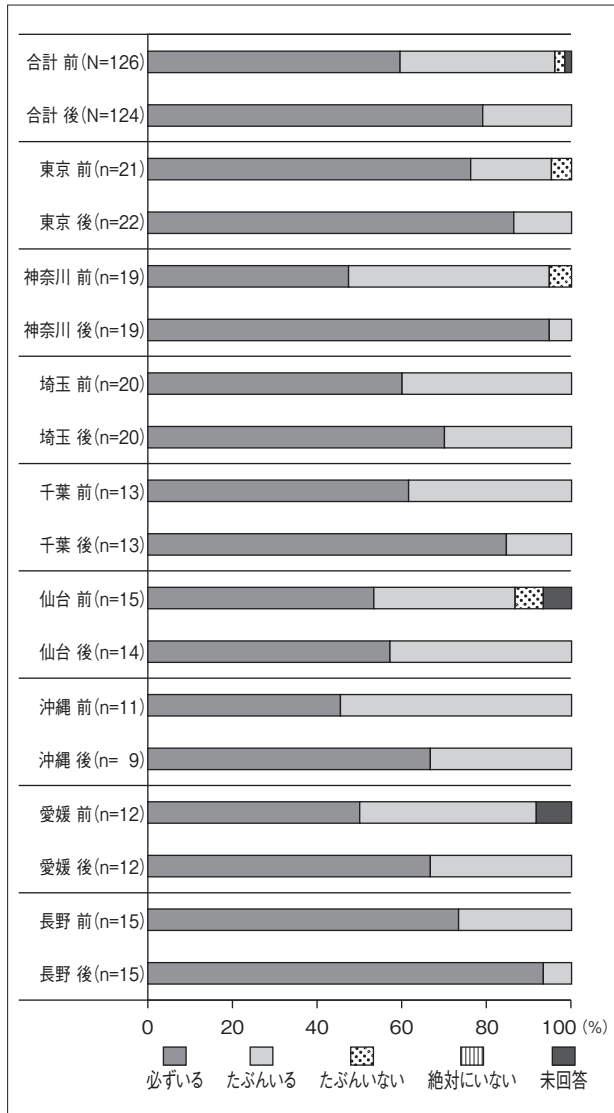
7. MSMの身近感：『あなたの家族や親戚、友達、職場の同僚のなかにMSMがいますか？』に対する回答。

研修に参加することにより、自分の身近な人間関係のなかにMSMが、「必ずいる」「たぶんいる」が上昇し、「たぶんいない」が減少した。見た目ではわからないリアリティが伝わった。



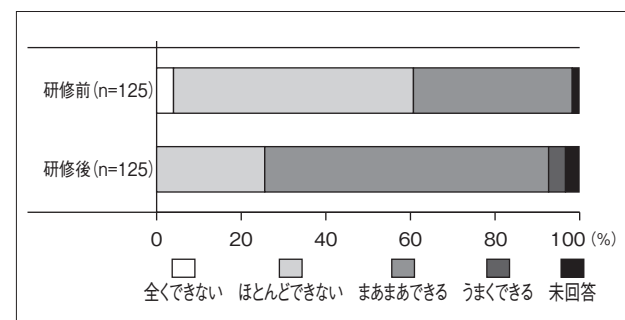
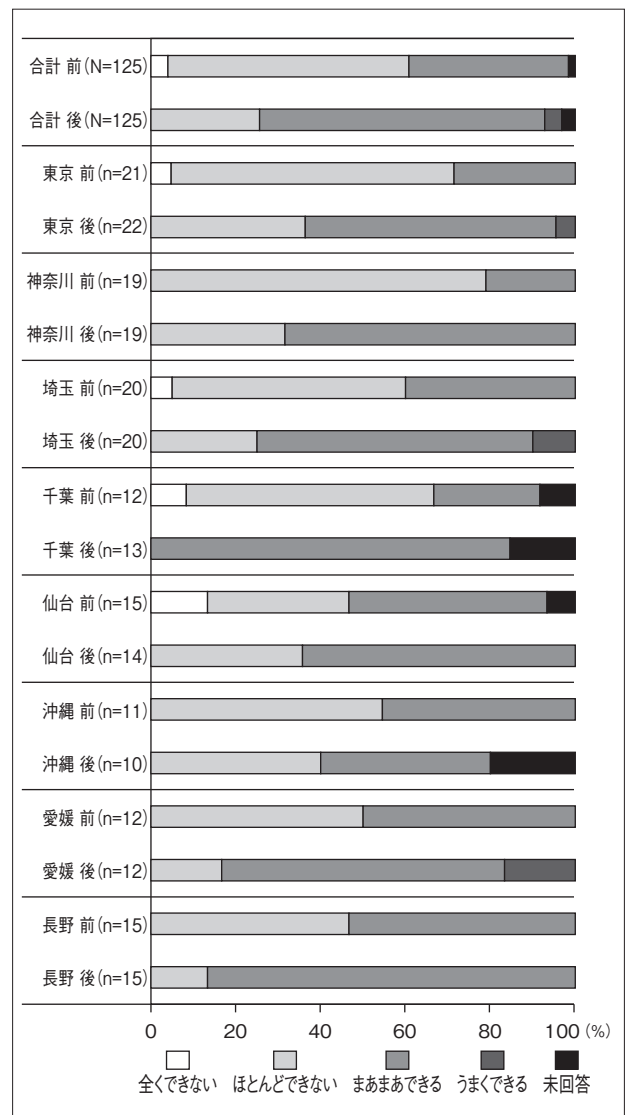
8. 伝えにくさの認識：『あなたは、MSMの受検者のなかで、自己のセクシュアリティを周囲の人間関係や、検査担当者に、伝えるのが難しいと感じている人がいると思いますか?』に対する回答。

受検者のなかで、セクシュアリティを伝えるのが難しいと感じている人が、研修前の「たぶんいる」が研修後には「必ずいる」という感覚に置き換わり、「たぶんいない」が消滅した。



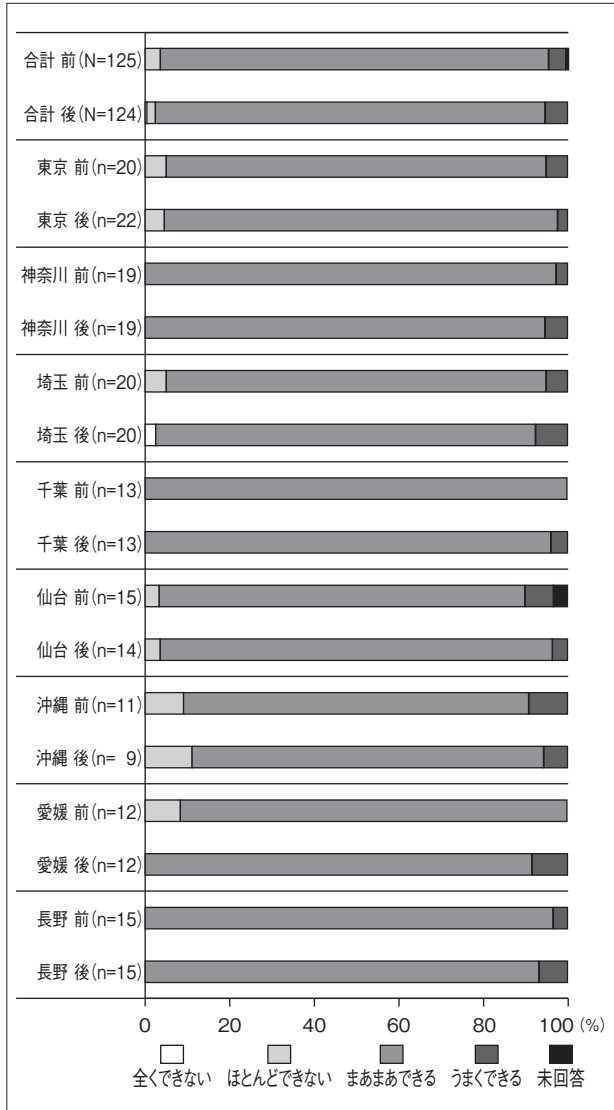
9. 伝えにくさへの配慮の自信感：『担当した検査や相談のなかで、検査のきっかけとなった行為について、話したくない、聞かれたくないという受検者がいたとします。あなたは、その受検者への対応がうまくできると思いますか?』に対する回答。

参加者全体で研修前後の比較をすると、「全くできない」「ほとんどできない」と回答した人は研修前の61%から研修後は26%に低減し、「まあまあできる」「うまくできる」と回答した人が研修前の38%から研修後は71%に上昇した。各地域で同様の変化がみられ、話しにくいことを抱える受検者への配慮をすることについての自己効力感が上昇した。



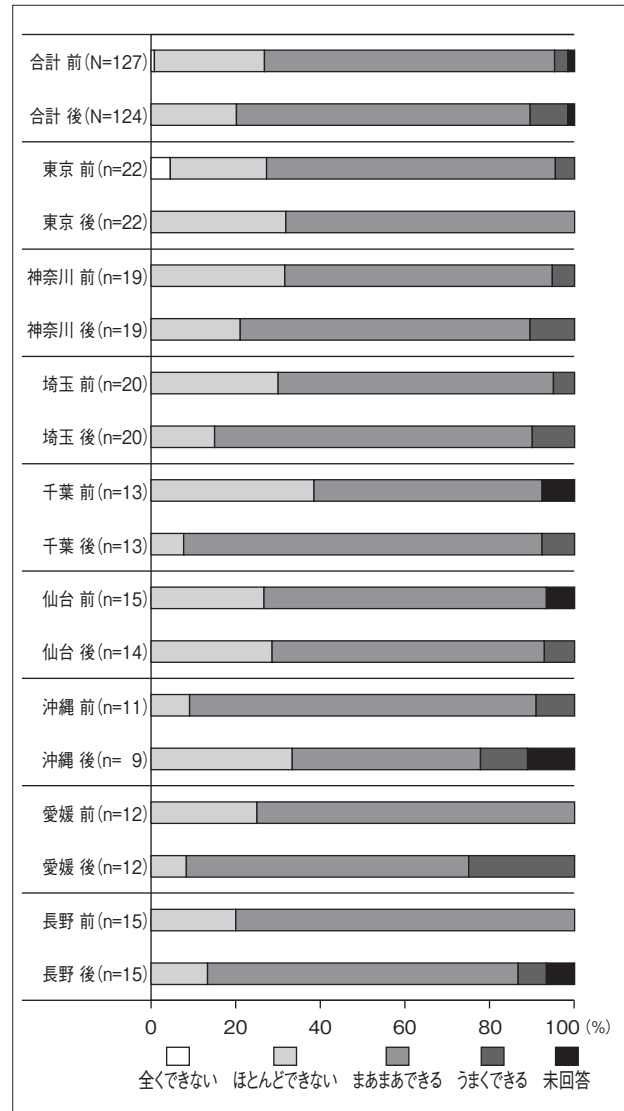
10. 多様への対応の自信感：『自分と異なる価値観、生活スタイルを持つ受検者にも、他の受検者とかかわらずに、接することができると思いますか』に対する回答。

多様さへの理解や対応については、MSMへの理解を目的とした研修会であったので、研修の効果が認められた。



11. HIV陽性者への対応の自信感：『あなたのいる窓口に、HIV陽性者からの相談が寄せられたら、他の相談者と同様に対応できると思いますか?』に対する回答。

特に陽性者への対応についての内容が研修に含まれている訳ではないが、陽性者の手記を朗読することや、研修スタッフとしてHIV陽性者が参加していることなどから、陽性者対応への準備性を高めることができた。



## まとめ

アンケートを研修前後に記入してもらい、前後の結果を比較し評価をおこなった。カテゴリーは6項目で「性やセクシュアリティへの抵抗感」、「MSMの身近感」、「伝えにくさの認識」、「伝えにくさへの配慮の自信感」、「多様さへの対応の自信感」、「HIV陽性者への対応の自信感」である。

研修前後の回答について、研修の効果を有意差1%で検定(T検定)した。東京都は集約情報だけであったので、今回は検討からはずした。

結果は以下のとおりであった。全体としてはすべてのカテゴリーで有意差が認められた。すべての地域で有意であったのが、「MSMの身近感」と「伝えにくさへの配慮の自信感」の2項目であった。

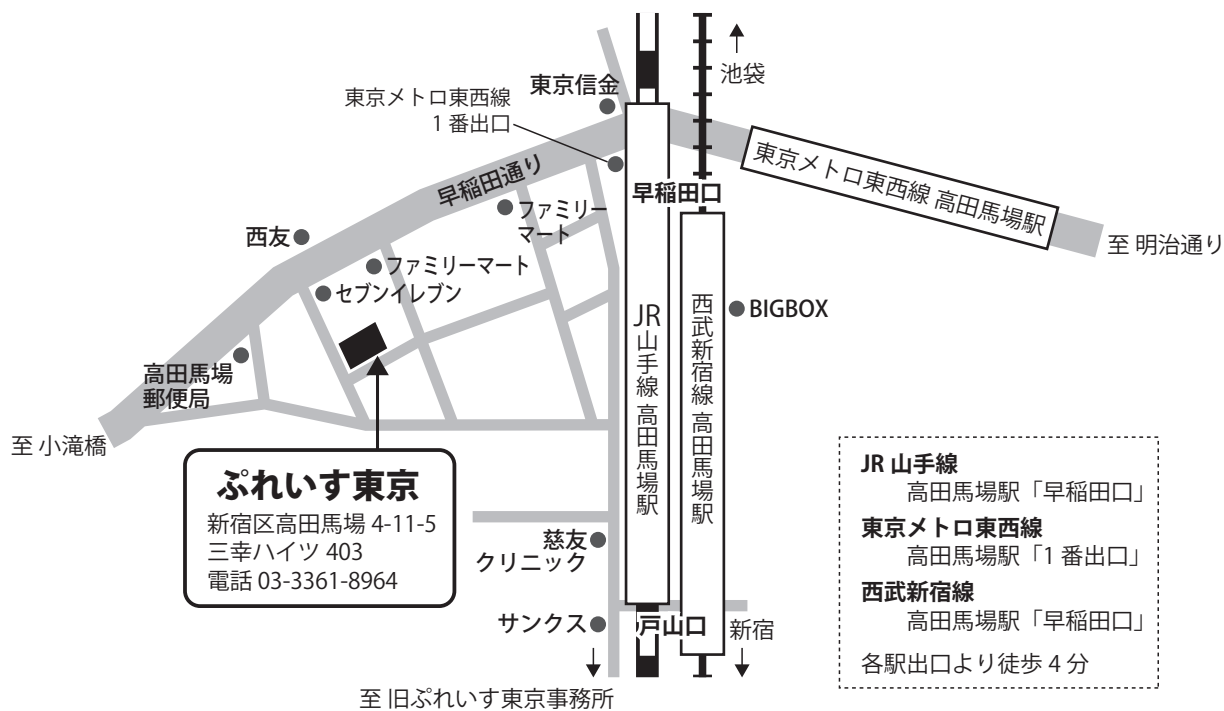
特に「伝えにくさへの配慮の自信感」は研修前後でおおきく変化した。HIV検査サービスの提供者は、日々の多忙な日常業務のなかで、クライアント(受検者)からのフィードバックを得る機会はあまり多くないと考えられる。しかし、このような研修の機会を得て、「受検者の視点に立った」検査・カウンセリング対応を学ぶことが、多くの研修参加者にとって有効だったと思われる。

また、本研修は、MSM向けにHIVに関する啓発を行うコミュニティセンターやNGO、評価情報をフィードバックする研究機関が運営に関わっている。研修に参加することで、住民のために検査サービス提供する保健所、検査所、一部医療機関などが、相互に顔が見える関係になることにより、地域のHIV検査環境整備にも役立つと考えられる。

1%有意差	6:性やセクシュアリティへの抵抗感	7:MSMの身近感	8:伝えにくさの認識	9:伝えにくさへの配慮の自信感	10:多様さへの対応の自信感	11:HIV陽性者への対応の自信感
全体	あり	あり	あり	あり	あり	あり
仙台	あり	あり	なし	あり	あり	なし
愛媛	あり	あり	なし	あり	あり	あり
埼玉	あり	あり	あり	あり	なし	あり
長野	なし	あり	あり	あり	なし	あり
千葉	あり	あり	あり	あり	あり	あり
神奈川	あり	あり	あり	あり	あり	あり

以上






---

ふれいす東京 2013 年度年間活動報告書

---

2014 年 5 月 25 日 発行

発行 特定非営利活動法人 ふれいす東京

Positive Living And Community Empowerment TOKYO

〒169-0075 新宿区高田馬場 4-11-5 三幸ハイツ 403

TEL : 03-3361-8964 FAX : 03-3361-8835 E-mail : office@ptokyo.com

郵便振替口座 : 00160-3-574075 「特定非営利活動法人 ふれいす東京」

URL : <http://www.ptokyo.com/>

Facebook : <http://www.facebook.com/PLACETOKYO>

Twitter : @placetokyo (<http://twitter.com/placetokyo>)

印刷 株式会社翔美

---

